

新しい学風を興すために

第二集



雲仙合宿教室の記録より



大学教官有志協護会  
国民文化研究会

編

—大学生による“雲仙合宿教室”の記録より—  
新しい学風を興すために（第二集）



## はしがき

ここ数年、政局の転換を迫るような重大な政治的事件もなく、まずは天下泰平の日々が続いている。しかし、この安定は、われわれ自身の責任と意志によつて勝ち得たものではなく、きびしい国際政治の谷間に、偶然に作り出されたものに過ぎない。国論は四分五裂し、政策論争は水ぎわまでという政治の常識も全く省みられない。憲法には、国家防衛の義務も、国家機密保持の規制も全くうたわれてはいない。峻爾なる使命をもった自衛隊は単なる「職業」として見られており、労働組合は特定のイデオロギーを奉じた「政治団体」と化し、大学は「反体制運動」の牙城になった。保守派の政治家には、派閥や個人の利益が国家的利益に優先し、革新派の政治家には、階級や組織への忠誠が、国家への忠誠に優先する。いわゆる「安定」の、よつて立つ基盤はかくの如く脆弱である。過剰な繁栄も、所詮荒地に咲いた仇花のごとき感を禁じ得ない。国民の自由にして旺盛なエネルギーが、整然と秩序立つて結集された国家という生命体を、日本人は感覚できなくなつてしまつた。杞憂であれば幸いだが、收拾のつかぬ破局が来てからでは既に遅い。われわれは自分で出来るところから、このゆがみを正す努力を積んで行かねばならない。

国内の泰平ムードにひきかえ、昨年から今年初めにかけて、中ソ論争、核停条約締結、フランスの中共承認と、国際政局はめまぐるしい激動を続けた。それら一連の動きは、いずれも自国の国家的利益の伸張、確保を前提とした、きわめて現実的な動きであつて、世界はようやく米ソの二元対立の時代から、多元化への兆しを見せはじめた。こういうテンポの早い国際政治の動きは、観念的な流行思想の枠では把握できない。少くともそれは、日本のジャーナリズムに支配的な、漠然たる冷戦緩和のムードとは、全く次元の違つたきびしさの上に展開されている。故ケネディ大統領が、「自分たちのために国が何かをしてくれることを望まざ、自分たちは国のために何ができるかを考えよ。」と訴えた呼びかけに、敏感に反応するだけの健康さを、アメリカ国民は持つていた。恐らくソビエトに於ても、国家への献身は、イデオロギー以前の自明の問題であらう。国際政治とは、所詮ナショナル・インタレストのあらわな角逐の場であり、平和とは、このナショナル・インタレストの調整によつて得られる、ある状態に過ぎない。このダイナミックスを理解できず、平和を固定した観念としてしか把握できないところに、進歩主義思想の重大な誤謬がある。

しかし、現実の動きは、教条的な左翼理論を置きざりにして進んだ。思想界もようやくマルキシズムの呪縛から脱却しはじめた。圧倒的な事実の力の前には、架空の幻想や観念は崩

壊せざるを得ない。安保闘争の全学連主流派の指導者であつたある高名な思想家は、「マルキシズムは今やソビエトに於ても、儀式用、宣伝用になつた。」と言ひ、その鮮やかな「転向」を満天下にさらした。イデオロギーの狂信者は別として、自己の乏しい思想の粉飾のため、それを手段として使つていた人々は、ようやく時流の動きを見て、その言説を変えはじめた。かれらは無垢な青年たちを矯激な政治行動にかり立てた責任に目をつぶつて、再びしたりげな教説をくりかえすのであろうか。

青年たちは今、安定の中に放置されている。ひとところのような激発的な政治行動に走る者たちは、たしかに、少なくなつた。しかしながら彼らの溢れるようなエネルギーは、今ではひたすら自己の榮達と眼前の享樂にそそがれている。そして、政治主義の学生にしろ、個人主義の学生にしろ、その底流をなすものは、やり場のないニヒリズムである。窮極に於て人間は孤独な個体であり、その個我の欲求を充たすこと以外に、どこに人間の生き甲斐があろうというものが、凡その青年たちの人生観の中核となつてゐる。権力と地位と金が、青年の至上の目標となつた時、一國の頹廢はここに極まるというべきである。

だが深く思いをひそめて、この青春の喪失を見つめてゐる人は意外に少ない。為政者の

「人づくり」のスローガンなどではどうにもならぬほど、頽廢は根深いのである。戦争の残した最大の傷痕はまさにこれであろう。われわれの合宿教室は、この現状に対するやみがたい思いから生まれた。青年たちの胸に、かけがえのない生命の尊さと、人間として生れて来た責任を呼びさまさねばならない。煩瑣でいびつな論理によって、がんじがらめにされている彼らの情意は、一刻も早くその本来の素直さをとりかえさねばならない。そして、現実に即した着実な思想によって、正しい学問への道が一日も早く切り開かれねばならない。いかに迂遠であろうとも、これこそが国を正す唯一の道であろうと信ずるからである。

合宿教室は、学生諸君が個我の殻を破って、友情の世界に開眼する場であればならない。国の運命と人生の課題に、真正面から真剣にとり組む体験を共にすることによって、失われつつある連帯感が回復されねばならない。権力やイデオロギーによって、人為的に作り出された連帯感ではなく、青年の内発的な意志によって魂がつながり合われてゆくならば、それは、国の根底を培う大きな力となるであろう。合宿教室の中で、参加者たちがひとしく学び取ったものは、人間は性格や能力の外的差別を越えて、心を通わせ合うことができるという確信であつたに違いない。その体験こそ、人間の生は「他と共なる生」であり、機構や制度の限界をカバーするものは、人間相互の信頼に外ならないことを教えたはずである。そ



こに、人間の自己疎外を突破する一つの道があろう。われわれが、聖徳太子の御思想にふれたことも、短歌の創作を行った理由も、おのずから納得していただけることと思う。

われわれの立場は、左翼でないことは勿論、断じてまた右翼でもない。また、その二つを足して二で割った、いわゆる中道思想というごときものでもない。むしろ、われわれの念願は、国民を簡単に左右に色わけして怪しまぬ機械的思惟の克服であり、人はまごころによつてつながり得ることの確認であつた。それこそ、われわれの人間論と国家論と人類社会への志向を一貫する基本的姿勢であつて、「国民同胞感」という言葉にこめた、われわれの無量の思いも実にその一点にあつた。

われわれは、今日の日本のひずみを正す、ささやかな努力の一端として、心をこめてこの一冊の記録を編んだ。一人でも多くの方々が、われわれの提示した問題と真剣にとり組んで下さることを、心から祈念するものである。

終りに、竹山、木内、木下の三先生には、御多用中にもかかわらず、快く講義要旨に訂正加筆していただいた。ここに厚く御礼申し上げ、御協力を心から感謝する次第である。

昭和三十九年二月十一日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき	1	
一、合宿教室の意義		
「戦後」二十年の日本とわれら同人の祈り	3	
第八回「合宿教室」のあらまし	31	
二、合宿教室における講義		
物の考え方	評論家 竹山道雄	59
最近の世界と日本	世界経済調査会理事長 木内信胤	111
(附) パネル・ディスカッションにおける木内講師の提言		

現代の政治的危機……………政治評論家 木下広居 161

三、合宿教室における輪読と短歌創作

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読……………小田村寅二郎 195

短歌創作について……………山田久田正輝彦 249

(附) 雲仙合宿歌集―抄…………… 288

あとがき…………… 297

国民文化研究会発行図書目録



■ 合宿教室の意義



「戦後」二十年の日本と  
われら同人の祈り

小田村 寅二郎







## 一、「戦後」とはどういう時代であったか

われわれ日本国民は、いまの世代を、長らく「戦後」という言い方で言い馴れてきた。「もう戦後十何年になったが」とか、「もう戦後十何年にもなるのに」とかいうように。

中年以上の年令のわれわれ国民は、この「戦後」なることばを、それほど深く考えずに、ついつい使い馴れてきてしまった。だがその「戦後」なるものも、ふと気付いて振り返って見れば、はや二十年という歳月を重ねている。近代社会が一刻を争って、急テンポに変化を進めているのを念頭に入れば、いつまでもそんな中途半端な呼び方で、自分たちの生きているこの貴重な世代を、呼び続けていていいのかどうか、それが問題のような気がしてくる。

こういう私にたいして、日本の目覚ましい経済発展に自己満足している人々は、いまさら戦後ムードを云々する私の馬鹿さ加減をあざ笑うかも知れない。「何をいま頃ボヤついているのか。わが日本は、戦後ムードなど、すでに遠の昔に乗り越えているではないか」と。

しかし私には、断じてそうは思われない。経済の繁栄を除いては、依然として戦後ムードが日本中にみちみちていて、大切ないくつものことが、いつまでも「間に合わせ的」に処理されているように見えてならないからである。

かえりみれば、十年一昔という古い言葉もあるように、二十年という歳月は、決して短いものではない。二十年という数字は、一世紀百年の五分の一に当たっているし、また西洋紀元からの総経過年数に比較しても、その百分の一強に当たるのであって、それ相應な時代的な意味を持たなければならぬ一つの単位数字でもある。それに、日本だけのことについて考えてみても、同じようにそれは決して短いものとはいえない。すなわち、日本の近代化が明治初年に始まったと、かりに仮定して、昭和二十年の第二次大戦の終末までが、約八十年であり、「戦後」なる時期の二十年を加えれば、日本近代化の足跡は大体百年ということになる。この明治のはじめから昭和二十年までの八十年に対して、「戦後」なるものは、その四分の一に当たるといふ馬鹿にならない大きな数字を示し、同時に日本近代化の通算百年の中で、実にその五分の一を占めるということになってくる。

こうみてくると、この「戦後」なる時期は、歴史的にも、すでに一つの時期を画しているともとてもよいほど、かなり長い時間を経過してゐるではないか。われわれ日本国民は、いまなおわれわれの周辺に残っている「戦後」的ムードから、もうこの辺りで完全に脱却し、次の世代の建設に向かわねばならないのではないかと思う。

そこで、私はとにかくここでは、「戦後」なるいままでのこの時代を、いま一度見直すことにし、私なりの目にとまつたこの時期の時代性格を、なるべく客観的に把握しなおして置

きたいと思う。

## 一、「戦後」という言葉のもつ「間に合わせの」な感じから生じた「連鎖反応」は何であったか

昭和二十年八月十五日の終戦直後の頃は、全日本の国土も人心も、荒廃の極にあった。「復興」という言葉が、すべての人々の口を衝いて出てきたのは、それからかなりの月日が経ってからであったほど、当時の人々は、半ば放心状態で占領軍の進駐に対応した。物心両面での荒廃が、当時の日本の社会世相の特筆すべき実情でもあった。

こうして「戦後」なる世代がその第一歩をふみだしたのであるから、当時は、村も町も市も、都道府県もまた政府も、すべてが、そのすること、なすこと、悉く占領軍に「お伺い」を立てながら、「応急的」「臨時的」「間に合わせの」なことから出発せざるを得なかった。衣食住のおどろくべき不足に加えて、人心もすさまじっていたこの事態に対処しては、とにかく、なにか目先のことから片づけていけば、そのうちにはなんとかならう、という気持ちで、当時のわれわれ日本人は、すべての物事を処理していったのである。

しかし物事に馴れてしまうということは恐ろしいことである。そうした生活姿勢は、日が経つにつれて、人々の精神的な人生態度や人生観にまで、それ式の見方、判断のしかたが浸

透していった。いな、われわれの人生態度はどうあるべきか、とか、人生観はどのようなに持つべきかなどということをも、まじめに考えることさえ、面倒くさく思い、そんなことにかまっていられるか、といわんばかりに、自己中心だけで物事を考えていくような習慣がついてしまった。それは二十年を経過したいまも、なおわれわれ自身の心の中に、またわれわれの周辺の社会思潮の中に、依然として生き続けているのではなからうか。

### 三、だが、経済と物質に関するいわゆる有形的な課題については、 日本国民はすばらしい叡智を働かせた

それでも物質面、経済面に関する限りは、それが切実な身近かな問題に結びついているために、やがて人々は、それらの根本的な点に関心を集中するようになって、応急的、臨時的、間に合わせ的に物事を考えるのをやめた。そして「着実さ」をつよく求めるようになり、また永続性を目標に立てるようにもなった。同時に経済活動の中においても、人間相互の信頼感を樹立していかなければ、手形のやりとりも、事業そのものも、とうてい健全な発展を期することができない、と改めて認識するようになった。

今日の日本の経済的繁栄は、いまや世界の注視のまとなつてはいるが、われわれ自身は、その繁栄のかけに、このようなわれわれ日本人自身の経済活動における心の持ち方の変

化が、時宜を得て果敢に行なわれたことを、決して見のがしてはならないと思う。それはいかえてみれば、一応日本人のすべてについていえることであろうが、お互いの物質生活、経済活動、産業運営などに関しては、各自の「経済本能的な叡智」が自然に働きただして、無意識の中であつたかも知れないが、終戦以来の応急的、姑息的な物の考え方から、きびしく脱皮していったことを意味している。われわれ国民は、「戦後」と呼び合つてきたこの二十年の比較的早い時期において、すでにこの面に関する限り、然るべく各自の足どりを切りかえていたのである。

こうして経済の復興と産業の繁栄は着実に進展することを得た。そこには、日本人の叡智を裏づけた撓みない努力のあつたことも見のがせないし、また日本民族の本能的ともいえる進取の気象が大いに寄与して、今日の成果にたどりついたわけであるが、とにかく大局的にみて、日本人は比類のない賢明な歩みを辿つたと見るべきであろう。

#### 四、しかし、無形的な諸課題に問題を戻してみると

有形的な諸課題、衣食住をはじめとしての物質面、貿易産業に関する経済面などにおいては、応急的、間に合わせ的な姿勢から、ものの見事に脱皮して、「あなたまかせ」と、雄々しく訣別しえた日本国民も、無形的な精神・思想の諸課題にたいしては、残念なことには、こ

の二十年の長い間、殆んど見るべき成果を残していない。

經濟の繁榮と産業の發展だけで、いいかえれば、個人の衣食住と貿易の振興と、国家予算の充分な徴達さえできれば、国家の問題が解決すると考えるなら、なにもその外のことを余計に心配することはなからう。しかし国家の独立、ことに自主的独立という意味における真の国家の独立を達成しようというのなら、經濟問題などの有形的課題に較べて、決して優るとも劣らない数々の無形的な課題があるはずである。

例えば国民一人一人は、人間のおのの幸福を目指して、各自の生活目標をしっかりと持っているが、それはいわば、有形的な生活目標を持っているというにすぎない。しかし国民一人一人はそれと同時に、いなそれに先立って、自己の属する国家への忠誠について、日頃どういう考えを持っているべきか、という問題、いいかえれば、国民の一人としての責務感をどのように各自が把握すべきか、という問題をはじめとして、国家全体の運命や抱負について、国民がお互い同士で語り合う気持をも、つね日頃から用意していなければならぬ。また国家の前途についても、国民同士という立場に立って、お互いに心配し合ったり、喜び合ったりする豊かな国民的一体感や、国民同胞感もまた、老若男女を通じて全国民の中に、同じように拡がつていかなければならぬ。なぜなら、国家が存在するとか、国家が独立しているとかいうことは、その国民のあいだに、精神的統一が達成されていなければ意味をな

さないからである。国家とは、いうまでもなく、単なる人間の地域的集団をさしている言葉ではなく、精神的統一、理想の一致に対して名づけられる言葉だからである。

これらのことは、洋の東西を問わず、古今の別なく、一つの国が自主的に独立していると思見される限りにおいて、つねに、他国民によつて、その国の独立内容の評価のために、もつとも基本的な価値判断の要点とされてきたものである。いくら戦争放棄と無軍備とを自分たちの憲法によつて規定したからといって、それだけの理由で、日本だけが、この点で特別な例外の国となりうるわけもなく、戦後の日本人だけが、その点で別の価値評価を、世界各国の人々から受ける資格があるわけでもなからう。

国家という一つの社会構成を営む以上、そこに共通の自覚と責務感が充満していてこそ、世界の一員としての国家の意義が確立する。そしてそれらの国家が、各人各様な、しかも自負と誇りと特色とを発揮しながら、秩序ある統一を保持して存立し合うところに、世界という社会の秩序も、内的に高められていくものであろう。したがって、文化的な一流国家ならば、いかなる国も、その国民自身の不断の反省によつて、国民の精神生活の充実が進められなければならないし、また国民自身による共同的努力が、そこに注がれていかなければならないことは、改めて指摘するまでもないことである。

## 五、「戦後」なる時期のあいだで、いつもあと廻しにされてきた

これらの無形的な諸課題は、一体どのような推移をたどって

きたか——とくに「民主主義」をめぐる

終戦直後、いち早く国家再建の目安として打ち立てられた「民主主義」なるキャッチフレーズは、一体どうしてわれわれの周辺に生まれてきたか。その発生経過はどういうものであったか。

一言にしていえば、それは、国民一人一人の心の中で充分な吟味を経て生まれたものではなかった。すなわち日本国民大衆の積極的な創意と合意が得られて、それが採用されたとは、決していい得なかつたのである。人みなが、自己の生存のことだけでせい一杯で、いきおい利己的に走らざるを得なかつた荒廃した世相の反映もあって、当時は、精神とか思想などはどうでもいい、とする風潮であつた。大多数の国民は、そんなことに各自の思索を集中する余裕など、ほとんどなかつた。

いまの若い人たちは、戦後の日本では、国民の総意によつて、民主主義革命が成就され、国民一致して民主主義にあこがれてその建設に邁進した、と教えられてきている。それゆえ、いまこうしたことを改まつて若い人たちに伝えることは、大人たちとしてまことに相済



まないことかもしれない。だが、事實は事實として認識しなおしてもらわねばならぬし、それが中年以上の国民にとつて恥さらしではあつても、若い人々の前に、われわれはそれを率直に告白すべきであらうと思う。

すなわち、いまわれわれが呼び合つている「民主主義日本」というものは、実は全国民が放心状態に近いさなかに、その孤々の声をあげたものである。

一般国民の側では、そのような状態で受けとつた民主主義であつたが、実は、占領国ならびに占領軍の側では、深い意図を秘めて、それを日本に持ち込んできていた。すなわち、第二次大戦中に日本が見せつけた、あの強大な抵抗力——義勇奉公の精神に裏づけられた恐るべき献身が、彼らの目には焼きつくように恐ろしく感ぜられていた。占領国側は、その痛感に基づいて、日本占領のこの機会に、いいかえれば、日本が「無条件降伏」をしたこの千載一遇のチャンスに、なんとかして日本を骨抜ききの国にしてしまおうと、日本弱体化政策を狙つてやつてきていた。それは、戦時中に彼らのあいだで持たれたヤルタ会談その他を見ても、充分にうかがい知ることができる。

この政策実現のあらわれの、しかもそのポイントとして登場したのが、いわゆる民主主義の徹底、ないし民主主義革命の実現という言葉であつた。ここにいう日本弱体化とは、とりもなおさず日本国民の一人びとりから、従前のような強い国家意識を取り去らせようというこ

とを狙っており、彼らの国家意識よりも、日本人の国家意識をより低いところにおさえてしまおうとする意図を含んでいた。義勇奉公の精神など、近代文明社会ではおよそ価値のないものと思わせるための手段にも活用した。(ただしここに注意すべきは、日本および日本人をそのように仕向けた占領国側自身は、すべて強い国家意識の肯定者であり、彼ら自身は、それが近代文明社会で価値なきものなどは、毛頭思つてもいなかった、という点である)

これにたいして、日本の共産主義者や社会主義者は、もともと日本の国体を否定したい気持であつたし、そうした思想の持ち主が多かつたから、この占領軍の意図を知るが早いか、きわめて意欲的にこれに迎合していった。当時、この外に占領軍に近づいていったものは、いつの世にも出てくるオポチュニストといわれる人たちがあり、また共産主義者や社会主義者でない自由主義者たちのうち、とくに日本の国体が非文化的な遺物だと思つていた数多くの学者、文化人などもあつた。この人たちは、その後、保守・革命両側に、いろいろな分かれていくが、とにかくある意味で、占領軍の民主主義革命を喜んで迎え入れた人たちであつた。

しかし同時に、占領下なるゆえにやむを得ないこととしながらも、依然として日本の伝統の尊さを心に宿し、日本の国体は決して非文化的のものではなく、敗れた者に与えられた運命として、悲しい思いで民主主義をうけ入れていった数多くの保守系日本人がいた。当時の一

般国民の大多数は、これに属していたといつてよいと思う。その際この人達は、民主主義日本の意義を、できるだけイデオロギー的でなくうけとろうとし、人間尊重とか、多数の意見を重んずるデモクラシー精神などは、西洋とはちがった形ではあつても、その精神において古くから日本に伝承されてきていることに心をいたし、民主主義もまた日本に摂取しうるものとしての姿勢でこれを迎え入れた。

「戦後」の日本の民主主義なるものは、おおむね、このような出発をし、このような異質の諸要素を抱えながら芽生えていったが、その後の政治の勢力にもみるように、それは次第に保守と革命との両者にしぼられていくことになつたのである。

したがつて、戦後二十年にわたる日本の民主主義は、このような経過を経て、同じ民主主義の旗印という下に、氷炭相容れないものが結集した形となつた。そして両者ともども、同床異夢をむさぼろうとした所に、現在の日本が直面している、いかんともしがたい大きな無理が芽生えてきたのである。爾来、長きにわたつて、政権の座をほぼ独占的に占めてきた保守政党ならびに保守系の人々は、その後の機会に折を得て、この呉越同舟の腐れ縁を絶ち切るべきであつた。しかし彼らは、遂に今日までそれを果たし得なかつた。あるいはそれに必要な勇氣と決断と信念とに欠けていたのかも知れなかつた。保守系の政党とその党人たちは、つねに政治の陽の当たる場所に安住し続けたためか、困難な、やりにくい仕事はい

つも避けて、目に見える有形的な課題の解決の方にだけ精力を集中してきた。「戦後」の日本が経済面では成功し、思想、精神面でみるべき成果を得られなかった理由は、保守党ならびに保守政党人たちが、精神的に安易な道を歩もうとしてきたためであつたかもしれない。いずれにしてもその結果、国会では、アメリカ的な勢力が勝ちを占め、国民大衆の場、ことに子どもたちの教育の場や、国立大学の学生自治会などでは、それに反抗するソ連的な勢力が圧倒的な力を示すという、まことに奇妙な国、いまの日本をつくり上げてしまったのである。しかも二十年の長きにわたつて、それは一向に解決のきざしをみせていないし、またこのままでは、その矛盾が解消できる見込みもなさそうである。

## 六、民主主義精神は宙に浮いてしまふ

そこで、こういう奇妙な事態に立ち至つた原因を、いま一歩たずねてみなければなるまい。問題は、なにも民主主義に限つたことではないが、このように思想が異り、人生観の違う人々が、同じ主義を標榜して政治活動もし、教育活動に従事しだすと、その世の中は一体どういうことになつていくか。まず、そこを注意ぶかくみてみる必要がある。

こうした場合に双方に共通するものは、その主義に描かれている理想というわけにいかなくなるから、いきおいその主義が主張する制度とかシステムとかの外形的なことだけに限ら

れてしまう。すなわち、その主義の理想そのものは、各々の同調者のあいだで認め合われるだけで、両者双方に通用する余地がなくなってしまう、両者は内容的には、共通の広場を持ち得ないことになる。そうなる、両者が合意できることは、非常にせびめられてきて、同じ主義を旗印にしていながら、理想もちがい、目的もちがって共通点がなくなり、最後に残るものは、最もレベルの低いもの、すなわち、その主義の名の下で共通しうる僅かな手段・方法・形式などに限られてしまう。それしか両者の類似点・相似点はいえなくなるのである。

では、具体的にわれわれが経験してきた民主主義の場合についてみてみよう。そこでは、一方に日本の伝統文化を肯定して出発しようとした民主主義があり、他方では、日本の伝統を完全に抹殺しようとしていた民主主義があつて、両者がともども、臆面もなく共存しようとしたのであるから、その各々の理想と目標は、とうてい合意に達するすべもなかった。そのため、日が経つにつれて両者がかかげる民主主義という看板は同じであるが、内容的には共通のものが全くなり、ただ「多数決」という議事決定のテクニクだけが、その共通点として残ることになった。すなわち両者は、多数決で事を決めようという一点だけで、同じ民主主義者であるというにすぎなくなってしまったのである。

こうなつてくると、お互いに心が通い合うこともなく、信頼し合うこともできない間柄となつてしまうから、その必然的な結果として、別に、共通した一つの現象があらわれてき

た。すなわち、「闘争」的姿勢がそれである。多数決によつて一つの結論が出されても、この場合は、その実行がなかなか円滑にいかない。なぜ円滑に事が運ばないかといへば、多数決を尊ぶという民主主義の精神は、そこではすでに枯渇してしまつて、多数決というテクニクだけで合意が得られているにすぎないからである。ゆえに、合意とはいつても、実際には、真の合意の精神は欠けてしまつていて、合意という形式的納得だけがただ気安め程度に残るだけとなる。そこで、投票の結果、少数しか得られなかつたグループは、その結論を尊重せずに闘争を展開したり、また前もつて結論がでないように投票妨害などの、非民主主義的な行動にでる。すると、そこには悪循環が生まれ、多数派の方も、いつしか多数決の意義など忘れてしまつて、多数獲得のテクニクの方に力をそそぐことになる。議事の審議というもつとも大切な行事についても同じであつて、良識の開陳によつてそれが進められるのではなく、はじめから賛成と反対とがきまつていて、議会はただ双方の揚げ足とりの場として開かれているにすぎない。民主主義の尊い精神など、このような場のどこに存在しうるのであろうか。

七、子どもたちへの道徳・情操教育も行きづまり、青少年  
非行化を防止する抜本策も立たない

このような民主主義の受け入れ方のでたらめさは、教育の面にも、その影響を及ぼさずにはいかなかった。学校教育の中で子どもたちは、「いまの日本は民主主義の時代である」と教えられてきたが、実際問題としては、民主主義の理想については、深く教えられることがなかった。本来情操教育とか道徳教育は、主義によってそれほどちがうものではなく、どの国でも、人間としてのあるべき節度や礼節が教えられ、愛国心はもとより、祖先を敬い、長老をいたわり、幼弱をいつくしむことが、きびしくしつけられる。アメリカ・ソ連の二国を例にとるまでもなく、それぞれの民主主義の理想と精神を訴えながらも、各国における義務教育は人間性の涵養にその主眼をおいている。しかしながら、戦後の日本の教育の場では、その当たり前の教育が行なわれなかった。なぜであろうか。

人々は、占領軍がそれらの教育を阻止したことを原因に挙げてきたが、日本自身の側にも、大きな原因があった。すなわち、共通の広場を失っている二つの民主主義が、そこに同居共存してきたがためである。この二つは、ともに祖国を愛すべきことその他、情操と礼節の大切なことなどはそれぞれ充分に理解している。しかし一方の祖国愛は、他方の祖国愛が消滅させられたときにのみ意味を持ち、一方の伝統尊重は、他方の伝統尊重と全く別の立場に立つ。従って、祖国愛も伝統尊重も余り深入りしては教えない方が無難だ、ということになつてしまう。従つて一つの民主主義に統一されている国々では、主義以前の、思想以前の問

題として扱いうるこれらの情操教育・道徳教育が、日本では、すべて政治性を持つてしまうことになったのである。

日本の教師たちは、政治制度や民主主義制度の形式についてなら、民主主義を子どもたちに教え得るが、国民精神としての民主主義の精神は、とうてい教え得ない。なぜならば、異質の民主主義が現実政治の上で同居しているために、二つのうちの一つを選択して教えれば、いずれを教えても、教育の場に政治を持ち込むことになり、いずれかの側から偏向教育という指弾を受けなければならぬからである。

日本に社会主義政権や共産主義政権が生まれたら、いまの日本の保守党のような矛盾は、こうした面では容赦なく片づけられてしまうであろう。日本の保守政治が問題にされなくてはならない点は、ここにも見出される。一体精神を除外した民主主義教育、価値判断を避けた歴史教育、そんなものが、教育の名に値するものかどうか、また教育を通じて民主主義の浸透をはかっているなどといえるのかどうか、われわれ国民は、よくよく考えてみなければならぬであろう。

さらに、近来とくにやかましくいわれる青少年の不良化、非行化の問題にしても、精神の欠けたいまの教育の現場を見さえすれば、これは、むしろ当然の帰結というほかはない。糊塗的な政策や対策で、これが防止をはかろうとするのは、はじめから無理ではなからうか。



小学一年から中学三年の義務教育を終えるまで、国旗掲揚という場にのみ得られる、あの国民的感激を、ただの一度も持つことができず、また全校の生徒教師がそろってともに声を合わせる、あの厳肅な国歌斉唱の体験も得られなかった多くの子どもたち、幼いころの家庭生活でしつけられた礼儀作法も、学校教育の中で相反した知恵をつけられて戸迷いし、逆に親たちにたいする反抗的な闘争心さえ植えつけられて家に帰ってくる子どもたち、忍耐力の大切なことや犠牲的な精神を重んずべきことを、知識の上では教えられても、それを身につける精神訓練を受け得なかつた子どもたち、まことにその子どもたちにはたいして、われわれ大人たちこそ、罪深い二十年を過してきたことについてきびしい反省が迫られているのではないだろうか。青少年非行の激増といまさらさわいでも、来るべきものが来ているだけで、その根はまことに深いことに思いをいたさなければなるまいと思う。

#### 八、池田首相は「人づくり」を提唱されたが、その成果を期待するのは無理ではなからうか

池田首相は、一、二年前から「人づくり」の重要性をつよく国民に訴えられた。おそらく首相は、現在の日本に何が欠けているかに気づかれたからであろう。問題点の所在を正しく認識されたわけである。「人づくり」とは、首相のいわれるとおり「国づくり」の基本であ

り、国民精神の向上と統一に関する根本問題であろう。たしかに池田首相はいいところに着眼されたといえる。

だが、その後の推移を見ると、当時の掛け声のにぎやかさに反して、現実的には「人づくり」の推進は容易に目鼻立つてこない。むしろおきまりの先細りの傾向さえ見え出してきた。おそらくこの調子では、首相ご自身も気のあせりを感じておられることであろう。しかし、たいへん失礼ない方かも知れないが、私をしていわしむれば、所詮それは池田首相には無理な願いであつたと思う。なぜであろうか。気づくままにいくつかの点を指摘しておきたいと思う。

(一) 第一にいうべきことは、いままで述べて来たように、日本の戦後の保守政党が、自己の樹てている民主主義の理想実現に、決して忠実ではなかつたという点である。

異質の民主主義が、政治の場、与論の場に存在することは、当然のことであつて、言論の自由の立て前からも、文化の発展の意味からしても、大切なことである。しかし政権担当という行政組織の統轄の責に任じてきたわが保守党は、政治担当の責任の範囲において、自己の理想の国民への浸透をはからなければならなかつた。それは政治家の第一の義務であり、責任である。しかしまことに残念なことに、歴代の保守党は、それについて、まことに不誠意であり、不熱心であつた。有形的な国民課題としての経済諸問題には、おどろくほどの熱

の入れ方をするが、無形的な課題たる思想とか精神とか教育とかについては、いつも逃げまわってきた。それらは政党人の個人的利益や選挙地盤の問題に結びつきにくいからでもあつたろう。議員たちの中には、政治家というよりも、議員という高給と権力のポストに就職している気持ちの人々が多くなつたためかもしれない。いずれにしても、その保守政党の姿勢そのものがいけなかつた。

社会党や共産党が天下を取つたら、おそらくそんな政治家としての怠け方は、決してしないであろう。憲法も教育も、自己の民主主義の方向へ移すべく、政党の全能力を結集してやるにちがいない。それが政治というものであり、政治はそういうところに意味をもつがゆえに、一面おそろしいものでもある。ともあれ今日までの保守党が、表向きには自己の主張する民主主義の理想を高く掲げながら、政治面で、行政面で、また教育行政面で、その浸透をはかることを怠つてきた「いい加減さ」「不真面目さ」は、政党として、また政治家として問題にもならぬほどお粗末であつた。

そこで、池田首相が「人づくり」の重要性に気づかれたことはよかつたにしても、それは首相の口から国民に訴える形で出発すべきものではなかつた。まず池田首相自身の心の中で、どうしたら「人づくり」ということが可能かを確かめてみられるべきではなかつたか。すなわち、なぜいまごろ改めて「人づくり」を叫ばねばならぬほど、なさない日本になつて

しまつてゐるのか、なぜ「戦後」二十年のあいだに「人」の「心」がこうも乱れてきたのか、その原因を、首相ご自身で、じっくり考えることから始められるべきではなかつたか。

「人」の「心」を乱してしまつた張本人は、外ならぬ保守党の政治姿勢であり、人の籠たべき政治家たちの政治にたいする謬見によるものではなかつたのか。この点に気づかないで、どうして国民の心の問題にする資格があろう。さらに、池田首相の施政を見ただけでも、われわれはなおほかに気づくことがある。首相は、その就任以来、つねに経済政策をすべてに優先させてきた。そしてそれが第一に大切な政治だと思つてこられた。その姿勢それ自体が、政治家として果たして正しかつたかどうか、そこに問題がありはしないか。憲法問題に触れないように触れないようにとする姿勢も見えた。保守政治家の名誉も誇りも、そこにはあまり見られなかつた。経済即政治という首相の政治観こそ、人々の心を物質に走らせ、同時に物質的不満とあくなき欲望とをかき立たせる政治ではなかつたか。物質的不満が心を支配すれば、人の心には礼節の立つ余地が狭められてしまう。いうべくば、首相ご自身の人生観自体が、当初から「人づくり」を軽視する素質を持つておられたことになる。池田首相にとつて「人づくり」提唱が無理であつた理由は、案外こんなところにもありはしなかつたか。その端的な例と思うが、笛吹けども踊らずで、保守政党は「人づくり」に真剣に取りくむ姿勢を、いまだに見せもしないでゐるではないか。

(二) 第二の点は、池田首相は、「『人づくり』」は政策化しえないもの」という「人づくり」の第一前提をご存じなかった。

「人づくり」は、いうまでもなく「物づくり」や「経済政策」とは、本質的に異なったものである。人々は、その点に関する限り、一見常識的な理解は、一応持っているようである。がしかし、大切なこと、すなわち「『人づくり』」ということは、もともと『政策』にはなり得ないもの」ということに、気づかないことが多い。従って「人づくり」は「物づくり」とはちがうと理解できる人たちも、しばしば「人づくり」とは要するに教育政策によるべきだと、うっかりいつてしまう。

池田首相は「人づくり」を提唱したあとで、どうしたら「人づくり」がうまくいくかについて委員会を作られた。対策樹立のための基礎作業のつもりであったのだろう。それに呼応してマスコミも、かなりのエネルギーを集中して「人づくり」論を展開し、朝野の有識者のこれについての所論は、わずか半年のあいだに、殆んど出尽したといつてよいほど次々に我々の前に提示された。池田さんの指示した「人づくり懇談会」も、すでに数次の会合を重ねられたことと思う。しかしこれらは、「人づくり」そのものの推進に、果たして直接的な成果をどれほど挙げ得たであろうか。それは、おおむね、人々の関心の中に「人づくり」ということの重要性を、あきあきするほど植えつけてくれ、同時に「人づくり」についての各人

の豊富な体験を充分に聞かせてくれた、というだけにとどまったのではなからうか。いわば「人づくり」ムードを充実させるには十二分に役立ったのだが、それで「人づくり」の心構えや姿勢が整ってきたか、といえは、決してそうではなからう。

(三) 第三の点は、「人づくり」に関してだけではないが、池田さんをはじめとする保守政治家の多くが、「教育」のことを扱うときに、いつもよく見せる姿勢についてである。

さきに私は「人づくり」は政策化し得ないと指摘したが、教育問題にも、政策化しうる課題と、容易に政策化し得ない課題との両面がある。保守政治家たちの通弊は、この前者だけを取り扱って、もって教育問題に関心を示したつもりでいることが多い。たとえば、議員たちが選挙区で演説するのをきくと、私は教育のことにも力を入れました、〇〇地区の〇〇学校の校舎建設をどうしたとか、この都会に文化センターをつくりました、とかいうように。あるいは義務教育費の全額国庫負担に率先して努力したとか、高校増設、理科教室の充実、設備の改善に、どれだけの奔走をした、とかいう風に。そしてさいごには、私は教育の改善と向上に、このように人後に落ちない努力をしています、と挨拶する。人々は、それを聞いて、なるほどこの人は教育に力を入れてくれる議員だと納得する。

この風潮は一選挙区での報告演説だけではなく、国会における教育に関する演説でも同じである。私はそれはそれで結構なことだと思っているが、教育問題のいま一つの面、いいか

えれば容易に政策化しえない面の方はどうなるのか、といつも思う。それは政治家の政治活動の本務には、はいらないのか、という疑問がでてくるからである。

いまの議員たちが教育問題として主たる関心を払ってきた面は、いわば教育行政の、しかも設営的の面にすぎなかった。それらの教育施設、教育設備などは、実のところ「人を教育する」ための方便でしかない。教えるその内容、教えているその実態が、保守政党の標榜する民主主義の理想とどれだけ隔っているか、そこを見きわめ、それに対処することこそ、保守政党政治家の誇りにおいて関心を払うべき教育問題ではないのか。極端ない方をすれば、校舎がなくとも、設備が不足していようとも、教師らしい教師がいて、生徒がまじめに学習していくところには、必らず立派な教育が行なわれる。「人づくり」といつてみても、国家予算を徴達したり、いろいろの施設や機関を用意することは二の次、三の次のこと。肝心の「人の師」たるものがいるのかいないのか、足りるのか足りないのかが問題ではないのか。また「人の師たる」にふさわしくないものが、先生であったり教授であったりしていることはないのか、が問題ではなからうか。政治家たちの教育問題への関心は、どこか大きく狂っていると見るのは、果して私のひが目であろうか。

試みに国立大学を見て見るがよい。各地の経済学部を中心として、文科系諸学部にも、どれほど異質の民主主義の教授・助教授・助手が多いことか。しかもそれらの人々は、保守系民

主義を理想とする人々を、容易にそのポストにいれないように、ガッチリとその学部の後半の席を占領している。多数決原理は、学部の自治の名のもとに、ここでは決定的な意味をもつてしまっている。学問の自由の大切なことはもとよりいうまでもないが、ここでは「学問の自由」、それゆえの「大学の自治」を看板にして、国民の支持をえている保守政党側の民主主義の理想の展開を、作戦的に受け入れない。すでにその態度とムードの中には、学問にたいするまじめさ、教育についての誠実さが全くみられないだけでなく、時に背後の政治力の「おとり」になりさがっている場合すらあらわれる。ここ二、三年来もめ続けている北海道学芸大学札幌分校などは、それが極端な形態で表面にあらわれた一例にすぎない。

真の教育問題はなにか、容易に政策化しえないところにあるその課題に、保守政治家が今後どうして、どのようにして取りくみ、どのような成果を求めらるか。いな、それを考え進める意志ありや否や、である。だが保守政治家がいまのようなありさまでいる限りは、国民ひとりびとり、そのことの重要性をふかく心に期する以外に、「人づくり」の課題は、とうてい打開の方法がないのかもしれない。

### むすび — われら同人の祈り

以上私は、「戦後」といわれるこの約二十年間の、時代性格の要点について、私なりに客



観的にたどつてみたつもりである。こうした見方が歴史学者からどのように評価されるか、それは知るよしもないが、少なくとも私は、私が誇り高き日本国民の一人として、この世に生を享（う）けたことを喜びつつ、この一文を書きつづけた。

日本の国には、古い祖先以来、この民族協同体の永遠の発展を祈りながら、国家悠久の生命の中に、雄々しくまた悲しく捧げていった何千万何億もの人々の生命が、人間愛の香りも高く籠（こ）められてきたと私は感ずる。

人々は戦後の民主主義の成果を高く評価するが、以上述べてきた問題を見つめただけでも「戦後」の時代の日本人だけがどうして、日本の長い歴史の中の祖先たちより、とくに精神的、文化的に優れていると結論しうるだろうか。いな逆に、国家民族に伝承された共同的生命に無知なるままにこれを否定し、これを軽蔑し、これに信順することをためらつてきた現代日本人の方が、はるかに傲慢であり非礼であり、それゆえに非文化的ではなかつただろうか。

それはともかくとして、ここに見てきたような「戦後」なる時代においては、われわれは遂に時代精神なるものを見出すことができなかつた。精神と真剣に取り組むことを避けてきたがゆえに、この時代に時代精神のありうる筈もなかつたのである。精神を軽視した時代、精神問題に取り組む勇氣を持ち得なかつた時代、理想を持ちながらその理想にあまりにも不

忠実すぎた時代、一見経済の繁栄で満足してきたかにみえて、その実、心はうつろに放心状態を呈してきた時代、二十年ものあいだこんな「間に合わせ的」にやってきて、今日まで困難に遭遇しないで済んだ奇蹟の時代、それが、この「戦後」なる時代性格ではなかったであろうか。

私がこの稿の最初に、われわれ日本国民は、もうこの辺りでこの「戦後」なる時代と、思い切つて訣別すべきだ、と述べた意味は、実は、以上述べ来たつたすべての事を理由としての意味であつた。

同時に、われわれ同人が、ここ約十年間にわたつて、かそかな力を結集しながら、若き人々とともに営んできた「合宿教室」は、如上述べ来たつた現代に欠けている貴重な課題に、身をもつてぶつつかつていったものである。

われわれ日本国民は、いまこそ、総智総力を結集して、一日も早く、この「戦後」なる時代に別れを告げなければならぬと思う。

(国民文化研究会理事長)

第八回「合宿教室」のあらまし



一、予備合宿

二、第八回合宿教室

講義

輪読

短歌創作

パネル・ディスカッション

戦後の思想界に君臨したマルクス主義の神話は、スターリン批判の頃から次第に崩壊の兆しを見せ、中ソ論争に至つてその理論的破綻を白日の下にさらした。しかし、現実への不満を反権力闘争へと組織するマルクス主義本来の機能は停止したわけではない。むしろ、ひとつのただけに怒号のかわりに、小市民的エゴイズムと手をつないで、広く深く浸透しつつあるというのが現状ではなからうか。

一方、この数年の間、日本人はその活力のすべてを経済的繁栄のために捧げつくしたかに見える。膨大なマスコミは不断に欲望を「開発」する。欲望は欲望をよび、今や「個人生活の充足」は日本人の唯一最高の価値基準とさえなつた。戦後の欠乏の時代をくぐり抜けて来た者にとつて、それはまさしく目の眩むような繁栄ぶりである。しかし、その華やいた繁栄の底には、何かしら根のないもろさを感じられないであらうか。

そして、泰平のムードの中で、したりげな饒舌に乗つて展開される人間論の多くは、階級的人間観か、個人至上の人間観かの、いづれかに属している。進歩主義者たちは、国家という人間存在の最も基本的な形に対して、故意に目をつぶつた。彼らにとつて国家とは打倒すべき国家権力に外ならないのだから、彼らの論理からそれがずり落ちたのは当然であつたかも知れぬ。しかし国家という言葉から、直ちに戦時下の硬化したナショナリズムを想起するような反応は、何としても異常なものであらう。このきびしい国際場裡に、国民が生きのび

る現実の道は、一日も早く国民一人一人の胸に素直ですこやかな国家像を再建することなればなるまい。政治の場で、ナショナル・インタレストを棚上げにした論議がいたずらに空転を続けている時、国民的立場と国際的視野で物を考える姿勢と氣力を青年の胸に呼び起こすことは、まさに焦眉の急である。「個人生活の充足」の柁をのりこえ、その清らかな瞳を輝かして学生諸君が雄々しく人生に立ち向って行く意志を持つてくれることを念じつつ、我々は今年もまた乏しい力のすべてを合宿準備に傾けた。こうして期待と緊張のうちに八月が来た。

## 一、予備合宿

大合宿の運営の中心となるべき班長要員の訓練を目的として合宿直前の八月十八日から三日間、雲仙ユースホステルに於てきびしい予備合宿が行われた。参加学生は次の通りである。

酒匂優一（鹿児島大） 下方紀一（岡山大） 黒木林太郎（熊本大） 角田精純（滋賀大） 大沢勲（宮崎大） 本川勝紀（宮崎大） 二宗和義（岡山大） 高村光紀（亜細亜大） 亀井孝之（亜細亜大） 楠田幹人（佐賀大） 田村潔（長崎大） 平孝雄（鹿児島大） 沢部寿孫（長崎大） 平岡格（下関市大） 山本伸治（東京水産大） 柴田悌輔（中央大） 徳地康之（滋賀大） 西山文隆（滋賀大） 阪本千穂（鹿児島大） 筒井知（九大） 山本博資（早稲田大） 西元寺紘毅（九

大) 合原俊光(長崎大) 有田二彦(長崎大) 藤沢雄一郎(長崎大) 笹原英彦(鹿児島大)  
平休憲(熊本大) 木田浩隆(九大) 五十君祐玄(九大) 尾形紘行(長崎大) 菅野リン子(亜細亜大) 以上三十一名

十八日午後四時開会、小田村理事長は、予備合宿はそれ自体で価値あるものとしたこと、疑問はそのまま残さないこと、以上二点を特に強調して挨拶を行った。続いて約一時間自己紹介をする。既に合宿経験をつんだ人が多いので、久闊を喜び合い、なごやかな雰囲気である。夜は川井修治副理事長より合宿教室の構想、主として日程表についての説明があった。特に国文研会員と参加学生との間に年令や世代から来る断絶感があるので、それを埋める努力が要請された。人の心の荒廃を指摘するだけではなく、これに対処する実践こそ大切だ、指導者意識を捨てて、温かい心やりをもって接すべきだという点が強調された。

二日目の朝は「国家と個人」という題で論文を執筆することが命ぜられ、続いて川井会員によって、岡倉天心「日本の目覚め」をテキストに、輪読の指導が行われた。午後は小柳陽太郎会員によって、午前中執筆の論文についての講評が述べられた。この講評の中では、批判文献として、清水幾太郎「愛国心」(岩波新書)が使われた。講評の要旨は次の通りである。

△樋口一葉の「塵中日記」や福沢諭吉の「文明論之概略」を読むと、明治人の国家への感覚が如何に敏感であったかが分る。しかし、明治四十年代から大正初年へかけて、文芸で言

第八回予備合宿日程表（昭和38年8月）

20日（火）	19日（月）	18日（日）	
起床・洗面・朝食	起床・洗面・朝食		7.00
正岡子規 「歌よみに与ふる書」の講義 (山田)	「個人と国家」 感想執筆		8.00
			9.00
短歌創作	岡倉天心 「日本の目覚め」 輪読 (川井)		10.00
講義 (小田村)			11.00
昼食	昼食		12.00
事務分担検討 スローガン決定	「個人と国家」の 感想についての 講評 (小柳)		1.00
			2.00
準備作業	聖徳太子 「十七条憲法」 輪読 (小田村)	開会、自己紹介	3.00
			4.00
	夕食・入浴	夕食・入浴	5.00
			6.00
	任務分担決定	合宿教室の構想 (川井)	7.00
短歌創作批評 「東洋の目覚め」 補講 (川井)	映画「文化の戦士」観覧		8.00
	コンパ		9.00
就寝	就寝	就寝	10.00



えば自然主義の時代になると、目で見えるものだけを信ずる、実感だけにたよるといふ思想的な転機が来る。清水幾太郎氏が「国家」を「自然的愛情の直接の対象ではなく、人間の感覚や経験を超えた抽象的なもの」と規定するとき、即物的合理的思惟のみがすべての基準となつてゐる。ここに現代の日本人が「個人と国家」の問題を正確に把握できぬ問題点がある。▽更に小田村理事長は次のように述べた。

△西洋で「個人」という時には「個人の自由」「個人の平等」のごとく強権に対する意識があるのではなからうか。しかし東洋では「人」という時には「禽獸」に対して言うのだから、それは自然に「国」につながるものであつた。また戦争の起らない第一の条件は、「国」が一体となつて団結していることだ。帝国主義戦争を起さぬため軍備を廃しようという意見には果して平和を存続させる現実的力があるのだろうか。▽▽

疲れを休める暇もなく、小田村理事長の指導で聖徳太子「十七条憲法」の輪読が行われたが、それに先だつて大要次のごとき輪読上の注意が述べられた。

△個と全の関係をきわめて行くことは、人間として生きてゆく基本的課題であり、難問である。それととりくもうとする態度、一生とりくんでゆくとうとする決意、それが学問の基本的態度である。国文研の指標となつた「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」はその問題ととりくんだ本であつた。輪読では著者の心情を真剣にたどるところに本当の意味がある。た

たとえばこの本では聖徳太子がどこか輪読の席の一つに居られるつもりで読まねばならぬ。特にこの中にみえる「共に是れ凡夫のみ」という太子の御言葉は実に積極的な人生観である。その痛感の上に立って自分の生れた国をよくしようとする自然の気持を大切にし煩瑣な反省に低迷せず、人の心にとびこんで行ってほしい。》

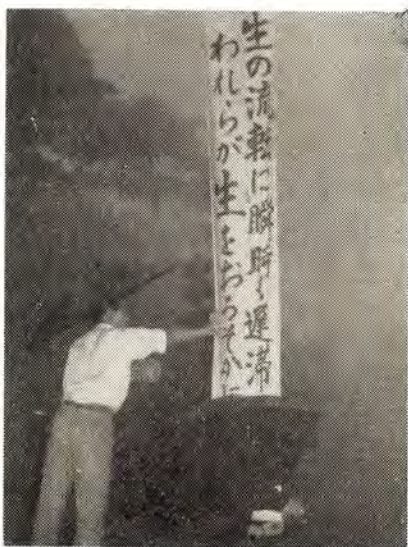
大体右のような注意の後、本合宿に於ける輪読箇所が予告された。「個我にとらわれる自分を余りに卑下する必要はない。それが人間の本性だから、それを見つめて行けばよい。」という注意は印象に残った。

夜は任務分担の決定。班の割当がきまつて心がおどる。食堂で映画「文化の戦士」を見る。昭和十四年夏、信州菅平高原で行われた日本学生協会主催の大合宿の記録映画だ。ひたむきな気魄が胸に迫る。続いてささやかなコンパ、明日からの活動を思いつつ盃をかかず。

八月二十日、合宿三日目。朝、山田輝彦会員によって、正岡子規「歌よみに与ふる書」をテキストにして導入講義が行われ、続いて短歌創作。その後、しめくくりの講義で小田村理事長は次のように述べた。

△割当の班はかりのものである。全体をよく見てほしい。その中から幾つかの問題点を出し合い、敢えてむずかしい問題にぶつかる勇氣をもってもらいたい。これが合宿だ。知識の点で自分よりまさる班員がいるかも知れない。しかし知らないことがあつてもたじろがぬこ

まごころをもつてつき合うという態勢を作ろうとすること、これが大切だ。▽  
午後の討議で、やがて集つて来る全国の友らを温かに迎えるためのスローガンについて、心をこめて案をねつた結果左の通り決定した。



気がもり上る。夜は短歌創作の批評と岡倉天心の「東洋の目覚め」のプリントの講義。ぎつしりつまつたスケジュールをこなし切つた時は夜もふけていた。

▽全国の友よ、共に語らい、共に学ぼう。

▽友よと呼ばば、友は来りぬ。

▽われらの世代に新しい学風を起そう。

▽共に求めむ、真実に生きゆく道を。

▽生の流転は瞬時も遅滞することなしわれらが生をおろそかにするな。

三時から八時まで、準備作業に没頭した。色わけの班別リポンを書くものの、ガリ版をきるもの、前日宿泊者の受付をするもの等、次第に緊張した空

## 一、第八回合宿教室

地上では連日三〇度を越す酷暑にあえいでいるというのに、ここ雲仙の山上は汗一つ出ない爽快さである。八月二十一日、いよいよ合宿の開幕だ。今年も北は札幌から、南は鹿児島から、心開いて語る交流の世界を求めて学生諸君が続々集つて来る。合宿経験を重ねた人々の層が次第に厚くなつて行くことは何よりもうれしいことだ。あちこちで再会を喜び合う姿が見られる。思えばこの地で営まれる合宿も今年は三度目である。第一回は昭和三十五年、あの激しい安保闘争の直後、学園の思想的混乱がそのまま合宿に持ちこまれ、けわしい対立の気分が支配したことを思い出す。翌三十六年はこの山上に小林秀雄先生を迎えることができ、そのきびしい風貌が忘れがたい印象を残した。昨年は阿蘇、そして今年再び雲仙に帰つた。このユースホステルで、かつて激しい訓練に耐えた人々が、今は社会人として、有能な働き手となつている。それらの合宿教室卒業のOBたちが、今年の後輩指導のために駆けつけて、その新鮮なエネルギーを合宿運営に傾けてくれる。これも今年の合宿の喜びの一つだ。乏しい努力だけでも、効果は着実にみのりつつある。

参加者の内容は次の通りであった。

参加者側

◇参加学生学校名

九州大学、久留米大学、熊本大学、長崎大学、鹿児島大学、鹿児島経済大学、宮崎大学、福岡学芸大学、活水女子短期大学、佐賀大学、下関市立大学、鳥根大学、広島大学、岡山大学、作陽短期大学、神戸大学、大阪府立大学、京都大学、同志社大学、滋賀大学、神奈川大学、東京大学、東京教育大学、東京学芸大学、東京水産大学、東京歯科医科大学、早稲田大学、玉川大学、中央大学、日本大学、上智大学、国学院大学、亜細亜大学、東京理科大学、国士館大学、日本経済短期大学、高崎経済大学、宮城農科大学、酪農学園大学 計一三九名

◇一般参加者職域名

三菱電機、宮崎トヨタ、岡崎工業、浜田組、山陽電軌、熊本市教委、神奈川県高校、長崎相互銀行、熊本県中学校、熊本県小学校、団体役員 計一四名

◇招聘講師 三名 来賓 一名

主催者側

◇大学教官有志協議会 七名 国民文化研究会 三〇名 会友 一名

事務係 七名

総計 二〇二名

これらの参加者は一〇名から一八名程の十三班に編成され、予備合宿を終えた学生諸君が班長の任についた。さらに今年は全般の運営を握る指揮班を設定した。国文研の会員もそれ

ぞれの班に所属し、万般の態勢が整えられた。社会人班と女子班が作られたのは、昨年の方針が踏襲されたためである。

午後三時より開会式。開会宣言、国歌斉唱、「祖国日本のためのちを捧げた方々のみたま」に対する一分間の黙禱。開会の辞は、最初に大学教官有志協議会を代表して、長崎大学助教授峰辰次氏が登壇「この会が混乱する国民生活の中に占めるべき役割は、若人にビジョンを与えることである」と述べられ、次いで国民文化研究会を代表して、理事長小田村寅二郎氏、参加学生を代表して長崎大学経済学部学生沢部寿孫君がこもごも思いを述べた。小田村理事長の挨拶の要旨は左の如くである。

△現代学生（それは学生に限ることではなく、一般の世間でも多く共通することであるが）の生活姿勢から来るその社会的視野、対人間観、ひいては社会問題に対する判断の仕方、対人関係における基本的姿勢そのものに、すでに重大な問題が潜在していることはないか。価値判断の基準が力、地位、金などに固定する傾きはないか。もしそうであれば、生涯の方針づけの時、政治、経済、外交の問題について判断を迫られる時、固定したスタンドポイントからのみ物を見ることになるだろう。そこに一つのクッション——今までの見方だけではない一つの屈折——が必要である。この合宿教室では、この種の合宿や修練会や講習会とは異つて、かなり高いレベルのことをねらう。しかし、それは自我独善とはおよそ反対かつ



異質のものである。「人ことごとく共に是れ凡夫」という自己把握をふまえて、「友と共にある人生」「人と共にある人生」「同胞と共にある人生」「世界各地に生活するあらゆる人々と共にある人生」を、その順序を正して把握することを志向する。それはむずかしい問題に違いない。一人ではとても支えられぬ問題だから、友の心に支えられつつ考えてみよう。われわれ国民すべての責務として、「日本をよくしなければならぬ」という大きな課題がある。しかも、それを目ざしてゆくために「はげしい革命の方途によらずに」進むことが、どんなに大切かを考えなければならぬ。革命思想においては、その内容が右であれ、左であれ、「革命によつて人を支配し、その中心者たちが人々を自分の好き勝手にしようとする」一つの共通の意識が肯定されている。そこに重大な「人間観」の誤謬がありはしないか。

第八回「学生青年合宿教室」日程表（昭和三十八年八月）（第三次雲仙）

22日（木）	21日（水）	
起床・国旗掲揚・体操		6.30 7.00
朝食		8.00
講義「物の考え方」 （竹山道雄講師）		9.00
休憩		10.00
質疑応答		11.00
昼食		12.00
班別輪読 「日本の目覚め」		1.00 2.00
短歌創作導入講義 （山田・夜久講師）	集 合 開 会 式	3.00
	合宿教室のめざすもの （川井）	4.00 5.00
入浴・夕食 自由時間	入浴・夕食・自由時間	6.00
第一回短歌創作		7.00
班別討論	班別懇談	8.00 9.00
就 寝	就 寝	10.00



第八回「合宿教室」のあらまし

25日(日)	24日(土)	23日(金)
起床・国旗掲揚・体操	起床・国旗掲揚・体操	起床・国旗掲揚・体操
朝食	朝食	朝食
問題提起(小田村)	講義「現代の 政治的危機」 (木下広居講師)	講義 「最近の世界と日本」 (木内信胤講師)
班別討論		
全体意見発表		
講義 (小田村)	休憩	休憩
感想文執筆	質疑応答	質疑応答
閉会式	昼食	昼食
解散	輪読 「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」 (小田村講師)	第一回短歌創作批評 (夜久講師)
	班別討論	小地獄めぐり
	入浴・夕食 自由時間	第二回短歌創作
	班別短歌相互批評	入浴・夕食 自由時間
	コンパ	大学教官有志協議会 国民文化研究会 意見発表会
	キャンプ・ファイア	パネル・ディスカッション (木内講師をかこんで)
	就寝	就寝

戦争を嫌悪する心が、革命を是認するのはおかしい。現代の政治家や実業家の中から、真に革命を阻止する力は生まれまい。我々は共に国を正しくする道を、この合宿で発見したい。▽

開会の辞に続いて、生活上の諸注意があつたが、今年は特に毎朝国旗掲揚をすることが実行された。又開会式の際にはパツハの音楽が流れたが、合宿期間を通じてヴァラエティにとんだクラシックのひびきが流れて人々の心を和やかにした。こういう細かな配慮もすべて学生諸君が体験の中から生み出した創意である。こうして参加者の一人一人が、力を合わせて国民的課題にとりくむ心の姿勢が整えられ、四泊五日の大合宿は厳粛にスタートがきられた。

## 講 義

開会式に引き続いて、国文研副理事長川井修治氏（鹿兒島大学助教）の「合宿教室のめざすもの」という導入講義が行われた。昭和三十一年合宿教室開始以来の思想界の動向にふれつつ、氏は次のように説いた。

△大学の現状は、決して正常とは思われないが、如何なる時代に於ても、学生諸君が本質的に純粹であることは信ずることができる。しかし、純粹な人が往々にして惹かれるのは過激な政治主義だが、それは人間心理のあるがままの姿を直視することをしないで、観念的、論理的に理想社会を空想するから、無理が伴わざるを得ない。その無理を埋めるために戦術

や煽動が用いられる。一方そういう政治主義に反撥して、自己の道を行くという人は、人格の完成、教養の向上などに究極の目標があり、個人の殻に閉じこもり、他に對して冷淡である。それらに共通して言えることは人間の問題がなおざりにされているということである。従つて今の大学では、知識や技術は教えられるが、心を開いてもろともに語り合う場がない。この合宿では人間の問題にとりくみ一步でも、祖国を正しい方向にむけること、大学生活のひずみの中でひとしく考える場を作つてゆくこと、その為の勉強をしてほしい。以上のごとき要旨を昨年度の合宿記録「新しい学風を興すために」の序文を引用しつつ説明した。

招聘三講師の講義要旨は別に収録したので味読してほしい。思想、經濟、外交の面に於ける、それぞれトップレベルの方々の話は深い感銘を与えた。

芸術や思想の面で、深い学殖と鋭敏な感覚でかすかずのすぐれた仕事を残して居られる竹山道雄講師は「物の考え方」という題で話された。戦後人間精神のバランスが失われ、幻影で物を見ることが続いたが、今は幻影ではなく事実をふまえ、どうにでもつく理屈ではなく正確な論理を重んじ、言葉に煽られるのではなく実体を考えようという論旨は、おだやかな御人柄に裏づけられて、しみじみと心に響いて来た。

第一次雲仙合宿以来、四回目の連続講義をされる木内信胤講師は、本会の顧問も兼ねられ



ているが、そのきびきびした鋭い論理と総合的判断に於て著名な経済評論家である。講師は「最近の世界と日本」という題で、外交、経済、政治の動きを明快に分析された。EECブームの退潮、アメリカの優位性の後退、中ソ分裂、核停条約調印という動きの中で、日本経済の不調、左翼陣営の分裂等の新情勢をいかにとらえるか、そして「当来」の日本への若干の考察にまで話が及び、まことに気魄のこもったお話であった。

本年初めてお迎えした木下広居講師は著名な政治評論家であり、特にイギリス政治史の権威である。「現代の政治的危機」という題で、豊かな外国生活の経験をもとに、外から日本を見るといふ立場で、日本の政治的ひずみを的確につかれたお話であった。特に米ソの力による均衡の実態を分析された点や、英米に於ける休戦記念日の厳粛な慰霊の話は、

日本の現状に照らして印象の深いものがあつた。

## 輪 読

輪読という読書の形式は、われわれ国文研の者たちが、永い経験の中で育てて来たもので、他と心を通わせつつ自己の思想を深化して行く最も有効な方法の一つであると信じている。輪読の目的は単に知識的なものの吸収ではなく、その著者がその言葉を生み出した精神的、情緒的な内容を精密にたどつてみることである。従つて心を尽して、その著者の時代に身を置き、その人の感情の中に身を託することが必要である。

二日目の午後、岡倉天心の「日本の目覚め」(岩波文庫)をテキストにして、班別輪読が行われた。この著書は、日露戦争もたけなわのころ、異郷アメリカにあつて、鬱勃たる愛国の情もだしがたくして書かれたもので、幕末から明治維新への変動期の歴史を、独特の直観的な筆致で描き出したものである。図式的な歴史にのみ馴れて来た学生諸君にとつて、この輪読は一つの発見であつたに違いない。「欧羅巴は我々に戦争を教へたが、何れの時に平和の有難さを悟るであらうか。」という結びの言葉から、学生諸君は流行史観にはない何かを汲みとつてくれたに違いない。

合宿四日目には、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を参加者全体で輪

読した。輪読に先だち、このテキストのよみ方について小田村寅二郎氏は次のように述べた。

△黒上正一郎という方は、国文研の源流である一高昭信会を指導し、若くして亡くなられた方である。著者の清らかな意志が流れている本だから、著者の魂に感応することが必要だ。著者その人の精神を理解し、それを通して聖徳太子にふれてもらいたい。太子の時代は、異質の文化が接触した時代で、閥族の争いが続き、崇峻天皇弑逆という異変まで起った。こういう時代に、太子にとって、政治とは人の心を見つめつくすことであつた。世の中を形の上でととのえても、心が正されなければ駄目だ。著者の思想は、単なる宗教的立場を離れて、国民生活者としての立場に立っていた。現在デモクラシーでは「数」を問題にするが、「数」の中に生命があるのではない。心一つにして一つのことをきわめ合うこと、まごころを尽し合う努力が前提になければならぬ。そういう心を通わせ合う努力の必要をくりかえし述べたのがこの著書である。▽

こうして「聖徳太子の人生観と政治生活」の章を、一語一語体験に即した精密な解釈を施しつつ読み進んだが、「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修する所広からずして、物とその苦楽を同じうすること能はず。」の言葉に至って、正に合宿生活の神髓にふれる思いがした。

## 短歌創作

合宿教室に於ける短歌創作の意義については前回の合宿記録中の夜久講師による「短歌の哲学と技術」という講義の中にあまずなく語られている。今年もまた短歌創作にはかなりのウェイトを置いた。二日目の導入講義では前段を山田輝彦会員が受持ち、後段は昨年に続いて夜久正雄講師が受持った。

山田会員は昨年の記録を要約して、

△歌を詠むとは、感じたことを定型の言葉に定着させることだ。しかし、現代のように知性を偏重し、感情を蔑視する時代には、感ずべきことを素直に感ずる心を持つことはたやすいことではない。又、定型は自由を束縛するものではなく、かえって、遠い祖先と、広い同胞につながる積極的なものだ。また相互批評の時には、その人のその時の生活体験を偲び、それに自分の心をあわせることが必要だ。こうして短歌の創作と批評は正しい思想法と共感の世界への通路となる。▽と述べ、正岡子規の「歌よみに与ふる書」を引いて、初心者の手引とした。

続いて夜久正雄講師は、幾つかの作品を資料として、表現と心の関係を論じた。いつわりの心がいかに表現を曲げるか、素直な心がいかに表現を美しくするか、その的確な指摘には



幾度か感嘆の声が上がった。特に岩倉具視と三条実美という維新の元勳の作品を対比しつつ、前者に自己主張と支配力への憧憬を、後者に没我奉公と協力への志向をよみとつたのは思想生活に於ける短歌の意味を改めて考えさせた。

こうして、その夜第一回短歌創作を行い、二六一首をえらんで、翌二十三日に夜久講師によって批評が行われた。正確無比の痛烈な批評だが、巧まざるユーモアが溢れて、まことに楽しい一ときであった。続いて、小地獄めぐりの後、第二回短歌創作が行われた。そのうち二六八首は直ちにプリントにされ、二十四日夜の班別短歌相互批評にもちこまれた。昨年もそうだったが、相互批評の雰囲気は実に楽しい。黙して語らなかつた人たちが、心を開いて発言を始めるのも、大抵これがきっかけになる。表現の喜び、表現のむずかしさを初めて体験したと語



る人達が多かった。

### パネル・ディスカッション

木内講師を中心に、大教協、国文研の会員が討論する様子を、周囲で参加者全員が聞くという初めての試みであった。木内講師は、従来の日本のあるべき姿を志向するとき、解決しなければならぬぎりぎりの問題は何かという問を出された。結局焦眉の問題の一つとして国語問題がある。現代仮名遣、漢字制限、音訓整理表等をふくめて、今の表音主義者、ローマ字論者のペースで進んで来た国語改革に抜本的な反省を加えねば、由々しい事態になるというのが結論であった。もう一つの問題は、東洋思想の復元ということである。明治以降、ひたすら東洋思想を抑えて西洋化を急いでいるが、西洋思想と東洋思想のバランスと融合を真剣に考える必要がある。思想的哲学、或いは思想の展開に乗せて考えられた歴史、それを生きた人物の事象として捉えてほしい。国文研でそういう著書を出してほしいという注文であった。若者はかくあるべしという理想を書いた「エミール」のような書を合宿経験の中から生み出す努力が要請されたのである。

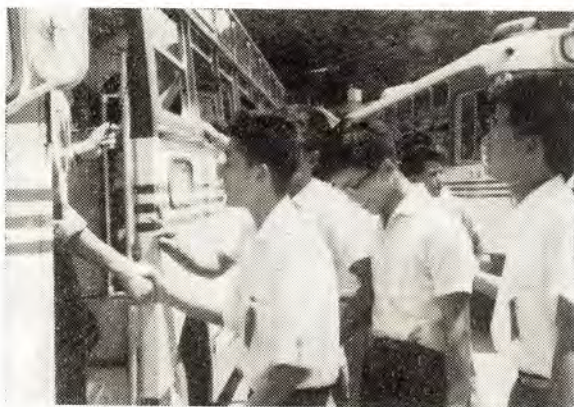
最後に木内講師は「個性的日本とならねばならぬ。日本的とは古今東西の集大成であり、大自然との調和であり、自然征服の文明とは異質なものである。分析的であるより総合的で

ある。」と結ばれた。一時間半にわたる白熱した論議に、参加者たちは全心を集中して聞き入っていた。

合宿三日目夜の意見発表の時間には、大教協を代表して、鹿児島大学教授平岡禎吉、鹿児島経済大学助教授高仲東磨、亜細亜大学助教授梶村昇の諸氏が、こもごも学生諸君に温い激励の言葉を送った。国文研を代表して、「合宿教室卒業生」の若い人々、湯津堂義弘、田口譲二、坂東一男、行武靖枝、上村和男の諸君が実感のこもった先輩としての挨拶を送った。続いて国文研の宝辺正久、瀬上安正、岡本弘之、長内俊平、小柳陽太郎の諸氏が、それぞれの思いをこめて訴えた。解散前夜のコンパやキャンプ・ファイアも忘れがたい思い出だ。最終日の全体意見発表では、思わず胸の迫るような幾つかの言葉を聞くことができた。

スケジュールの最後のしめくりの講義で小田村理事長は提要次のごとく述べた。

△肉体的にも精神的にも苦しいスケジュールであったと思う。ここでマルキシズムに対する態度を明確にして置きたい。マルクス・レーニン主義そのものと、それをよいと思つてゐるものの気持は分けて考えねばならぬ。マルクスに熱中するという理由は、人間の生活が平等でありたいという強い願いにあると思う。たしかに知的判断だけでは熱中できないはずだ。マルクスに熱中する行動を生み出している平等への願いは疑い得ない。その点ではわれわれも同じである。しかし、マルキシズムは人間愛を実現するために社会のしくみを変えれ



ばよいとする。さらにマルキシズムは全体主義体制をとる。権力の集中、ピラミッドシステムをとる。人対人の関係が権力関係でむすびつけられる。だが権力をふりかざして、果して平等の願いが生かされるだろうか。そこにこの思想の限界があると思う。最後に残るものは、人間対人間の関係ではなからうか。地位の上下にとらわれず、それをのりこえる精神力を養成しなければならぬ。下の人の心をよみつくす人になろう。人の心を無視した運動は、権力獲得への運動であつて、人心を収縮し得ない。特に家庭の中で、家庭の人と心を通わす努力をしてほしい。家庭がゆたかになれば、人の心はなごやかになる。なごやかな心こそ文化を摂取する力なのだから。▽

この重大な指摘は波瀾の多かつた四泊五日の、複雑な体験を統一するにふさわしい集約であつた。

続いて感想文執筆。思い思いにつづられた文の中から、われわれはきびしい反省と、明日への跳躍の糧をよみとるであらう。

八月二十五日十二時半より閉会式。国歌斉唱、黙禱に続いて、大学教官有志協議会梶村昇氏、国民文化研究会副理事長川井修治氏が閉会の辞を述べ、参加学生を代表して柴田悌輔君が謝辞を述べた。午後一時にすべての行事はとどこおりなく終了した。

名残を惜んで山を下りて行く人々の耳にひぐらしの声が聞えて、雲仙の空はすでに秋めいていた。

■ 合宿教室における講義



物の  
考  
え  
方

竹  
山  
道  
雄



はじめに……歴史的蓄積を否定する風潮……条件反射的思考……  
歴史解釈のむずかしさ……自然科学と文化科学……マルキシズムの  
観念性……未来への幻想……集团的妄想……リアリテイの感覚……  
……ヨーロッパの宗教観……日本人の宗教観

公質問に答えて

日本人のバックボーン……ドイツの青年の考え方……天皇制に  
ついて……マルキシズムの「物質」……イデオロギーの狂信……  
……事実の認識について



## はじめに

こういう山の上の涼しいところにお招きいただきまして、ありがとうございます。与えられた題は、「日本文化と西洋文化」ということでしたが、そういう題は少し大き過ぎますから、結局「物の考え方」ということでお話し致したいと思います。われわれは今まで、社会的、精神的に動揺し続けて参りました。二・二六事件のちよつと前、斎藤内閣の頃に少し安定した時代がありました。がそのときは、日本の物資もどんどん外へ出て行くし、ビルも沢山建つというような、今の状態を小さくしたような風で、これでやつと世の中もおさまつたかと思ひました。ところが、二・二六事件からあと、また大さわぎになつて、もみにもみましました。二・二六事件の前も随分もんだものですが、そのころは左翼が主になつていました。ところが、それからあとは、右翼が主になりました。しかしこういう動揺は実は日本だけではなく世界の共通の現象でもあつたのです。

一九二〇年、三〇年代は、現代史の中の非常に大事な時代で、色々な複雑な原因から、世界中が動揺しました。この時代は歴史の大きな転換期であつたのだらうと思ひます。どの国でも、それぞれの形で苦しまないところはなかつたが、日本は日本なりに、日本的な形で、日本的な条件のもとにおいて、いろんな現象が起つたのだと思ひます。世の中が不安定なときに

は、どうも極端な主義の方が勝つものです。

現在よその国へ行つて見ますと、どこの国もいろいろ深刻な問題をかかえています。随分お金持で楽に暮している国でも、命とりになりかねまじきような問題をかかえています。フランス然り、ドイツ然り、イギリス然りです。ところが、日本は今のところ、あるいは最も安定している国ではないかと思ひます。二三年前はフランスなんか一体どうなるのだろうかと思つて心配しました。そして日本に帰つて来て新聞を読むと、犬が人をかみ殺したという記事が大きく出ていて、何という呑気な国だろうと思つた。こんなことは、実に久しぶりのことです。しかし、世の中のことはいつどう変わるか分りません。一寸先は闇であるといったような気が致しますが、久しぶりに安定したので、この間にこそ、出来るだけ冷静に、正確に、ものの考え方をしつかりと、根を深くしておきたいと思ふのです。今までのことを考へてみると、幻影といったようなものが非常に大きな役割を演じていて、虚像のようなもので人々が踊らされて来た。今度こそ虚像ではなく、実像でもつて着実に踏みしめて行くようにしたいものだと思ひます。ずっと前からのことは申し切れませんが、主として戦後のことを申してゆきます。

## 歴史的蓄積を否定する風潮

戦後の日本の精神的動揺は大変なものでした。古い日本の歴史的に蓄積した一切が否定されました。どんな国でも長い大きな戦争をすれば、その後では、勝つても負けても人間が精神的バランスを失つて、ものの考え方が変になってしまうものです。第一次大戦後のドイツなどは、精神的バランスを失つて、とんでもないことになり、また第二次大戦をやりました。日本も戦後の生活は実に悪かったのですから、これくらいの精神的動揺は無理もない、あるいは考え方によつては、まずこの程度でとまったのは出来がいい方だと言えるかも知れないと思うくらいです。

過去の日本が、全部否定されたということには、いろいろな原因があると思います。その主な原因をまず二つくらいあげてみたいと思います。

まず第一に、今度のドイツと比較してみるとそれがよく分る。ドイツはああいうひどいことをして負けてしまったにもかかわらず、なお依然として昂然としているのです。どうして、そんなに自信満々でいられるのか、不思議に思われますが、それは、こういうわけだと思えます。

ドイツにはもともと立派なドイツ文化がありました。つまり、プロイセン主義というのがあつて、これが世界一に強い軍隊、世界一に優秀な官僚を養成して、隆々と国力を強めていきました。第二にキリスト教があつて、それが道徳とか、人間の内面的な方面をあずかつてい

ました。第三には Bürgerstand と言いますが、いわゆる「市民」の存在です。よく市民と訳しますが、東京市民というような市民とは意味が大分違つて、社会の中堅層という意味です。それが、中世以来がっちりとして存在し、真面目で堅実によく働く。そういう幾つかの要素が、かつての隆々たるドイツを築いて、ドイツはひところは、精神科学でも、自然科学でも、芸術でも、哲学でも、すべてのものに関して、世界をリードする輝かしい国だった。ところが第一次大戦後の、人心の不安定からナチスが現われた。ナチスは非常に能力のある、強烈な人間の集りだったのですが、その考へたるや、実にこれはひどいものだった。そのナチスが、人々の集団妄想を利用して、昔のよきドイツを倒して天下をとつた。それにひきこまれていたドイツ国民は、さながら熱病にかかつて夢を見ていたようなものだったので、丁度、急性肺炎にかかったようなもので、一時の病気でとんでもないことをしたが、今はそのナチスはなくなつた。肺炎菌がなくなつてしまつたので、体はもとへもどつた。もとへもどつてみると、ドイツは輝かしい立派な国であるという自信が甦つてきた。

ところが、日本では全く違ふ。満洲事変以来、敗戦まで、十余年の長い戦争だった。それから敗戦後も世の中は実にひどかつた。いつまでも戦争が片づかなかつたので、それに対応するために、総力をあげた。歴史的に蓄積した美德をすべて動員して戦つたわけです。艱難辛苦に耐えるとか、忠誠であるとか、その他いろいろの美德がありましよう。それを、全部

動員して戦った。ところが戦争には敗れ、生活はひどくなつた。あれほど生活がひどくなれば、どこの国の軍隊でも国民でも頽廢するにきまつています。その例にもれず日本でも過去の美徳一切をふくめてすべてのものが醜い形になつて倒れました。これが歴史的日本は全部悪いと言われるようになった一つの原因であると思ひます。

### 条件反射的思考

過去の全面的否定を招いたもう一つの原因は、次のようなことだと思ひます。ちよつと突飛な例ですが、戦争中は空襲があつて、サイレンが鳴る。しばらくすると敵機がやつて来て焼いていくものですから、戦争が済んだあとも、サイレンが鳴ると、われわれはどきつと思ひました。あれは一年ぐらい続いたかと思ひます。これは、いわゆる条件反射ではないかと思ひます。つまり実質的なものがなくても、それに附随した条件が起れば、その実質的なものに対する反射が起るのです。これに似た現象が、戦後には沢山ありました。戦争を想ひ起させるもの、連想させるものは、すべて否定するということになりました。軍艦マーチを聞くと気持が悪い、日の丸を見るといやだ、紀元節をやると戦争になるといふ。あるいはおよそ原子力と名のつくものは、一切日本に持ちこむことはいけな、平和利用もいけなといつて、東海村に原子力研究所を作るといふときに、騒ぎがありました。それに教育勅語、あ

れもいかんということになっていました。私は教育勅語には悪いところはちつともないと思  
うのです。平凡な、分りきつた普遍道徳ばかりであつたと思います。「父母ニ孝ニ兄弟ニ友  
ニ夫婦相和シ朋友相信シ」云々と言つても、それはどこの国、いつの時代でも、「古今ニ通  
シ中外ニ施シテ」もとらぬ人間の普遍道徳を説いたものです。しかも、それを「朕汝臣民ト  
俱ニ拳々服膺シテ威其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」というので、天皇も自分より上に高い道  
徳律を認めて、それを臣民みんなと一緒に実行しようじゃないかというのです。つまり昔  
の、大家族時代の権威をもつた家長が、若い者に諄々と言つて聞かせるようなものです。天  
皇個人の著作の形で出されて、法的強制力はない。親不孝者も夫婦喧嘩もたくさんあつたけ  
れども、それが教育勅語に違反するからとて引つぱられた者はいなかつた。専制君主が道徳  
を独占したというようなものでは全くない。特殊道徳をこしらえて、それを強制するのだつ  
たら、そういう事も言えるでしょう。例えば、かつてナチスドイツでも、中共、ソビエトで  
も、行われてきたそうですが、親が「党」の放送を聞かなければ、子供が、それを学校の先  
生に言いつけなければならぬ。それがそれらの国においては道徳になつている。そのため  
に引つ張られた親父さんがたくさんあつた。そういう場合なら、それは専制君主が独裁をす  
るためのモラルということが言えるでしょうが、教育勅語にはそんなものは全くない。ただ  
初めの方にちよつと神がかりではないけれども、似たようなものがついています。しかし、

教育勅語の発布は明治二十三年で、あの頃は、世界中どこでも、自分の国とか王位とかいうものを神聖化した時代です。その時代のものとしては、神聖化が少ない方です。それで、教育勅語が悪かったというのは、安価な、安直な、間違つた説明、代用的説明であると思います。但し、その取扱いいつたような面では、いろいろ問題もあつたでしょう。

話が脇道にそれましたが、昔あつたものはみな悪いものだ、これは戦争を連想させるからいやなものだというので、昔の日本のものをすっかり捨ててしまいました。戦死者の霊を弔うということさえも、戦後十八年も経って今年初めて行われたのです。戦争中いろいろ悪い事が起つたのも事実です。しかし、その事と、兵隊に行つて義務を尽して死んだ人の霊を慰さめるということは全然別な話なのです。それを感情論でくつつけてしまうものだから、今までそういう当然のことも行われなかつたのだと思います。精神的バランスを失つて、ただ戦争でつらい目に会つたというひとつのことだけからものを考える。しかし歴史の事件というものは、実に多くの複合した原因があつて起るものです。その複合した事実の全体を考えないで、一面的な思考で、感情論で歴史を見るといふことがずつと行われて来ましたが、それではまずいと思うのです。ここで充分考えなくてはならぬと思います。

### 歴史解釈のむずかしさ

歴史的事件を解釈する場合、あるひとつの観点から、ひとつの立場に立てば、理屈はどうにでもつくものです。ところが、理科の学問と違ってむずかしいところです。理科の方では実験をします。人工的に純粋な条件を作つて、その中で実験をする。ある原因を与えると、或る結果が起る。起つた結果に対して、また別の原因を与えると更に別の結果が起る。こうして原因、結果をつないで行つて、ものを考えることが出来ます。条件が限られてはつきり分つているのですから、だれがどこでやつてみても必ず同じ結果が起るし、他の結果は起らない。

ところが、歴史とか、社会とか、文化とかいう、いわゆる文科系の学問では話は違ひます。そこでは実験をやることができません。例えば、この前の戦争はどうもまづかった、もう一度ガダルカナルあたりからやり直そうというような事はできない。純粋な条件といふものはないのです。歴史的な事件は、いろいろな条件が複合したもので、一元的なものではないのです。その複雑に複合したものの中から、自分に都合のいい、好きなものだけを引き出して因果関係で結べば、いかなる主張もすることが出来るけれども、それをやつたら間違ひになることが多いのです。すなわち文科系の学問では、どんな体系でも一応は作る事が出来る。ことばだけの理屈はどうにでもつく、この点が非常に大きな危険を持つていて思ひます。なぜなら多くの場合、もともとはある欲求があつて、理屈はあとからつくのです。こ



のことは非常に大切な問題だと思われず。

昔から世の中で下らぬ理屈ということの例に「風が吹くと桶屋がもうかる」と言います。風が吹くとほこりが立つ、これはまあ確かです。ほこりが立つと目を悪くする。これも確かです。そうすると盲がふえる。これも確かです。昔は盲は三味線をひいたから、三味線がたくさん作られる。三味線は猫の皮で作ったから、猫がたくさん殺されて、ねずみがふえる。そのねずみが方々の桶をかじるから桶屋の仕事がふえてもうかるというのです。なるほど、言われてみればそうかも知れません。しかし、それと同じ正確度をもって、全然あべこべの理屈も立ちます。大風が吹くと火事がよくおこる。火事がおこると水をかけねばならない。そのためには桶を持ち出さねばならない。そこらにある桶はみな持ち出し、桶屋の桶もみな持ち出すから、桶屋が損をする。これは誰が聞いても間違った理屈ですが、一体どこが間違っているかというところもむずかしい話になります。簡単に言えばこういうことだろうと思いません。大風が吹くと、ほこりも立ちます。火事も起ります。その他いろいろのことが起ります。ひとつの原因から、いろいろな事が起り、これがまた原因になっていろいろな事が起る。自然科学の実験の場合のように、純粋な条件を人工的に作って、原因はこれとこれというように、条件が分っているのではないのです。ひとつの事が起るとそれがいろんなことに波及して、すべてのことが絡みあっているのです。そこで、ひとつの要求する目的があつて

こういうところへ理屈をつけてやろうと思えば、自分の欲する結論に達することが出来る。大風が吹いて桶屋がもうかったということは、何百年のうちに、一度くらいあつたかも知れませんが、たしかに部分的には真理なのです。しかし、間違ひは、その部分的真理を一般化し、全体化して、これがすべての真理であると考えるところにあるのです。ここでは、部分的真理を一般化し、自分の欲する間違つた結論へと演繹が行われているのです。

ところが、また別の間違つた論理もあります。イギリスのバートランド・ラッセルが論理の問題を論じて、いかなる前提からいかなる結論をも引き出すことができる、要するに理屈はどうにでもつくものだといった。そこで、あるパーティか何かで、四〇三という前提から、自分はローマ法王であるという結論を引き出すことができるか、と聞かれた。するとラッセルは、それはいとたやすいことである。四〇三、同じものから同じものを引いても、残りと同じなんだから、二を引けば、二〇一である。ところで自分は一、ローマ法王は一、自分とローマ法王は合わせて二である。その二がイクオールなのだから、自分とローマ法王は一であつて同じものである、と論証したそうです。これは、四〇三という間違つた前提から演繹して行つた。間違つた前提から、正しい論理をもつて演繹して行けば、勿論間違つた結論が出る筈ですが、理屈としては正しいように見える。前の大風と桶屋の場合は、間違つた結論へと演繹して行つたのですが、今のラッセルの場合は、間違つた前提から演繹して行

ったのです。こういう論理もしよつちゅう行われていきます。例えば、原水爆実験はやめようじやないかというので、何百万人という人が署名した。そうしている中にソビエトが実験を始めると、今まで運動をリードしてきた人が、いや、ソビエトは平和勢力だから、あちらの方はよいのだというのです。だまされたと思つた人も多いだろうと思ひますがあとのまつりということになってしまふ。この場合はソビエトが平和勢力だという前提が自明の独断としてあるわけです。どちらの場合も、自分の欲求を満たすために、それに都合のいい理屈を後からくつつけたわけです。この間違つた結論への演繹、間違つた前提からの演繹、これはよく行われることで、雑誌論文など読んで、どうもおかしいなと思うときには、よく調べて見ると、どちらかの論理が使われている場合が多いと思ひます。

そのほか、論理の間違いの例として、有名な詭弁のひとつを申してみます。昔ギリシヤにソフィストというのがあつた。詭弁学派と訳しますが、要するに訴訟の際、弁護士となつて理屈をつけて勝つ、そのためどういふ理屈をつけたらよいかと一生懸命考えた人々がいたのです。その中で、一番えらかつたのがプロタゴラスという人です。ある時ひとりの若い人がプロタゴラスに入門した。その時の契約は、お礼の半分は今あげるが、残りの半分は業成つて自分が訴訟に勝つた時あげるといふ条件であつた。その若い人は秀才であつたから、一人前の立派なソフィストになつた。ところが、いつまで経つても訴訟に携わらない。勝ちも負

けもしないから、約束の御札の半分をやらないのです。プロタゴラスは憤慨して、一策を案じて、その生徒を訴えた。そしてこう言った。弟子よ、お前はどちらにしても、自分に約束の金を払わなくてはならない。何となれば、もしお前が訴訟に勝てば、初めの約束によって自分に渡さねばならない。もし、自分が訴訟に勝てば、国家の法の命ずるところに従って、お前は金を自分によこさなくてはならない。どちらにしてもよこさねばならないのだから、早く今のうちに出しておけ、こう言ったのです。ところが、弟子もさる者で、いや先生、それは違います。もし私が訴訟に負ければ、勝ったときにあげるといふ約束だから、あげる必要はない。もし私が訴訟に勝てば、それは国法の命ずるところによつてあげる必要はない、と言ったのだそうです。いろいろ複合した事柄の中で、自分にとつて都合のいい半面だけをとり出して、両方が主張しているので、主張の根本をなしているのは自分の利益なのです。これほど複雑な理屈は余りないけれども、とにかく頭の回転の早い人に、べらべらと理屈をつけられると、どこか変だとは思うけれども、どこが間違っているか分らないから黙つてしまふという経験はよくあることです。理屈のつけ方というのはよほど慎重に考えねばならぬものだと思うのです。

## 自然科学と文化科学

以上申しました通り、文科系の、歴史とか社会とか文化とかいう領域では、どの主張にも、ある一部の理屈はあるのです。盗人にも三分の理と言いますが、その通りです。いろいろのものが複合した中で、その一部分をとり上げ、それを全体と断定すれば、そうだと言えなくもない。自然科学のようなきめ手のない領域なのです。たとえば歴史の研究の場合、関ヶ原の合戦が、何月何日何時に起つて、何時に終つた、その間にこういう経過があつたというようなことは、その当時の手紙だとか、日誌だとかの客観的資料を使つて詳細に調べてゆけば、正確に立証できるでしょう。しかし、家康の人物はどうであつたかというような人物論や、ある時代の性格といったようなことになる、それを書く歴史家の力量次第、研究者の人物によるところが大きいのです。ここに自然科学の研究との違いがあると思います。

論理を構成する人が、ひとりよがりの独善家であつて、どこまでも自分の立場を固執してゆずらぬということになると、一応その理屈は立ちます。学問のある、視野の広い人は、なるほどそういう事もあるかなあと思つて、つい考えてしまふけれども、「無学者論に負けず」という言葉の通り、自分の利益や立場を固執する人の理屈は、がんばりさえすれば通つていくということは、われわれもよく経験することです。そういう人には、その人が精神的に、自分と同じ程度に成熟するのを待つよりほかはない。つまり、自然科学の場合なら、実験は誰がしても、どんな変な人がしても、必ず同じ結果が起るけれども、文化科学の領域での判

断、主張は、その研究者の人間による、すなわちそこにはある倫理的な要素が入って来るのです。

それ故、その時々の特流に巧みに便乗するような人の言うことは、眉につばをつけて聞くべきです。理屈はどうにでもつくという点は、文科科学に於ては実に重大な点だと思えます。自分の要求に合致した理屈を固執するといった態度は極力さけるべきです。独断家や、ただもう夢中になった、いわゆるいかれた人と議論などしたらたまりません。学校の教師は、そういういかれた学生と、毎日議論しなければならぬことがあります。

大事なことは、事実というものを尊重して、事実在即してものを見ることです。いわゆる知的直観とでもいうべきでしょうが、直観力で事実の本体を見抜いて、いろいろな複雑な要素のうちのどれが大事であるか、その大小軽重を見ぬく良識というものが非常に必要だと思えます。それによつて、これが法則であるという仮説をたてます。そして、その仮説を事実とつき合わせて検討していくわけですが、その場合、その仮説にとつて都合のいい事実をあげるだけでなく、都合のわるい事実はないということも立証しなくてはなりません。

### マルキシズムの観念性

事実を大事にしなくてはいけない、主観的な自分の頭に浮んだ独断で理屈をつけるのはい

けないと申しましたが、もともとマルキシズムというものはそういう考え方から出発したのです。それ以前のドイツの観念哲学が、雲の上で散歩しているような、ことばだけの抽象的な体系で安心していた。それではいけない、真理は教義に合致したものではありません、むしろ事実合致したものでなければいけないということをしきりに言いました。例えば「アンチ・デューリング」などを讀むと、これがよく分ります。この世界が出来る前から、どこかに存在していた範疇だとか、法則だとかから判断してはならない。もしそういうことをすると、「世界が逆立ちをする」という有名な文句があります。ここまではまことに正しかったと思います。しかし、そこから先が変なことになった。前世紀の真中の三分の一は、自然科学の方法ですべてを律するのが正しいのだという考え方が風靡したのです。あの頃には、観念ではなく、もつと手ごたえのある確かなものがありそうなものだ、マルキストはそのように考えてその根本的なものを物質に求めたのです。ところが、その物質というのも実は一つの観念に過ぎなかつたのです。それで、下部構造が上部構造を規定する、物質が精神を規定するというマルキストの論法が生れるわけですが、そのことは部分的には随分あり得ることです。けれども、それはあくまでも部分的な真理にすぎないのに、それを一般化して、常にそうだ主張するので、妙なことになってしまったと思えます。

昭和史論争というのがありました。もつと徹底してやるべきだったと思いますが、いいか

げんで立ち消えになってしまいました。その「昭和史」(岩波新書)の出た頃は、左翼の主張が非常に盛んな頃でした。それを書いた人が、これはコミンテルンのテーゼによって書いたのだと言っています。コミンテルンのテーゼというとい九三二年、あるいは二八年です。三二年が主になっていますのでしよう。三二年といえば日本では昭和七年、つまり五・一五事件が起つた年です。二八年という昭和三三年です。ああいうごたごたが起る前です。昭和のいろいろな複雑な歴史が起る前か、起りはじめた頃に、よその国で作られたテーゼに従って、自分が経験した、自分の国の歴史を判断するということをやったのです。自分の経験とか、実際に接した事実とかは考えずに、その前によそで作られたテーゼに従って判断したというのは、先ほどのエンゲルスの戒めを破っているわけです。エンゲルスは、今読んでみると浅薄な思想家と思うけれども、世界のできる前からどこかに存在していた範疇なり、法則なりによって判断してはいけないという彼の主張は、正しいと思います。つまり昭和史の著者は、マルキシズムできびしく戒められたはずの先験的方法の誤りを犯しているわけです。

元来唯物論は、観念思想、イデアリスムスに反対して、もつとたよりになるもの、さわつて触れて、確かにある物を基礎として、これが科学的根拠になると思つて、現実から出発しようとしたのです。ところが、それがドグマになってしまつて、観念左翼と言われるようになってしまったのは、まことに皮肉なことと思います。そういう人たちの言うことを聞く



と、かくあるはずである。だからかくある。もしそうでない事実があれば、その事実是非科学的だから、事実の方が間違っているというふうです。教条に適応しようとするために事実を無視してしまつたのです。マルキシズムの世界観を書いた本をよむと、最初に真理とは事実合致したものであると書いてある。それをやらないで、自分が思い浮べたある観念的な法則に事実をあてはめて行くような皮肉なことになりました。

### 未来への幻想

最近では、世界の事実がマルキシズムの法則に背反することが分つて来たので、ひところ風靡したそういう解釈は、今はもう修正されたり、次第に消滅して来たようです。今まだやつている人があつたら、随分おかしな話だと思ひます。かつての進歩主義者たちも、今は進歩主義者としては発言してはいけません。しかし、いつの時代でも必ずこうなるはずだといふような、間違つた論理を進行させる一つの大きな動機があると思ひます。それは、人間が未来への関心を強く持つてゐるということです。「未来が現在を規定する」という有名なことばがあります。人間が死なないといふことがはつきりしたら、めんどろな事は明日しようといふので、いつまでも何もしないでしよう。いつか年をとつて死ぬと思ふものだから、今やつて置かねばならぬと考える、未来が現在を規定するとはそういう意味でしょう。

未来が必ずそうなる、必然的にそうなるなら、何も未来をそうさせるべく手をかきなくもいいはずです。しかし、なるほど論理的にはそうだけでも、心理的にはそうではない。未来が必ずそうなるなら、自分もその未来にあずかろう、参与しようということになる。未来がこうなるぞと聞かされた時、人々は鼓舞されます。勝つ方につこうという気もあるでしょう。だから、未来がどうなるかということ、人間は非常に知りたいのです。

しかし未来がこうなると言えるのは、信仰の立場からだけだと思います。理智の立場からは、未来について断言はできません。誠にたよりのないことです。未来はただ一步一步手さぐり、足さぐりして踏みしめて築いてゆくほかはないのです。未来はわからないのです。しかし宙に浮いたようなものであるというのは、いかにも心細いことだから、何とかして、未来はこうなるぞということ、断言してくれる教祖の方にかけてしたくなる。けれども、未来のたよりのなさに堪えて、一步一步踏みしめて、築き上げてゆく、その不安なたよりのなさに堪えてゆくのが本当の勇氣だろうと思うのです。少なくとも、ある一面的な理屈から、一切の救済をとなえるという説はみなあやしい。あとになってみると、みなまやかしの煽動であったということ、われわれは随分経験しました。事実を一つ一つ確かめて、一步一步進んでゆくということは、これはむずかしいことです。それよりも、教祖の言うことを聞いて、わあつと駆け出す方がずっと楽だから、みんなそれをやりました。その例を一つ申してみま

す。

一九五六年でしたから、今から七年前です。私はベルリンに行つて、東ベルリン、西ベルリンの様子を、出来るだけ精出して調べてみました。それを文芸春秋に書いたのです。そうしたら、森田たまさんから長い手紙が来て、あなたが書いたものを読んでうれしかった。というのは、それより一年前に、自分は東ベルリンへちよつと行つた。ひどいものだと思うて、そのことを書いて朝日新聞社に送つた。そうしたら、新聞社が、これは事実の認識が間違つてゐるというので没にした。ところがあなたの書いたものを読んで、事実の認識が間違つてゐないことが分つてうれしかった、という内容でした。今から七年前は、世の中全体がまだそんな空気でした。十日ぐらい前朝日新聞に、森本さんという若い記者が、ベルリンに行つて現地の実情を書いています。もう今は疑う余地はありません。

こうなるまで、われわれ日本人は、世界について非常に違つたイメージ、違つた表象を持つていました。たとえば、ひところはスターリンソ連こそは自由の国である、より高い次元の自由がそこで実現されているのだというようなことをしきりに聞かされたものです。ところが、ソ連自身がスターリンというのはひどいものだと言ひ出したので、スターリンを礼賛していた人々は一体どうするのだろうと思ひます。又中共は柔和の塊である。平和の化身であるというようなことが随分いわれました。だが、今になつてみるとそうでもない。みな

幻影だったのです。幻影というものが、実に強く世の中を動かします。ことばだけの理屈で、こうあつてほしいという欲求から生まれたイデオロギーの教祖に振り回されて、随分たくさんの人が熱心に行動しました。だが、あれはみんな何にもならなかった。ああいうことはやめたいと思います。

どうも人間というものは、そういうイメージを持つものなのです。それは動物心理学からも立証されていることで、動物は物それ自体を直接鏡に物がうつるように心に写すのではない、その間に自分の解釈が入ることです。動物は、動物自身が理解したように反応するという実験があります。そういうことは、今から三十年ぐらい前、心理学の方でやかましく言われたテーマです。人間も同じで、すべて外界については自分の解釈に従ったイメージを持ち、それに従つて行動をするのです。人間の行動が外界とよくマッチして、正常な反応をしている時でも、人間はやはり自分のイメージに従つて行動しているのです。ただ反応が正確であるのは、そのイメージが外界を正しく把えていたからです。そこで、外界そのものと、外界についてのイメージを正しく合致させることが必要ですが、動物には必ずしもそれが出来ないけれども、人間は理性やその他のいろいろな能力を持っているから、外界についていて、イメージが外界そのものと一致しているかどうかを調べる事ができる。事実について調べる事ができるから、それを正確につかみ、その本体を見ぬいて、そ

の上に正確な論理を立てて結論を出すべきだと思います。外界についての不正確なイメージを持って、よその国は天国である、自分の方は悪いのだといったようなことで、わあっと駆け出すようなことをやっても、あとになってみるとあぶくみみたいなもので、何にもならない。まるでまぼろしに操られていたようなことになるのだと思います。

### 集团的妄想

青年たちは、その若さのために事実に対する経験がないから、現実感覚というものは余り持っておりません。むしろかれらの現実に対するイメージは、言葉や観念によって構成されている。すなわち何々性、何々主義によって作られたものが、この外界だと思ふのです。外界は如何にあるか、世界をどういう風に思いうかべるべきかというような、特定の表象の仕方は、若い人にとっての大きな要求です。それは大事なことであり、それがあつたために人間の知能も進むのですが、それが安易に流れ、事実を離れて、教祖がこういうのだからそれに相違ないというので、突拍子もなく事実から離れて迷妄の中で踊り出すというようなことになります。その安易ということがよくないと思うのですが、すぐ結論の欲しい時に、安易ではいけない、もつと考えろ、もつと事実とつき合わせろなどといわれても、とどまって考えることは実に難しい。しかし、急いで結論を出して、世界はこの通りだと思ふべきではない。よ

くよく悪いを致し、苦心慘憺して追求しなければいけないのだらうと思うのです。

人間の世界についてのイメージは、時によつては迷妄になることがあります。それが実は実に驚くべきところに達します。平和の問題でも、まるでその反対のことを、これが真実だと思ひこんでいる人がありますが、その驚くべき実例を、今度の戦争中にドイツ人がやったのです。「ドイツ人は優秀民族である、ユダヤ人は劣等民族である、ああいうのは殺さねばならない」というので、戦争の相手ではない、罪も何もないものを片っぱしから殺しはじめました。六百万人のユダヤ人が殺されました。ドイツ人はいま、この問題をどう始末していいのか困り切っています。ごく近頃までは、みなシーンと黙って、そういうことを言わなかったのですが、いまの西ドイツに対して敵意をもつ東の方のものがしきりに宣伝をする。あれやこれやで、もう何とかしなくてはならないことになってしまいました。ふれないでいた事実が、だんだんと表立って来たのは、「アンネ・フランクの日記」の翻訳が読まれ、一昨年のアイヒマンの裁判などからです。ユダヤ人の問題は戦争の犯罪ではない、人道に対する犯罪というべきでしょう。その摘発や裁判は、いままドイツの新聞に毎日のように出ています。

ああいうひどい妄想が社会に拡がるというのは実におそろしいことです。どうも妄想は集団的に拡がるので、その集団妄想の中にあるときは、個人はそれをべつに怪しまないで受け取るようになります。ドイツのことはさておき、日支事変中の日本人の気持も正常ではあり

ませんでした。近くは安保騒ぎもそれでした。すんでしまうと、自分はどうしてあのようなことをしたのだらうと怪しみます。

### リアリティの感覚

世の中は十年たつと一変すると昔の人は言いました。流行するものは女の衣裳と男の思想であると思います。何故御婦人たちが流行を追っかけるかというのと、こういうものが美しいのだという社会的な価値基準ができるからです。一たん価値基準ができると、自分はより美しくなろうというので、だんだんせり合つて、だんだん極端になる。

極端になつたものは、普遍的判断からすればみつももないのだけれども、流行の価値基準の中に於いては非常に高いことになります。女はその容姿風采によつて、最も自分の力を發揮するわけでしょう。女の社会的に通用する通用価値の高いところへというので、流行風俗というものを非常に気にするのでしよう。

しかし、男にとつては、それは大して役にたたない。それよりも社会的な優勝劣敗が男にとつては最も大事なところでしょう。

それで、思想をもつて立つ人は、流行的な価値基準において、自分の方がより高いということを示そうとしてせり合いが始まる。しまいには、現実から離れた、まるで幻影に過ぎな

い馬鹿げた思想が支配するということになるのだと思います。

先刻申し上げた通り、ひと通りの理屈なら、どんな理屈でもつくものです。一通りの理屈がついて、それでわあつと世の中にはやる思想というのは、まことに警戒しなければいけないものです。新しい思想がはやったからといって、すぐそれに飛びつくのはよくないと思うのです。私の学生時代は、大正の末、昭和の初めでしたが、何でも新しいもの、新しいものと追っかけていった時代でした。あれも異常な心理ですけれども、おかげで根のない、中味のない人間ばかりできてしまいました。

リアリティに対する感覚、事実をきびしくみつめるという心がまえは、われわれには欠けていると思います。実は世界中に欠けているのでしよう。これは人間にとつてむずかしいもので、なかなか持てるものではないけれども、ことに近頃の日本には欠けている。昔の儒教は、経験主義を重んじたから、歴史の教養があつて事実に関する感覚があつた。だから、明治の頃の人は、事実に対する判断をあやまらないで行くことができたが、それがなくなつて、論理、抽象的思考、イデオロギーのようなものから事実を判断するようになって、それから不安定になつたのではないかと思うのです。大正の終り、昭和の初め頃の人々は、随分勉強したけれども、それは外国人がこう言つたというようなことを紹介するのが学問だつたのです。例えば三木清などという人は、難しいものを読みこなす力には実に感心しますが、



あの方自身が、自分の現実について言っていることを読むと、どうもつまらない。大袈裟な難解な表現の底に、中味はあまりない、そういう風潮が一世を風靡しました。

当時の学問は、ドイツの学問を範としていましたが、そのドイツのくせは、言葉に非常に重きをおくのです。何々性、何々主義ということ、煩雑な言葉を使って、一応つじつまを合わせるというくせがある。それもドイツ人がやるならそれでもよいでしょう。しかし、ドイツ人がやったことを、まるで性質の違った日本語にあてはめるのですから、日本語だけ読んだのでは、何が何だか分らぬようなものはやるようになって、自分の大事な考える主体というものがなくなつた。

われわれの、ことに世界のリアリティに対する感覚が乏しいことの原因と思われるのは、日本が島国だということ。島国だから、よその国は極楽みたいに考える。昔から、唐、天竺というのは立派な国で、日本は世界の果てにある小さな国だという卑下感がずっとありました。しかし、外国についての正確なイメージを持つことは実に難しいことで、ヨーロッパ人でも普通の人は駄目です。ドイツ人はフランス人のことを、フランス人はドイツ人のことを、とんでもないイメージでとらえています。島国根性はイギリスにもありますが、それは他の国を自分より一段も二段も低く見るのです。日本でもそれがあふり立てられた場合がありますりましたが、日本人の島国根性は、こちらは駄目だ、よそは偉いのだということで、イギリス

とは大分違うと思います。この島国であることも、世界のリアリティを判断する上に、随分影響を及ぼしていると思いますが、一番根本には、やはり宗教観があるのだと思います。

### ヨーロッパの宗教観

ヨーロッパはキリスト教国ですから、キリスト教が心棒になって来ました。キリスト教では、天地も人間も神が造ったというので、創造者と被創造者という二元論に立っていて、ヨーロッパ人はどうしてもこれから抜け切れないのだと思います。万物を創造した人格神が、自分の意志をもって万物を支配し、人間に超越している。その人格神にこの自分がいかに対面するかという考えが、すみずみまでいきわたっています。ヨーロッパ人には、神が創造した客観世界の法則を知ろうとする欲求があつて、それが自然科学の発生の一つの大きな原因になったのでしょう。十七世紀、十八世紀頃の自然科学者は敬虔なキリスト教徒でした。パスカルなどがそうです。お寺の中で自然科学の実験が行われた。ことに最初は天文学でしたが、神様が宇宙を、コスモスを整然と作つて下さつた、その法則を知ろうというのです。そこには客観的法則に対する興味が非常にあつた。

ところが、バイブルにはまた、ユダヤ人に対する呪いの言葉がたくさん出ているのです。それは、バイブルが出来た頃に、キリスト教徒とユダヤ人との間に激しい衝突があつたので

すが、その痕跡が反映しているのです。ヨハネ伝などは猛烈です。そういう呪いの言葉が、神聖な言葉として二千年近くも人間を教育してきたのですから、結局とんでもないことが起ったのも理由がないわけではありません。中世の間、ユダヤ人は非人間としてひどい扱いをうけていた。それが二十世紀の世界危機のただ中であって、第一次大戦後のメンタル・パランスを失ったドイツ人の心に宗教的ではない形で蘇えったと思うのです。キリスト教国のどこへ行っても反ユダヤ主義のない国はありません。

ところが、日本には創造神という考えはありません。創造する人格という考えはない。古事記のはじめの方にちよつと出て来ますが、あれはおとき話です。天理教には、そういう神道の世界に浄土系の思想を盛り込んであり、創造神はあるけれども、キリスト教の人格神とは余程違うと思います。キリスト教の人格神は、呪つたり、うらんんだり、恐つたり、威嚇したり、そういうことをしきりにやります。日本にはそういう性格の人格神はない。むしろ、日本人の気持は、創造被創造の二元論ではなくて、すべての存在は一つである。存在の統一という考えの方がずっと強い。すべてのものがとけ合つて合体する。だから、樹も、動物も、狐も、乃木大将や東郷元帥のような偉人も、すべて畏敬されるべきカミになりうるのです。存在の間にそう区別はないのです。ヨーロッパでは神が人間を特別なものに作つて、動物も人間に食わせるために作ったのです。人間と動物はまるで違う。だから進化論は非常な迫害

を受け、激懐心をかき立てて大騒ぎだったので。一九〇〇年頃のヨーロッパのことを読むと、それはよく出て来ます。進化論などとてもない話だと、今でも思っている人がある。アメリカのある大学では、一九二〇年代に、キリスト教に反するという理由で、進化論を教えるてはいけないということがあつたほどです。

われわれ日本人には、そんなことはまるでありません。昔から輪廻ということをして、来世は別なものに生れてくるかも知れないし、人間とほかの鳥獣との間に根本的な相違はないと考えていた。だから、進化論はわれわれに素直にうけ入れられたと思ひます。われわれは天地の創造は、偶然のコンビネーションによつて出来たというように思ひます。複雑な要素が組み合つて、生々流転する。無から出て来て無にかえる。われわれが死んで自然に戻る、きれいなさっぱりと神道のおはらいをして、清らかで何の邪念も残らない。客観世界の法則をしつこく追求するということは、あまりやらなかつたのです。これが、世界の事実を離れて、希望的思考にふける傾向を生み出す原因の一つをなしているのではないかと思ひます。勿論希望的思考ということは、西洋人にもいくらもあることで、日本人だけの欠点ではないのですから、そう簡単にはいえないと思ひますが、そういう傾向が多いように思ひます。

## 日本人の宗教観

西洋では神が創造、審判する。きちんと世界ができていて、そこに人倫の根拠もきまつている。しかし、東洋では、仏教などの考え方は、混沌としたものがぐるぐる廻っていて、それがいつぶつかつて、どんなものができるか分らない。泡が結びかつ消えるようにして動いてゆく。西洋人は日本人は神につくられた存在、神につくられた世界を信じないと思ひ、それは虚無主義だといふけれども、決して虚無主義ではない。人倫の根拠もちゃんとあるので

物の考え方 (竹山)

このように人間として生まれてくることは、実に不思議な、人間には解くことのできぬ複雑な要素の結合であり、死によつて、またそれが解けて消えてしまう。これがわれわれの先祖の人間観でした。ところがそれはいまの自然科学の考え方と合致するのです。しかしキリスト教はそれと合致しない。これが、いまのキリスト教の非常な悩みのもとなのだろうと思ひます。ともかく、われわれの先祖にとつては、こうして生まれて来たことは千載一遇のチャンスである。生きている間は短くて、死ねばすべてがなくなつてしまう。無から出て無に帰するのだから、この千載一遇のチャンスを逃がさないで仏と合体しよう。これが人倫の根拠であつたと思ふのですが、どうでしょう。

新約聖書のロマ書、パウロの言葉をよむと、もし人間が死んで永遠の生命がないならば、短い生の間に面白おかしく食って飲んですくす他はない。しかしそれではいけない。本当の神がいて、自分達を救ってくれるなり、罰してくれるなり、とにかく生きていくことの目標がなくてはならない。いま生きているのは次に来るべき本当の生命の準備であるといっています。そこにキリスト教の人倫の根拠があるのでしょうか。パウロは、人間の本性といふものを非常にペシミスティックに考えています。きびしい神様がなければ、とてもたないといふふうには。

しかし、われわれの先祖は、人間の本性に關してもつと暖かく期待を寄せていました。千載一遇のチャンスだから、このときに仏になろう、そのはかなさを自覚するところに、生命の充実を求めようというのですから、人間性を好意をもつて解釈していると思います。客観的な絶対神、キリスト教の絵にある髭を生やしたおじいさん、わが父といったような人格神が、創造し、審判するということにはわれわれは考えない。

不思議な因縁で生まれたかと思うと、たちまち火花の如く消えてしまう短い命なのです。その千載一遇のチャンスに、何とかして仏になろう、仏に救われようというのです。自力他力の別はあつても、その点は共通していると思います。ただ方法が違うだけです。「正法眼蔵」などという本はむずかしくてよく分りませんが、死ぬということを考えて、おのずか

ら仏心が起るといったことをしきりに説いて、それが道元の思想の前提になっていきます。そういう気持は日本人には随分ありました。織田信長が桶狭間を急襲する前に、敦盛の舞を舞って、人生わずか五十年、化転のうちに比ぶれば、夢幻の如くなりとうたいました。はかなさということが有意義な行為の基礎になっているということが、西洋と非常に違っている所だと思えます。

日本人は昔から、潔く執着なく散華するということに高い価値を認めて、全体のために自己を犠牲にして来ました。特攻隊というものは、西洋人には、どこまでも敵を追いつめて殺してしまわねば気がすまない、旧約的なファナティズムのようになっています。しかしそれは違うのです。西洋人の愛国心には憎しみの気持が根本にあります。日本人の愛国心には憎しみの気持はそうないのです。それよりも、全体のために自己を犠牲にする、それも潔く、さつと行くところに昔から大きな価値が置かれていました。勿論そういう生き方の欠点もありました。佐賀の「葉隠」という本には、ただ主君のために死ぬことが目的であるといったようなことが書いてありますが、大隈重信侯の自叙伝などを讀むと、あれは佐賀の武士の間でも特別なもので、そう普遍的なものではなかつたように思われます。葉隠にはいさぎよい、勇ましい立派なところがあるけれども、浅薄だと思えます。

とにかく西洋人と違つたある生き方が、われわれの骨肉の中にしみこんでいる。体質の中

にあるのです。これが人倫も文化も作ったのですから、それを純化して、築いてゆくより他はないと思います。全く別のものになることはできない。既に申した通り、われわれは時代の風潮で西洋のものを追っかけたけれども、われわれの友達をみても、西洋人になったものは一人もありはしない。みんな中途半端な、底の浅いものになってしまった。やはり自分のテンペラメント（気質）を生かして、その足りないところを正しく補って、育ててゆくべきだと思います。

われわれの欠点は、とかく軽く浅くなりやすい。ことにものを考える場合にあっさり決めてしまいがちですが、それはもともと潔く清く朗らかな心を持つているので、あまりしつこく考えるのはいやだということからもくるのでしょう。そういう自分のいいところを生かしながら、着実に冷静により深くになりたい。今まではそんな暇はなかつたけれども、この二、三年来大分落着いて来ました。ごたごたしている間に考えられなかつたことで、考えるべきことが随分あると思うので、そんなことを申してみました。まとまらなかつたと思いますが、長い間聞いていただきました。どうもありがとうございます。



## 《質問に答えて》

### 日本人のバックボーン

(問) 日本人の強固な意志が敗戦と共に崩れ去ったというのは、それだけドイツと比較して、強固な意志、バックボーンがなかったのではないのでしょうか。また、日本人、とくに青年層が、過去の日本を軽視し勝ちであるのに、ドイツ人はそうではないと聞いています。日本青年とドイツの青年のものとの考え方の相違についてお話しいただきたいと思っています。

(答) バックボーンの問題ですが、私は人間というものはどこでもそう根本的に違うものではないと思います。特にどの国の人間がバックボーンが強く、どの国の人間が弱いということも、簡単に言えることではないと思います。昭和十六年の秋、ことによったら英米を相手にしてやるかも知れない、英米どころではない、世界を相手にしてやるかも知れないというのを聞いて、私はまさかそんなことはあるまいと思いましたが、こんな苦しくなっている、さらに大戦争をはじめるとはあはれはない。今までの日本の対外関係から見ても、どたん場になると何とか切り抜けて来たのだからと思っておりました。今からあの時のことを考えると、戦うも滅びる、戦わざるも滅びる、戦えばあるいは何とかなるかも知れない、ということをやったのだと思います。もう生活はすでに非常に悪かった。虚脱状態が戦後起

つたように言われますが、自分の経験、他人の経験を観察して思うのですが、虚脱はずっと前から始まっていた。あの頃比較的楽な生活をしていた人は意気が壮んであったかも知れないが、われわれは当時旧制高校の教授で、あの頃の世の中で最も生活能力のない人間でした。世の中全体がどうなるかという見当もつかず、ただ言われる通りやるほかはなかつた。言われる通りやつたと言えば偉いだけでも、やりもしないでごまかしていたのです。

意気沮喪してどうなるとも分らない時期は、私が思うに、大東亜戦争が始まる前からすでに始まっていたのです。ただ真珠湾攻撃以後人々が元気になった時代が半年ぐらいあつたと思います。それから後は、自分の力ではどうにもならない、何をどうやってよいか見当もつかないという事情でした。あの頃を御存じない方は実感出来ないかと思えますけれども、しよつ中腹は空いていて、空襲があれば、逃げるのに精一杯というので、全くの受身の状態で、ガダルカナルあたりからは、もう完全な虚脱状態であつたと思えます。

昭和二十年の夏、広島に新型爆弾が投下されたが、それは恐るるに足らず、ただ白いシーツのようなものを被つて居れば何とかなるであろうということが放送されました。物理の偉い先生をつかまえていろいろ聞いたのですが、原子爆弾などというものができてくるはずがない、もしそういうものが出来ていたら自分は腹をきると言っていました。何だかわけが分からぬままに、ああ、原子爆弾が落ちたそうだ、ああ、ロシヤが参戦したそうだ、ポツダム宣

言が出たそうだ、というので、精も根もなく生きていたのが実情でした。戦争が余り長く続いて、完全にへたばってしまいました。

アメリカが入って来た時には、よほどひどい目に遭うかと思つていたら、案外に紳士的なので、じつは救われたと思ひました。部分的にはいろいろの面倒も起つたでしょうが。戦争が十四年も続き、生活が極端にひどくなると、どんな国民でもバックボーンはなくなると思ひます。あの状態を捉えて、日本人そのものがバックボーンがないとは思われない。ほかの国でも、あれと同じ状態になつたら、やはりバックボーンはなくなると思ふのです。

例えばフランスの敗北は、まだ軍隊も殆んど損傷を受けず、活力を十分存しているときに、一挙に倒されてしまった。少数の人はレジスタンスをしましたが、大ていの人は大勢順応でした。後になっていよいよアイゼンハワーの軍隊が入つて来る時になつて、国中にレジスタンスが始まりました。それで、俺はレジスタンスをしたのだ、俺は一人でドイツ人をやつけたのだと皆が言うけれども、実はそうではなかつた。あの頃には実にひどい事が起つたのです。負けた国の具合のわるいことは外に出るけれども、勝つた国のことはあまり外に出ません。フランスであの解放の時期に起つたことは惨澹たるものでした。何でも五十万人が起訴されて、十万人が殺されたのだそうですが、ペタン將軍などという人が、裏切り者だといふので、その時の感情論で死刑を宣言されました。年を取つていふといふので死一等を減じら

れて牢屋で死にましたが、実に気の毒なことでした。それで、フランス人といえども、それほどバックボーンがあつたとは思えません。ドイツ人もヒットラーに対してはバックボーンがあつたわけではなかつた。イタリヤ人のごときは、一番バックボーンのないマカロニーの国だと言われています。日本は最後まで戦つたといつて、ドイツ人から褒められているくらいです。

一番頑張つたのはイギリス人ですが、それにはチャーチルという人がいて率いたからだろうと思います。そのイギリスも、アメリカも、フランスも、早いうちから近代的活动をはじめて、世界の富を集めて、蓄積が沢山ありました。日本のように蓄積のなかつた国で、あれだけ戦争が続いて、みんなへとへとになつていた時に、アメリカ人に対しておとなしかつた、大勢に順応したといつて、日本人の道徳的力をけなすわけにはゆくまいと思ひます。

何でも「日本人は駄目だ」というのが流行になりましたが、それはいけないと思ひます。それに似た心理はヨーロッパにもあります。ユダヤ人はヨーロッパ人の間にはさまつて住んで、しよつ中圧迫を感じております。すると、自分より優越した者と同じ立場から、自分の同類の悪口を言う心理が生まれます。これは実に不思議なことですが、そうなのです。ユダヤ人は、「自分はユダヤ人とは思われなかつた、ヨーロッパ人と間違えられた」といつて得意になります。「ユダヤはしようがない」というような事を言ひます。日本人にも同じ心理

があつて、自分を自分より優越したものと同一視して、自分の同類の悪口を言つて優越感を感ずる人があります。そういう判断には私は同意しかねます。

日本人は、歴史的に見ればなかなか慍悍で、とくにバックボーンがなかったとは言えませんが、ほかとの比較に於て、いろいろな条件を考え合わせて判断すればそういう断定はすぐには出来ない、私は思います。

### ドイツの青年の考え方

ドイツの青年層の考え方についての御質問ですが、それはドイツで大変問題になっていることです。ドイツ人は昔から観念論が大好きで、観念の体系を作り上げ、それを力づくで押しつけるような所がありました。ひとところ日本でも偉い人達がカイゼル髭というのをはやしました、ドイツ人は力の信者といった面があり、肩を怒らして威張っているという傾向が随分ありました。観念的な体系、つまり世界観を作つて、それを力で遂行するということをやりました。

ところが、それがしくじつて、とんでもないことになった。いまのドイツでは、世界観というとはいけない、あれは間違ひであるというので、世界観という言葉は言いません。世界観的なものは、日本の岩波といったような所に残っているわけです。ドイツの若い人たち

は、ああいうものはみなやめてしまつて、全体公共のことを考えないで、自分自身の生活程度を上げて楽しむということだけになつてしまつた。それがやかましい問題になつて、教育家、宗教家などがしきりに心配して居ります。しかし、私の直接の感じでは、チンピラや与太者みたいな者もいるし、凶悪犯罪も起りますけれども全体としてはやはりドイツ人らしく律気で、ドイツ人が心配するほどだれてしまつて居るわけではありません。先ほど申したように、今のドイツ人は、「前のドイツはよかつた、本来のドイツ人はえらいのだ」と思つていますから、戦後の日本人のように意気沮喪したり、自信を失つてだらしがなくなつたというようなことは少いと思ひます。しかし、全体のためを考え、社会正義とか平和だとかいうことを考えるのは、いささか空想的ではあるが、かえつて日本の方が多いと思ひます。

### 天皇制について

(問) 日本人が天皇を上を仰いで来た精神は、どういふものか。考え方から出て来たのでしようか。又天皇制を論じる場合に気をつけねばならない点、宗教の面、政治の面、いろいろな問題があると思ひますので、そういう点についてお教えをいただきたいと思ひます。

(答) 天皇の問題は、随分複雑な、むづかしい問題と思われませんが、私の考え得る狭い範圍のことを申しますと、天皇制というのは、ヨーロッパの神権説の上に立つ君主制とは、余

程違ったものだと思います。西洋には絶対の神様がある、その絶対の神様の委託を受けて、君主として選ばれたものであるから、神様の代りみたいなものだということで、恭々しく御辞儀をしました。それで、日本人が行幸の時などに天皇の前で頭も上げないようにお辞儀をするのを見て、自分たちの態度から類推して、天皇はゴッドの如き存在である、それに対して日本人は絶対に服従しているのだと思つたのもむりはありません。しかし、キリスト教のゴッドと日本の神とはまるで違つたものです。それを混同するから変なことになると思います。その点詳しく申すことは出来ませんが、とにかくゴッドを「神」と訳したことで非常な誤解と混同が起りました。

日本の神は、天地や人間を創造し、審判するといったものとはまるで違うものです。日本人が天皇に対するのは、西洋人が神権説の君主に対するのとは別だと思ひます。西洋の歴史の中で日本の天皇に似たものを強いて探せば、それはギリシャの神託、オラクルだと思ひます。ギリシャの昔にはドドナに神託があつて、櫛の葉の揺ぐ音を聞いて、神主が「神様の思召しはこうであるぞ」といい、長い間これを中心として、ギリシャ民族としてまとまっています。人々は「神様のおっしゃることだからさうであろう」と聞いてきたのです。これが僭主たちによつて濫用もされました。天皇はむしろこれに似たもので、民族の間に自然に成立した、土俗的な中心で、キリスト教の意味に於ける宗教的なものではないのです。自然に民

族結合の象徴として成立して来たのです。

事実、天皇は実力など持ったことは殆んどないのです。ごく昔の聖武天皇とか、後醍醐天皇などの例外を除いては、実力をもって支配したことはないのだけれども、民族の自然の中心になって、無理なく人々が従うといったものでした。だから、行幸がある時に人々が頭を下げるのは、神権説的な権力に対して頭を下げているのではなくて、民族統一の象徴であるものに対する畏敬の情を表明しているものです。しかし外国人がそれを見ると非常に誤解するということになります。

ただし明治になって、日本を近代国家としようとして、当時の西洋と同じような制度をつくろうということになりました。その頃の西洋の君主は、強権を持っていたものです。特にドイツではそうでしたから、それに似たものにしようとしました。これから天皇は、民族の統合の自然の象徴と、支配者との、二重の性格をもつことになりました。実質的には後の方の性格は稀薄だったので。しかし、戦争になれば何とかして国の中を結合しなければなりません。満州事変以来、国の中がでんでんばらばらであつたものをまとめようとして、何かにつけて天皇を看板に持ち出し、それで天皇を擬似絶対者にしたということがあつた。それは間違いで、天皇本来の性質はそういうものではなからうと思えます。

歴史を見ると、人間というものは合理性だけでは形がつくものではない。勿論合理性もな



くはならない、法によつて社会が規制されねばならないわけで、憲法を樹立しなければならぬのですが、それだけではどうもまとまらない。いざ危機となるとんでもないことが起つて来るものです。そういう人間の中にひそんでゐる非合理的なもの、全体的な歴史感を、日本の天皇は非常にうまく担つてゐるものだと思います。君主制にとつては、世襲という厄介な問題がありますが、とにかく今のところまでは、日本の天皇は、歴史によつて涵養された非合理的なものをうまくあずかつてゐるもの、それでいながら、余り出しゃばつたりしないように作り上げられたものだと思います。そういうものがなくては世の中はどうもうまく行かないのです。ひと頃のフランスは四分五裂になり、あの富強な国が落目になるばかりだったので、ドゴールが殆んど専制に近い政治を行うようになり、ドイツの場合はメチャメチャになつたのでヒットラーが出るようになつてしまつた。

人間生活の非合理的な面は天皇が、合理的に規制しなければならぬものは憲法が、それぞれその機能を果せばよいので、立憲君主制というのが世の中が一番まとまりがよいのではないかと思ひます。現にヨーロッパの社会主義の国は君主制が多い。スエーデン、デンマーク、ノールウェー、オランダ、ひと頃は労働党が天下を取つていたイギリスなどは、君主制をとり、そのためにまとまつてゐる。ところがそういう歴史的な中心がない国、ある意味で理屈を超越して人間をまとめるものがない国は、さきほど申したフランス、ドイツばかりで

なく、中南米の国々のようにしよつ中革命やクーデターでござたして、うまくゆかないのです。

しかし、天皇制のように国民を自然にまとめるものがあると、それを利用して権勢を張ろうという人間が出て来る危険があります。日本は明治維新の時、世界中の強国にとりかまされて、あやうく植民地になるところでしたが、天皇を中心に帰一することによつて、かろうじてその危機を切り抜けることができました。そういう思い出もあつて、危機に直面すると極端な考えが起つて、神がかり右翼といったものが起りましたが、これは国を滅ぼすものだと思います。また世襲という厄介な問題もありますが、それはそれとして対処すればよいのです。全体として天皇制はあつた方がいいと思うし、あるべきものだと思つております。

### マルキシズムの「物質」

(問) さきほどのお話でマルキシズムの問題が出てまいりましたとき、物質は観念であるといわれましたが、物質は観念であるという理由はどこにあるのでしょうか。

(答) 私の言葉が大変足りませんでした。「観念」であるというより「観念主義」と申すべきであつたと思います。物質が根本であるというのは、複雑なものから成り立っている人間社会の現象を、その中から物質というものだけを抽象して説明したのです。抽象とは一種

の観念的な作用ですが、その抽象の結果である物質が根本要素であるとして、それがすべてを動かすと考えるわけです。しかしそれは行き過ぎです。今から百年ほど前、前世紀の真中の三分の一という時期に、要素主義ということがしきりに行われました。すべては根本要素に還元されるべきだということです。例えば心理学では、人間の心理は観念と感情が基である、化学では分子、物理ではエネルギー、生物学では進化が根本的な要素であるという風に言われました。そういう基本的なものにだけ着目すべきだという考えが広まったものだから、人文科学の方にもそれが伝染して、社会なり歴史なりを動かす一番の根本要素は何であるか、それは物質であるということになったのです。

社会を人間の体にたとえると——うっかりすると安易なたとえになりますが——人間の体には骨格もある、筋肉もある、神経もある、循環系、呼吸器官もある、その他いろいろあるでしょう。それらが組み合わさって、共同に作用して、人間の生命となつて働いているわけです。つまり人間の体はいろいろ複雑なものがコンバインして動いているのに、もしその中から骨格だけを抜き出し、これが一番根本要素である、骨格のことさえ考えておれば人間の問題はことごとく解決できるのだといえればこれは観念主義です。実際はそういう簡単な考え方は解決できないのです。

具体的なものではない「物質」とは一つの抽象概念で、それが基だと断定するのは間違い

です。「物質は観念である」と言ったのは言葉が足りなかったので、大体そういう意味に考えていただければよいと思います。

### イデオロギーの狂信

(問) マルクス・レーニン主義は、一種の政治宗教として受け取ることも出来るかと思えます。現実にはその宗教を信じて、ソ連や中共は政策を行っているし、また学生の中にはみずからマルクス主義者と称して、それが一つの信仰になっている人もいます。そういう信仰を持つている者に対する第三者の立場はどうあるべきでしょうか。

(答) マルクス・レーニン主義を本当の信心として信仰している人とは、信仰ですから議論しても果てしがありません。昔だったら芝居の「暫」みたいに、大勢の人がわあつと湧き立っていると、花道から勇士が出て来て、「しばらく、しばらく」と言って押し戻すこともできるでしょうが、今の政治宗教に憑かれた人々が大勢いるのを押し戻すというのは、中々難しく、殆んど不可能なことだと思います。そのため随分ひどい目に会った人もいます。で、工場長とか、小学校の校長さんとかいう人が、つるし上げにあたりました。われわれの同僚なども、やられた人もあります。ひと頃はひどかったので、二十五年のレッドパージから翌年の二十六年まで続きましたが、東京の駒場(今の東大教養学部)で大ぜいの学生

が三人の先生を一室に押し込め、六時間も七時間も便所にも立たせないで、しまいには床にぶつ倒して「売国奴」と罵ったといったことがありました。しかもそれを処分しなかつた。本郷の東大の学生課へ行くと、学生課のドアが壊れているので、聞いてみると「この間学生が押し寄せて来てこんなことになったのだ」といった時期がありました。

信仰なので、改信させるといふことはむずかしいが、やはり事実在即して、「その信仰は間違っているじゃないか」と対抗する外はないと思います。何を信じようとその人の自由です。しかし、そこには一つの条件がいります。その条件というのは、他人の自由を制限しないことです。他人の自由を制限する自由、自由を破壊する自由、そういう自由を認めるわけには行きませません。マルクス主義はキリスト教から来ているところが非常に多いのですが、キリスト教では中世以来、「イントレランス」の精神が根強く伝わっていました。スペインでは、トルケマードという大審問官が出て、異教徒、つまりユダヤ人やプロテスタントなどを迫害して、これを生きているまま焼き殺したということ。それから魔女狩りです。田舎で女が狐つきみたいになることは、日本でもよくありますが、ああいうのを魔女だといふので焼き殺すといったことが随分行われた。

そのように人の行動を制限したり迫害したりするような宗教、政治的に動いて政治的に支配しようとする宗教は、信仰だからと言って放置するわけには行かない。それはやめてもら

わなければならぬ。それをやめさせるためには、こちらでもいろいろ実際的な手段を構じ、相手がそういう乱暴が出来ないように法を構じなければならぬと思います。それは当り前のことであると思います。

誰でも自分の信仰は大事でしょう。すべて信仰を持つ人は自分の信仰が絶対だと思ふのも当り前ですし、絶対だと思えば他人にその福音を伝えよう、伝道しようという気持の起るのも当り前で、すべての宗教はそれをやっています。しかし、それをやるあまり、他人の信仰を認めない、それを政治的に力づくでやっつけるという領域まで入り込んで来たなら、それはチェックして排除することではなくてはいけません。こっちの宗教も自分が絶対だと思ふ、向うの宗教も自分が絶対だと思ふから、最後には実力をもって相手をほろぼすのが当然だというのが、中世のキリスト教でした。そういうのが両方ぶつかり合ったら大変なことになるといふことは、人類が歴史的に十分経験して来たことです。それでトレランスということがおこりました。信仰をもつ人も他人を政治的に支配したり、他人の自由を拘束したりするといふ範圍には入り込まぬように心がけねばならないし、もしそれをするものがあれば、社会全体の力で、そういうことはさせないといふ規則とか慣習とかいふものを作って、破壊的暴力は断わるということになればならないと私は思います。

## 事実の認識について

(問) 事実の認識が日本人には欠けているということをおっしゃいましたが、その際島国であるということの一つの原因としておあげになりました。今後正確な認識をするためには、どうすればよいでしょうか。

(答) 日本人には事実の認識力が欠けているというように申したとすれば、それは部分的真理の一般化で、言い過ぎであると思います。儒教の教養などで育てられた人は、それどころではなかった。事実在即して着々とやって来て、明治の頃の日本の進め方が大變うまかつたから世界を驚かしたのです。しかし、先刻申し上げたようなことから、最近三十幾年ぐらいは、インテリは事実よりも観念の方に捉われるようになってしまったと思います。それをどう直したらよいかというと、結局は先程申したようなことだろうと思います。つまり、事実を直視すること、それから正確に論理をすることです。

社会にはいろいろ悪いことが沢山あります。若い時には、かくあるべきだという理想主義をもつ、これは貴重なものです。しかし、ある点が悪いから、社会全体がまちがっているのだから全体をぶつつぶしてしまえ、つぶせば後は何とかなると思いやすいものです。破壊欲とか否定するよろこびとかは、人々を大きく動かしませぬ。こういう情念に左右されてはならず、

情によらず、事に即するのが大切だと思えます。悪いところは事実あるに相違ないのですが、それを直すためには、全体的見透しを知って、大小軽重をはかることを忘れるべきではないと思えます。それから、島国根性を脱却するためには、世界とのコミュニケーションを盛んにすることが大切なのは、言うまでもありません。これはわれわれの学生の頃とは比較になりません。若い人が飛行機に乗って、一晩でヨーロッパへ行ったりするので、大変よろこばしいことです。外国を実感的に知るということをもつとやりたいと思うのです。ただ何ごとにつけても、半面の欠点はあるもので、外国との文化交渉でも、通弁、通訳みたいなことばかり達者な人がいますが、心すべきことだと思えます。

よその国では、さかんに日本へ学生をよこすようになりました。日本もなるべく若い人を送って世界的な認識をもつようにしたいものです。私は東京大学の文学部のドイツ文学科というところを出て、ドイツのことを専門にいたしました。帝国大学のドイツ文学科といえ、一番ドイツのことを知っているべきはずのところですが、ところが、「ナチスとは何か」ということについて、認識をもっている人はなかつたのです。軍人さんはドイツについての認識をもつのが役目ではありません。一番知るべかりしはずのところは認識を持っていないのですから、軍人の認識不足を責めるわけにはゆきません。そこで、ドイツについて夢みないな、神がかりみたいなことを言っていた人が沢山ありました。「ヒットラーは神格を得た



から、あやまりのあり得ようはずがない」というようなことを言った人もありましたが、あ  
あいう夜郎自大の妄想を描いていた頃とは、今は随分違って来ましたから、これはいい傾向  
だと思っています。

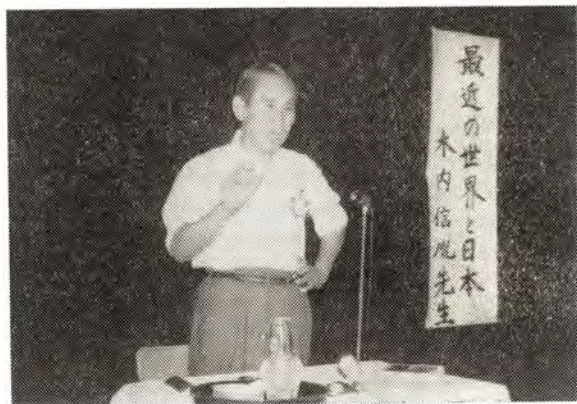
### 講師略歴

東大文学部独逸文学科卒業、旧制第一高等学校、東大教養学部教授を歴任。戦後「ビルマの豎琴」  
によって文筆活動に入り、「ヨーロッパ紀行」「続ヨーロッパ紀行」「まぼろしと真実」(以上新潮  
社)「剣と十字架」(文芸春秋新社)等で独自の文明批評を行い、一方また「古都遍歴・奈良」(新  
潮社)等の日本の古美術のすぐれた鑑賞家としての業績がある。現在「芸術新潮」誌上に「京都の一  
級品」を連載中。雑誌「自由」に連載中の「聖書とガス室」は十月完結。



最近の世界と日本

木内信胤



はじめに

—前回の講義で述べた見地に立って—

世界

EECブームの退潮……西欧陣営内の不一致……アメリカの優位性の後退……  
：中ソの分裂……核停協定の調印

日本

経済の不調——物価問題・国際収支問題の擡頭……左翼陣営の分裂……自民党  
内における泰平ムードの消滅……不安の増大と新情勢の胎動

〈質問に答えて〉

## はじめに

——前回の講義で述べた見地に立つて——

私、この会でお話するのは今年で四度目で、今までお話したことは『国民同胞感の探求』の続篇及び続々篇、それに昨年度の合宿記録『新しい学風を興すために』という本にのっています。皆さんはこれを読んで来ておられる建て前だということですから、そのつもりでお話しします。

『最近の世界と日本』という題をつけたのは、最近の世界と日本が非常に変わってきたように見えるからです。それがどんなに変わり、またどう変わってゆくかということとは、私がいま申したいくつかの本に書いたような見方にならば、まさに予見できたことだし、殊に最近の日本の姿などは、はっきり予想通りになつてきています。そこで今回は、世界の見方という広汎な問題を離れて、現実問題中の現実問題、いま現に燃えている問題についてお話ししたいと思います。それはつまり今迄に述べてきた大局観に立てば、現実問題にどういふ解釈が成り立つか、ということ、いままで申したこととつながる訳です。思想というものは鍛えなければ駄目ですね。かりにA∥Bという説明がある。が、同じA∥Bと言っても、鍛えられたA∥Bという判断とそうでないものとは、非常に違います。例えば東京から仙台へ行つた

という場合に、大阪へ行こうか仙台へ行こうか、さんざん考え抜いた上で仙台へ行つたのと、いきなりぱつと仙台へ行つたのとは、非常に違いますね。同じように、今の世界はこうだ、今の日本はあだといった説明も、鍛えられた上の説明と鍛えられないままの説明では、大変な違いがあるのです。今日の話は、そういう意味で、いままでの本に書いたことを鍛えることになろうか、と思うのです。

さて、本論に入つて、世界と日本とに起りつつある最近の出来事について、ここにずらつと項目を並べてみました。新聞を読んでおれば大体見当はつきますね。「核停条約の調印」や「中ソ分裂」などは周知の事柄でしょう。「アメリカの優位性の後退」も、何となく解るでしょう。これらを並べたのは、何がここに総括して現われているかを掴んでもらいたいからです。何だか世界全体が今迄とは調子が変わつてきた、という印象にとれませんか。とれるでしょう。私もそう思います。そこが、今迄述べてきたような大局的な世界観にのつかつて解釈すれば、ズバリズバリわかってくる、と私は思っています。世間では、末節的知識をよせ集めれば大局観になる、と思つているのが普通の人の考えですが、それでは次々に起つて来る問題に引きずり廻されて、動きがとれなくなつてしまふ。その点にはあとでも触れますが、まず大づかみに見て、世界には今大きな変化が起りつつある、ということ、心に留めておいてもらいたいと思います。

同じように日本の場合でも、「物価問題・国際収支問題」が荒れてきて、えらいことになっていきます。当然これが政治に影響をもってくる。自民党における「泰平ムードの消滅」とはこのことです。私は一昨年文芸春秋に、「池田総理は辞めないでいいのか」という文章を書きました——この題は向うでつけたのですけれど——、事実は着々そういう風になっていられると思われる。私が一ヶ月位前からいろいろな会合で言っていることは、これはどうしても、経済も政治も同時に、相当な異変が起らないとおさまらない、ということなんです。そしてその異変に向って、事態は着々進んでいると私は思っています。これは視野を小さく、現実の政治・経済の局面としてみれば、相当恐ろしい異変であり、場合によっては、とんでもないことになって行くかも知れません。しかし大きな視野から見れば、実にめでたいことで、それで始めて日本が日本らしくなるきっかけになる、と思うのです。現在のような日本に何時までも停頓している限り、日本は駄目なのですから、漸く時過って、そういう大変化が起るのであろう、とこうした意味で、非常によろこぶべきことになるのです。

困っているのは政府・自民党の側だけではありません。左翼陣営の方でも、この間の広島の水禁大会を見てもわかるように、大変もめています。つまり凡ゆる方面に動揺が来ている。そしてこの動揺の激化を通じて、新しい情勢の展開へ向うだろう、というのが私の時局観なのです。今からその個々の点について解説して行く訳ですが、最初に言ったように、私

の大局的な世界観に立脚すれば、これから話すような觀察が生れてくるということ、しかもそれに基づいてどのような将来への予想が出てくるか、そしてそれに対応すべき我々の身の処し方、諸君で言えば勉強のし方はどうあるべきか、というようにことに留意しながら聞いてほしいと思います。

## 世 界

### (1) EECブームの退潮

EECが、昨年マス・コミで、大変もてはやされた。それが今年になってパタリと止まったでしょう。全然言わなくなった。いや全然でもないけれど、その言い方がまるで違ったことに気がつきませんか。

EECについては、『続々同胞感の探求』にも出ているけれど、要するに、ルネッサンス以来ヨーロッパは非常な勢いで発展し、物質的に、機械文明的に、自然征服的に、戦争能力的に、非常に強くなった。その力が溢れて殆んど全世界を植民地化することにもなり、また彼等同志でも戦争し合つて来た。それによって彼等の力がますます鍛えられてきた、というのが近代世界の真相です。それが今度の大戦をもつて、全く進路が変わり、"旧列強は相互に戦争しない"という建前にびつたり変つた。それがEECが誕生する根本的な理由です。



この大筋を掴むことが——高校程度の歴史知識があれば、それだけでわかる筈——一番大事なことです。繰り返して言えば、今迄は隙さへあれば戦争をしかけようと対峙していたフランス、ドイツ、イタリヤが、お互に馬鹿らしいということになって、これからは争いがあつても戦争に訴えるのは止めようということになった。止める以上はそのまま対峙していた状況を切り換えて、もつと能率のいいものにしてしよう。しかしそれには相当綿密な利害の調整をしなければならぬから、一九五七年に「ローマ協定」を結び——これは二百八十何条もある煩雑なもので、しかも一つの条文が実に長い——、一年おいて五九年から実際の仕事を開始した。これがEECです。ですから、列強対峙のヨーロッパの眼で見ると、これはまさに驚くべき変化だと言える。しかし、今言つたような世界観の目で見れば、全くあたり前のことをやろうとしているだけの話で、そう驚くことはない。相互に戦争をしないという点では、ドイツとイギリスも、フランスとイギリスも同じです。或いはドイツとアメリカ、日本とアメリカも皆同じです。EECを何も特別扱いする必要は全然ないのです。ただ国境を接しているもの同志、同じ大陸に住んで気分も合い、話もわかり、生活程度も似ている国同志が、先ず手を握つて、細かい条約を作り、綿密にそのプロセスをきめ、スタートしただけの話で、EEC的な動きは、今の自由圏の大国の間では、全部共通なのだと思ふべきです。

そのこの大局観がしっかりしていれば、フランスがイギリスをEECから追い出したと言つ

ても、大したことではないことがすぐわかる。いま自分達は細かい規則を作って統合をやり始めたばかりだから、その恰好がつくまで一寸待ってくれと言っただけで、別に喧嘩などしているのではないという観察が出てきます。ところが日本の新聞は、まるであれが大喧嘩であるようなふうを書く。これは大局がわからなくて末節だけを捉えているからです。自慢話になります、今年のはじめにジャーナリズムから一九六三年はどういう年だろう、と聞かれた。そこで私は、一九六三年という年は、何はさておきE E Cというものに見直しが行われる年である、と書いた。つまりE E Cも思った程大したものではなかったということがわかり、ようやくその本体を知るに至るでしょうというのが、今年に起るべき事件の一つだと、私は書いた訳なのです。そういう展開がいま起っているのですね。日本におけるE E Cブーム、(世界的にも或程度そうですけれど日本程ひどくはない)それが退潮して来たのは、当り前のことを当り前でないと思つて大騒ぎしていたのが、止まったということなのです。話のついでに、私は「列強体制の消滅」というようなことに、どうして気がつくかということをおきましましょう。そのわけの一つは、私は大東亜戦争をまじめに戦つたからです。私は、日本国民として、あの戦争はやむを得ずと思つたし、勝つ自信はなかつたけれど、国民としてやれることはやつたつもりです。私は銀行にいましたからその分野で、どうかして日本を敗けないですませよう、という努力です。戦争の終り頃、東京で爆撃を受け

た時など、死ぬことを何とも思いませんでした。私も子供も家内も。苦しいとは思いません。ひもじいとも思わなかったけれど、まじめに勇敢に努力しました。その努力をした心境だからこそ、世界がぐらつと変ったことが、胸にびーんと響く訳です。戦争の時に不満々で、ぼやぼやしていた人には、到底今のこの大変化はわかりません。言葉では受け取れるかも知れないが、その意味は本当にわからないと思います。そういうところに大事な分れ目があるのです。どうしてかと言うと、そういう心境でいるところへアメリカが進駐してくる。アメリカが来れば大変なことになると言われていた。それが實際来てみると、驚ろくぐらい自他共に状況は大変穏やかである。文学通り一億総決死だった国民が、どうしたわけか、復讐心というものをさつと捨て去ってしまった。この事実は実にいろんな事を教えてくれます。一寸難しくなりますが、自覚されている我のほかに、自覚されない我というものがあることを、こういうときに感じるのです。自覚している自分は、実に梓の小さな自分で、その背後にもつとすばらしい何かがあつて、それが動いているのだというような事を感じさせるのです。歴史の流れを見つめていると、今迄相互に争いながら生きて来た人類が、そのステージを乗り越えて、新しい広やかな次元に到達したような印象を受けるのです。誰もそうしようと思わないのにそうなる。それを無自覚の我の所行だと言い得るならば、今の列強体制の消滅ということは、物すごく深い意味を持つて来ます。このポイントをおさえれば、日本とアメ

リカとの関係も、EECができたことも、何もかも皆それで解釈できるのです。こういう風にあれもそうだこれもそうだ、という具合にわかつて行つて、いろんな支えができ、その支え全体がピラミッド型に観察の体系をつくるのが思想です。だから私は、絶対真理というものを遮二無二求めようとは思わない。そうではなくて、我々が取り組んでいる当面の問題を解決してくれる矛盾なき体系を求めているのです。知識が、考え方が、矛盾なき体系に組織されていけば、とにかく心は平らかです。今迄聞いたこともない事件が起つても、別に驚かずに解釈ができるからです。自分の考え方のどこを一つ掴まえても、それで全部がぶら下つて行くような感じですね。そういうものをあつちからもこつちからもつついて、それで思想を鍛えて行くのです。これはEECに関するだけのことではありません。EEC自体についても、EECブームの退潮についても、あつちからもこつちからも掴まえてゆくことが大切です。

## (2) 西欧陣営の不一致

西欧陣営の不一致が端的に現われたのは、今年の一月、ドゴールがイギリスのEEC加盟に反対し、とうとうイギリスは入れなかつた事件です。まるでドゴールが一人であれば、不一致を作り出しているように言われていますが、そればかりではない。今度の核停協定に

対して、ドイツが非常にやきもちしている。ドイツの頭をこえて、ソ連とアメリカが仲良くなつてしまうと、現在の東西ドイツの分離状態がそのまま固定されてしまうおそれがあるからです。そのほか例えば、ガットの貿易協定の関係で、アメリカが大幅に関税を引き下げる意向を示しているのに対し、フランスが反対して、この間のガット総会は決裂状態になつたのもその一つです。また一寸面白いのは例の「にわとり戦争」というもので、アメリカが速成で肥らしたにわとりを冷凍にして、さかんにヨーロッパに輸出する。困つたドイツがこれに対して関税障壁を設ける。するとアメリカがその報復に二十二品目の輸入品の関税を上げる。これが「にわとり戦争」で、今世界的な問題になつている。こういう風にあれやこれやと、西欧陣営の不一致が現われてきています。

そこでこれに関連して世界貿易の問題ですが、私は貿易の自由化というものは絶対に百パーセントたるべからず、と思つています。国にはそれぞれの個性があるので、個性的に生きればよい。百日で育つにわとりを六十日で無理に肥らせて丸焼きにするのはどうも不健全だ。いくら安くても、そんなのを食べるのは可哀そうだから嫌だ、という気持になる国民があつたとしますね。そうしたら、それを認めるのが個性的なのです。そういう個性が認められるようであればならない、と思うのです。貿易が百パーセント自由化してしまつたら、世界中一率になりますから、世界で一番能率よく生産される所へその物の生産が偏つてしま

って、他所では作れなくなってしまう。これでは各国の生産活動は片寄り、従って偏頗な人間をつくることになるから私は反対です。機械も作れば織物もやる、百姓もやれば美術工芸品も作るというような、多種多様の能力を持った国民を、私は好きなのです。日本はそういう国です。日本の個性は、そういうところで發揮されて欲しいし、それが日本のためだし、世界のためでもあると思っています。私は元来貿易畑の人間で、大体は自由化論者なのですが、普通と違うのは、決して百パーセントであつてはいけない、というところです。だから「にわとり戦争」なんかまことに面白い。あれ程自由、自由と言って、人に百パーセント自由化をおしつけているようだったケネディ自身が、やっぱり報復関税を二十二品目も上げています。それ見ろ、と言いたいところだが、こういう風に世界は変わってきたとも言えるし、それをかいつまんで、西欧陣営の中の不一致とも言えるのです。

### (3) アメリカの優位性の後退

アメリカの優位性の後退というのは、EECが擡頭したこともそうだし、そのEECにイギリスを入れるようアメリカが圧力をかけたのを、フランスが拒否したのもそうです。今度の「にわとり戦争」も明らかにアメリカの権威の失墜でしょう。もう一つ重大なのは、アメリカの「ドル防衛」の問題です。この問題は日本でも大きな波紋をまき起こしたのですが、

この問題は、ドルそのものの問題、日本に対する影響の問題、国際通貨機構の問題の三つに別けて考えればよくわかります。それらをごちゃ混ぜにするから訳がわからなくなる。

日本はどうかと言うと、アメリカは貿易すなわち物の移動のみならず、資本の移動も完全に自由な国だと日本人は思っていた。一方日本は、貿易も貿易外も赤字であったのを、アメリカからの資本の移動によつてカバーして来た。資本の移動という体裁はいいが、これは借金のことと言う迄もなく不健全な状態ですが、それが実状です。ところがケネディが、卒然として資本の移動を不自由にした。金を外へ貸すのに対して税金をかけた訳です。これで日本は驚いた。これからアメリカから借りられなくなりはいないか、という疑心暗鬼からです。株式が大暴落しましたね。しかしここに日本側の思い過ごし、もしくは間違つた解釈があるのです。

アメリカの国際収支はたしかに赤字なのです。それではドルは不健全なのかと言うと、私の解釈によれば不健全ではない、健全中の健全通貨、今の世界の通貨の中で、ドル程健全な通貨はないと言つてもいい。何故なら、日本ではここ二年消費者価値が毎年六パーセント余も騰貴しており、今年は八〜一〇パーセントになりそうだと言われています。西ドイツも昨年あたりは四・五パーセント、日本程ではないとしても相当上つています。それに対してアメリカは殆んど上らないのです。数年前、毎年三パーセントほど上つて行くといふので大論

争になり、結局対策が打たれて一九六〇年頃（アイクの末期）に止まった。ケネディは若干派手だから、また少し上ったように見えるけれど、大したことはないでしょう。これから見れば、アメリカのドルは健全中の健全ですね。そこへ行くと日本はどうでしょう。先程言ったようにドイツでは四・五パーセント上ったというので、一生懸命止めにかかっている。ここがドイツと日本との違いで、日本では六パーセントはおろか八パーセントにもなろうというのに、例の下村理論ですか、池田さんがそれを信じて一向に心配しないのです。困ったことです。

そこでドル防衛ですが、ドルそのものは健全なものにも拘わらず、何故アメリカの国際収支は赤字かというと、理由は至極簡単です。第一に対外援助をやり過ぎるから。西側の国全部を代表して、後進国援助や軍事援助を殆んど一手引受けの形でやっている。だから負担が大き過ぎるのです。第二にアメリカの民間資本が国外に投資されることが多過ぎるのです。それはアメリカの国内では儲からない、税金が高過ぎるからです。この援助と投資の二つを止めたら、いや半分に減らしても、アメリカはすごい黒字になるでしょう。しかしそれを止めると、西側の世界は大揉めになるので、逐次やってはいるけれども一挙にはできない訳です。その上もう一つ国防です。アメリカは国民総生産の一割二分ばかりを（五ノ六百億ドル）を、国防費に注ぎ込んでいます。日本のGNPは十八兆何千億ですから、仮にその一割の



一兆八千億を国防費に廻すとすれば、国民生活は大変苦しいことになるでしょう（現在は一パーセント余り）。アメリカはそれをやっているのだから、国際収支を圧迫することになるのです。こういうことで赤字の理由ははつきりしています。アメリカの片棒を担ぐべき国が、ざるをきめ込んでやるべきことをやらない。そうかと言って怒っては面倒になるから黙っている、というのがアメリカの苦しいところで、止むを得ないから民間投資の流出を少し難しくしたのが、先のドル防衛なのです。

こうとわかつてみれば、何も騒ぐことはないのです。日本のジャーナリズムは、ドルの威信失墜だとか、ドルの支配は終わったとか、大げさな言葉で表現するのですね。第一ドルの支配などということがおかしなことで、これは終戦直後他の国は皆へたばってしまい、アメリカだけが富裕に見えた頃の錯覚に過ぎません。今ではそんなことはないのです。こういう誤った目で見ると、アメリカが当然なことを少しばかりやったのを大騒ぎする訳です。日本も、ジャーナリズムの尻馬に乗って騒ぐよりも、自分の手で自分の経済安定策をしつかりやっけて行けば、何もこれ位のことでは振り廻されることはないのです。

もう一つ国際通貨機構の問題があります。これはIMFをどうするか、という形で出されていますが、要するに各自支配の対手国の通貨をどうやって獲得するか、というのが国際決済の問題です。ところで紙幣が流通するには金の裏付けが要る、というのが普通の常識で

すね。私はそうは思わないので、金と絶縁しても紙幣は流通し得るし、やりよう次第で健全たり得ると思つています。ヨーロッパ人は金が好きらしいので、なかなか私のような考えは通説にならないのですが、要するに今迄アメリカは、通貨発行高の四分の一の金を持たなくてはいけない、ということをやつて来た。ところが一方世界の諸国は、第一次大戦後世界の金がアメリカに集中して以来、ドルを金の代用とする考えになつてしまつた。各国ともドルを持つことで自国の通貨は安泰と考えるようになった。ところがアメリカの国際収支が赤字になつた。それに対してケネディは、いま申したように資本輸出を引き締めて黒字にしようとしてゐる。そうすると今度は、各国の方が赤字になる番になる。それがひどければこちら側の通貨機構がこわれてしまう。これが現在のジレンマです。

この困難の根源は、ドルは金と同じだと思ひ、通貨の基礎には金が必要だと思つてゐることにある。アメリカのドルが悪いように言つてゐるけれども、そうではないのです。アメリカは自国の通貨を引き締めて、恐らく何もなくその国際収支を黒字にするでしょう。そうなればアメリカはよいのですが、他の国が困る。それならドルは金だという通念を捨てるしか解決の法はない。日本はまあ困りません。国民は金を忘れていますから。そこで、世界の諸君も日本のおやりにさい、というのが私の解決案です。このことは素人の人には一寸理解が無理でしょう。私達は三年位前からそういつて来たのですが、先き頃ミルトン・フリ

ードマンと話してみても、大体意見が違わないことを知った。こういう風に、世界一流の学者と並んでものが考えられようにならないと、本当に頭が働らきません。大仰なジャーナリズムに煽られて動揺するのではなくて、こういう人と並び得るようになるまで、根本をしつかりと勉強して下さい。結局いろいろ難しそうな問題が起るけれども、根本さえしつかりしていれば、そう大したことはないのだ、ということをお願いしたいのです。

#### (4) 中ソの分裂

中ソの分裂問題を見るための基底となる私の判断は、マルクシズムというものは本来誤りであるということ、そしてその誤りであることが、事実によつて証明されている、ということとです。スターリンはその誤りを強権でおし通して来たのですが、フルシチョフはスターリン流にはやれなくなつたから、スターリンを批判して新しい方向をとつた。フルシチョフ自身は多分意識していないでしょうが、この事はマルクシズムを離れる道を踏み出した、という事です。だから私はフルシチョフのスターリン批判以来、ソ連は「普通の国になる」と言い続けているのです。ソ連の生活状態をそんなに悪く言うことはありません。割合にいいのですし、これからもよくなつていくでしょう。よくなつて行くという事は、しかしマルクシズムを離れながら出来ることなのです。ところがマルクシズムに固執している毛沢東から見

れば、フルシチヨフのやり方は黙っておれない。そこで論争になる。お互いに証拠をあげて罵り合うことになってしまった。当然の経路です。

その経路からみて、今言った原理が今後どう展開するか、たとえば、ソ連は普通の国になるプロセスをいよいよ速めるでしょう。中共はいよいよ硬化するでしょう。しかし結局無理です。マルクシズムから見れば中共が正しいのですが、肝心のマルクシズムが間違っている以上、仕方がないですね。何時かは中共もマルクシズムを止めることになるでしょう。問題はそのプロセスですが、彼等が追いつめられるとやけくそになって、暴れ出す心配があります。例えばインドネシアは、マレーシア連邦の成立をめぐる大変ごねていますし、南ベトナムでは、ゴ政権の仏教徒弾圧に対して、何人もの焼身自殺が行われるような雲行きです。今アメリカが大物大使ロッジを送って、これを止めさせるよう圧力をかけているようです。こんな状況ですからいま中共が暴れ出そうと思えば東南アジアには幾つでも材料がころがっている。それなのに今までのところ何の動きも示さないのは、ソ連から離れた中共は力が弱くて、そんな大きな仕事はできないのではないか、とも思われます。もつと直接の問題は、蒋介石政府の「本土反攻」です。日本の新聞にはあまり書かないから、皆さんも気が付かないでしょうが、彼らはこの秋には必ずやる、と言っています。ソ連が出てこない以上、原水爆戦争にしないで、中国本土を解放できる、と言っています。この先実際やるかやらないか

は、ファイフティ・ファイフティですが、もしそんなことが起れば、これも中ソ分裂の結果の一つ、と言うことができるでしょう。私の原理から言えば、ソ連は普通の国になるだろうし中共は暴れ廻る力がない。だから東西問題は彼等を遠まきにして置いて、思想戦で勝てばそれですむので、あえて武力戦をやる必要はない。しかし蔣政權にしてみれば、切実ですね。台湾に追い出されてから、それだけを念願に十数年生きてきたのですからね。そこでまあ本土反攻が始まった時に、びつくりしないようにして欲しいと思います。

もう一つの大きい結果は、ソ連とユーゴの接近です。フルシチョフがユーゴを訪問して、さかんに機嫌をとっています。このことは、ソ連はともかくとして、東欧衛星諸国に与える影響は甚大です。私は二年程前にユーゴに行ってみました。この国の貿易の三分の二は西側とです。これに東欧諸国が、右へならえすれば、たとえ彼等は共産主義の看板を下さなくても、顔は西側を向いたことになる。そうなれば東ドイツは、必ず黙っていても西ドイツへ転げ込んでくる、と私は思っています。東ドイツと西ドイツの統一は、現代の世界の最大の「不正」を取り除くことを意味します。そしてそれは正しい世界平和の樹立、すなわち東西問題の解消を意味します。これが、今度の中ソ分裂の結果、ひらけて行くであろう展望の一つなのです。

(5) 核停条約の調印

これは歓迎していいと思います。が、問題は歓迎の仕方にあります。或る方面では、何とかいう東京の杉並区の婦人が言い出した、その祈りがきかれたのだというような、えらいセンチメンタルな喜び方をしていますが、センチメントは結構ですけれど、実態はそんなところにはない。何故できたのかと言え、ソ連が大譲歩したからです。

アメリカでは上院で今批准のための論議が進められていますが、千里の道の一步みみたいなものだ、というようない方がされています。軍備全廃という千里の道の一步に過ぎないが、とにかく批准して悪いことはなからう、無害だから、という気分です。無害だというのは、現在の戦力対比における絶対優位性が崩れないから、ということ。それに地下実験はやれるし、空中実験でも三ヶ月前に予告すればやれる、という条件もついています。正直に言って、この核停条約というものは、大したものではないのです。それに、前にアメリカが申し入れた時にはソ連が蹴ってしまったのに、今度はソ連の方が全面的に譲歩した、という点もあります。

ところでソ連は何故譲歩したかの解釈ですが、私の見るところでは、ソ連は全く追い込まれたからだ、と思われれます。国内でもこんな軍拡競争はもうとてもこの先き長くはやれない

し、東欧は離れて行きそうだし、例の中ソ分裂もある。ここはどうしても平和共存でやらなければならぬ。中共に対してでも、平和共存でやっけて行けるといふ実績をつくらねばならない。こういうところで、追いつめられている訳なのです。私は皮肉に考えて、フルシチョフがそんなに追いつめられているのなら、アメリカは少しじらしてみたらどうか、という意味のことを文章にも書いたことがあります。まああまり追いつめると却って暴れ出すかも知れない。戦争でもおこされると大変です。つまり、鯛釣りを御存知ですか、あのようにならぬの間引っぱったり伸ばしたりして、弱ったところで釣り上げるといふ方がいいかも知れませんね。何しろ大きな鯛がひっかかったものです。

## 日 本

- (1) 経済の不調——物価問題・国際収支問題の擡頭
- (2) 左翼陣営の分裂
- (3) 自民党内における泰平ムードの消滅
- (4) 不安の増大と新情勢の胎動

日本の問題は四項目に別けて書いてありますが、大体第一に集約されてしまいます。第一がわかったら、後は当然わかります。だから、時間も少いことでもありますし、一緒にお話

しましう。

先ず日本の経済が不調になったと言われていますが、その要点だけを申し上げますと、昭和三十五年池田内閣が誕生した。池田さんは低姿勢と、所得倍增計画とを打ち出した。所得倍增というのは、もともと岸さんの時代から研究されていたもので、日本の経済力を正しく評価してみると意外に大きい成長力を持っていることがわかって来た。平均して成長率九パーセント、少く見積つても七パーセント、これなら十年で倍になるというので、「所得倍增」をスローガンにしてもよからうということになった。池田さんは安保斗争直後の事態から、低姿勢で行かねばならないと考えると同時に何か国民を喜ばせて引っぱって行くことにしたい。そのスローガンとして、所得倍增をとり上げた訳です。その時にもう一つ、それからからんで低金利政策を謳った。財界はうけに入つて、どんどん突つ走つた。その結果が翌三十六年春にはすごい拡大となり、八月には外貨危機機となつて、九月から引き締めをやらねばならなくなつた。この引き締めがいろいろな理由から、政府は真面目にやらなかつた。中途半端な引き締めであつたため、三十七年の四・五月頃になつて漸く効果を出すことになつた。

しかしその間、当初の拡大気分は結局訂正されずに続いたので、当然のこととして消費者物価の騰貴がおこつてきたのです。その騰貴は、前にも言つたように、年率六パーセントと、いう大変なものです。すると賃上げをやらねばならなくなる。するとまたその賃上げが一つ



の原因となつて、物価が上つて行く。こうして「賃金・物価の悪循環態勢」にいつのまにか転げ込んでしまつたのです。これは別の言葉でいえば本格的なインフレだということです。

私の判断では、この悪循環は積極的に止めにかからねば止まらない。しかし池田さんがそれをやるだろうか。池田さんが辞職すれば別ですが、辞職せず、悪循環を止めることもやらないとすれば、どんなに大目に見ても、来年一杯は持ちませんね。又しても外貨危機がやってくる。戦後四度目の外貨危機ですが、今度はどうしても自由化をやらねばならないその時期に、えらいことになりそうです。だから是が非でもそうなる前に対策を打たねばならないのです。その対策をやるための期限は、どうみても来年度予算のきまる前、すなわち来年の二月が限度です。その期限を過ぎたら日本はえらいことになる、というハッキリした予言を、私はしているのです。その期限に間に合わず、手遅れになつたための破局が、来年予定されている総選挙とかち合つたなら、政情はそれこそ予断を許しません。万一社会党が選挙に勝つて政権が移つたら、周知のようにこれはマルクシズム政党ですから、とんでもない日本になつてしまいます。だからいまは丁度ナイヤガラ瀑布の上流にボートを浮かべて、それが滝の方へ走つて行くような感じで、早くうまく岸の方へつけねばならないのです。

こういう事情ですから、いまはまことに日本人というものを冷静に考へてみる必要があります。日本人は実に物わかりが早い。しかし一方附和雷同という又何ですが、わーつとなつ

てしまうところがある。安保斗争もその一例ですが、先に言った財界が、所得倍増・低金利というと、突っ走ってしまったのもその一つです。これは掘り下げてみれば、日本に即した、日本の地に生えた、しっかりした学問がないから、ということになるでしょう。外国の翻譯学問、これが明治以来続いて来てほんものの学問がないのです。だから日本人は駄目だ、というのではない。明治以来の日本人のあの業績は大したもので、あの業績をあげるためのこれは一種の犠牲のようなもの、と考えてもいい。そこをなおせばよいのです。そしてそれをなおすことは、そう難しくないと思つていますが、その根本は別に論じるとして、当面の危機を救うには現に私自身こういう経験があります。この六月頃までは、池田さんは辞めなくてはならぬなどと言うと、皆本気にしなかつた。ところが八月、例えば昨日も福岡で話したのですが、みな真剣に聞いていました。たった二ヶ月でそれだけの違いがあるので、これが日本人のわかりのよさ、転換の早さだと思ひますが、事態の冷静な客観的判断を提出すれば、存外それで済むかも知れません。

さてしかし、日本を本当になおすには、政治経済の同時解決でなければ駄目だ、ということを最初に申しました。その政治ですが、まことに困ったことが幾つか指摘されます。今の日本の政治は二大政党などと言つていますが、実際は社会党の政権はできない筈になっています。若い人の投票がふえたりしているので、社会党は七年後に政権を担当するといったこ

とをいい出していますが、これは社会党が本当にいいというより、自民党がいやだからというネガティブな票でしょう。もし本当にふえて自民党とすれすれになり、あわよくば社会党に政権が移るかも知れないとなれば、国民は本気で社会党とは何ぞやということを考え出すでしょう。そうすると、とても渡せないということで、逆戻りしてしまいますね。組合にのつかかった組織しかくめないような政党、そして根柢には古くさいマルクシズム、今どんとん退潮して、やがて死滅ときまっているマルクシズムしか持てないような政党に、本当に票が集まる筈はないでしょう。しかしもつと突込んで本当のことを言うと、世界は今わづかながらインフレに進みつつありますが、この現象の背後には、意外に思うかも知れないが、社会主義があるのです。と言うのは、社会主義というものは、総じて責任を自分でとらないで、他人に、或いは国家とか社会とかにとらそうとするのです。自分が貧しいのは社会のせいだ、国家のせいだということにして、病気になるっても国家が保障、失業しても国家が保障ということになる。これには一理あるのですが、その直接の結果は、国家に重荷がかかり過ぎてしまい、あれこれ議論ばかり多くて、なかなか仕事が涉らない。仕事が涉らないということは非能率を意味し、結局物価の上昇を意味するのです。さつさとはけて行けば物価は下ります。ざつとこういうことで、いわゆる社会悪によつて善良な人が苦しんでいるのをなおす、というのなら結構ですが、その直す手段が金持を無暗にしぼってみたり、所得税を上げては社会

保障をふやしていたのでは、進歩をつぶしてしまいます。この事實は段々にわかつて来ますから、社会党がいつまでもいまのようなら決して政権がこない筈になっている、というのです。

社会党に政権が行かないと決つていれば、自民党はどんなに墮落しても大丈夫、ということになります。実際のところ自民党はだれていますし、私も最も激しく自民党を攻撃している人間の一人ですが、それは何も社会党に益するためにやっているではありません。墮落の底に落ち込んでいる自民党を、その底から引き出したいからやっているのです。しかしよく考えてみると、自民党が墮落するのも、日本人全体に政治的思想がないからだ、と言えまね。まことにいまの政治は民主々義なので、国民のレベルの党しかない訳です。ですから、どうしたら国民がよくなるか、ということの研究せねばならない訳です。こういう会で一しよに勉強するのも、その研究の一つである訳です。

政党のほかにもう一つ厄介なのは、日本の憲法です。現在では天皇制や戦争放棄のことはかりが論ぜられていますが、私の言いたいのは、このままではファッショになってしまふ憲法だ、ということ。何故かなら、いまの日本憲法は、主権在民を文字通りに、浅薄に実現した憲法だからです。主権在民は、天皇関係に難しい問題があるけれども、まあいいとして、その国民が選ぶ代議士に全部の権力を与えたのが、今の憲法なのです。代議士はオ

ールマイティで何でもやれる。自分の歳費の値上げや何から何まで……。しかし最も悪いのは、自分を選挙してくれる人に利益を与えておもねることです。選挙区に利益をはかつて票を、票の本であるお金をかせぐ。選挙民はそれをいいことにしてお金を出し、代議士を道具に使うような恰好で自分の利益をはかる。権能の大きいボス連中ほどそれがひどい訳です。こうして拳世滔々として私利私慾で動き、真面目に国全体のことを考える人がいないのが、今の日本の政治状態です。第一次大戦後にヨーロッパの国々にできた憲法がこれに似ていたので、今の日本と同じように政治が墮落して行つた。その結果国民は民主政治に愛想をつかして、独裁者の出現を期待するようになった。こうしてヒットラーのドイツを始め、ファッシヨ的風潮が全ヨーロッパを覆つたのでした。この教訓にかんがみ第二次大戦後の諸国の憲法はいろいろな工夫を凝らしているが、残念ながら日本の憲法は、当時の占領軍にそういう点で眼の見える人がいなかったため、第一次大戦後の型の憲法に出来ている。だから墮落が必ず至なのです。この点に目覚めて、いまの憲法の改正を計るべきです。その方向としては、代議士の権能は大局的なこと、国策の大綱の審議立案だけに限ることです。

しかし考えてみれば、何もことごとく憲法を変えなくても、實際を直せばそれでもいい訳です。憲法改正という国民投票をやらねばならぬし、そのための大々的な国民教育をやる必要もでてきましよう。ドイツ人なら必らずそれをやります。しかし日本人には恐らく簡

略にやっつてしまふ方が向いている。つまり法文を適宜死文化して行つて、實際をどんどん改めてしまふ方が、性に合っているかも知れませぬね。

ともあれ、日本という国の体軀は割合に頑健です。今経済に痛みがきている訳ですが、大した痛みではありません。一寸手術を要するというだけのことです。前の二度の外貨危機は、二三日絶食すれば直る程度の、丈夫な青年の暴飲暴食と見てよかったです。今度は不養生が続いたので、手術が必要です。池田さんが辞職するというのが、さしづめ手術台に乗ることなのです。財界の人々もこの頃ではそれを望むももでています。どうなるかわかりませんが、結局まあ事態はそのように進むでしょう。手術を恐れないことです。日本はあの敗戦ですら耐えしので来たのですから、今度の手術ぐらいをこわがることはありません。一国の歴史には屢々大事件が起こるもので、むしろ国の永久の姿からすれば、あの敗戦すら、あつた方がよかつたのかも知れませぬ。局部的にクローズアップすれば、痛い人には大変痛いでしょう。けれども、一国の歴史とはそういうものだと思ふべきことなのです。人間は、時にはそういうすごく太い神経を養う必要があるのです。

当来（とうらい）の日本——まさにかくあるべき日本——についてお話する時間がなくなりましたが、その姿を考へて行くためにも、これだけのことはお話しておかねばならなかつたでしょう。あとは夜のパネルディスカッションの時に、出来れば申し上げようと思ひます。

〈質問に答えて〉

（問） 先生のお話によると、マルクシズムの敗退は明白であるとのことですが、学生間、特に京大ではマルクシズムが非常に権威を持っています。マルクシズムの欠陥につき、もう少し詳しく説明を聞きたいと思います。

（答） 非常に面白い問題です。先般も例のフリードマン氏にマルクシズムなどはもう消えてしまうから心配するな、と言ったところが、彼が言うのです。そうではない、日本の大学の教師の八〇パーセントはマルキストで、それが世襲的になっていて、マルキストが弟子のマルキストを後継者にするから、このパーセンテージは減らない、大変ぢやないか、ということです。しかしマルクシズムはいよいよ駄目だとわかったら、馬鹿らしくなって、総くづれになると思っています。何故駄目か、ということとは、それだけ話しても二時間位かかります。どうかこの『新しい学風を興すために』（第一集）という本や、前の合宿記録『国民同胞感の探求』を見て下さい。この問題は思想の問題ですから、いくら世襲制度を維持しておつても、学生が誰も聞かなくなつたらおしまいです。しかし日本とは妙な国で、本当の世の中の動きを説明することが、大学の学者には求められない。だから経済学者は多くの仮定に基礎をおいた複雑な体系を立てて、容易に尻尾をつかまれないようにして、のうのうと世襲制度の中

に立ててもつてゐることが、今までは出来たのです。

(問) ソ連がマルクシズムを放棄するということは、その理想や統制的政治体制の放棄、従つてソ連そのものの崩壊を意味することになるでしょうか。

(答) 民衆がそれを望むから、だんだんにマルクシズムを放棄して行くことになるけれども、ソ連は別に崩壊はしないと思うのです。何時のまにか普通の国になるので、崩壊という現象は起らない。これが、私のセオリーが普通の反共の人と違ふところです。しかも統制的もしくは独裁的政治体制というものは、或る種の国では必ずしも悪いものではないのです。事を急ぐ場合にはこの方が都合がよいことがある。ヒットラーの場合など、あれでなければやれなかつた。しかしいまの日本のような国には、独裁である必要は全然ない。いまのようにだらしがなくても、独裁よりはまだいい。勿論もつといい政治になつて欲しい。特別によくなくても、間違いをおこさない程度によくなつてくれればいいのですが……。

(問) ソ連が普通の国になるということは、インターナシヨナリズムの放棄、世界革命の使命感を放棄することになるのですか。

(答) 使命感とかインターナシヨナリズムはなかなか放棄しないでしようね。しかし實際やることは放棄したと同じことになるし、やがては放棄ということにもなるでしょう。平和共存というのは、既に放棄しているのと同じではないですか。フルシチョフは一昨年アメリカ



カに行くまでは、かなりどぎつく資本主義を悪罵していましたが、もうあまり言いませんね。少くともマルクスのように理論のお膳立てをして資本主義の崩壊は必然の運命だ、などということは言わなくなってしまった。ただ経済競争をやって、自分の方がよくなるんだ、と言っています。これは既に半分放棄してしまっている、ということですよ。そしてやがて全部放棄することになるでしょう。何故なら、平和共存で、どちらが国民の生活が向上するかで勝負をつけることになる——それなら大変に結構だと私は思っています——、比較にならないからです。一九七〇年には立派に勝負がつくでしょう。あと七年しかありませんから、どうか見ていて下さい。

（問） 貿易の自由化を一〇〇パーセントやっては、国の個性がなくなり、偏った人間をつくるから賛成できない、と言われましたが、それでは世界の経済は現状から脱却できないのではないのでしょうか。

（答） 世界の経済を現状から脱却させるのは、貿易の自由化ばかりが手ではないのです。もつとも私は貿易の自由化はしろと言っているのです。一〇〇パーセントではないと言っただけです。それが自由化だというと、すぐ一〇〇パーセントの自由化だと思ひ込んで、農村なんかでは濠州の小麦、ニュージランドのバター、東南アジアの米がじゃんじゃん入って来ると思つて大あわてしている。それをやるなと言うだけで、貿易の自由化をやるなと言う

のではないのです。そんな無茶な自由化をやらなくても、もう少し上等なことをやって行けば、世界の経済はどんどんよくなります。ただ、よくなるというのは先進国のことであつて、後進国とのギャップは開いて行きます。いまの実際の世界経済とは、先進国の経済のことなのです。先進国同志が戦争を止めて、資本や技術を交流し合つてやっているのです。後進国は或る意味では捨子にされる方がいいので、自分の力でよくならなくてはならないのです。それを、後進国がうまく行かないのは先進国の責任である、というような思想がはびこっているから、厄介です。これはマルキストに乗ぜられる間隙です。例の国際的なプロレタリアート化という考えで、煽動する訳ですから。質問から少しそれましたが、今後、後進国の問題は上手に処理して行かないと、大変なことになりましょう。ともあれ貿易はますます自由化され、皆の融け合ひはますます進んで行きます。融け合ひながら個性を維持すること、それができないような個性は大した個性ではないのですね。

(問) 現在日本の自主性がはつきりしていないようですが、国連の中でえがかれている日本の映像はどのようなものでしょうか。

(答) 日本の自主性はまさに欠如しています。今こそ自主性というものを本当に立てるべき時です。それには、日本の個性に生きることと、決して急がなくてもいいということを悟ることが先決です。そして他人も他人のペースで、ゆっくりやりなさい、というようになる

ことです。世界の全部の人に、自主性をお持ちなさいよ、と言えるような世界観を持つことが第一です。ところで国連の中で日本はどんなイメージで描かれているでしょうか。いいイメージでないことは確かです。松井大使などこまめに世話をやいておられるようですね。しかしどんなイメージが描かれているか、大して気にすることはありません。国連第一主義と言っても、国連そのものが妙なものですからね。国連、国連とたてまつっておれば、それでよいように思うのは、日本人の形式主義です。国連の中でどうして自らの個性を生かして行くかが、根本問題です。

（問） 米ソの冷戦が終結し、仲良くなつたとしたら、日本と西ドイツの立場は非常に微妙なものとなり、経済的圧迫をうける危険が多分にあるのではないでしょうか。

（答） 圧迫をうける危険はありません。冷戦が終結し、本当に仲良くなつたら、ソ連であろうとアメリカであろうと、又EECであろうと、どんなに繁栄しようがかまいません。日本は一人で、独自に立っておればよいのです。日本のおかれている根本的な位置づけを忘れないことです。これは、近代科学技術を使いこなす能力は世界の超一流であること、いまだこそ生活程度は低いが、ということは、日本人もやがていまのアメリカ並に一人当り消費をやればやれることになるということですが、一人当り資本量が同じになったら、能力は同じですから、どんな一流国と較べても劣らない仕事をするでしょう。そのときは個人の能率は

大いに上つて、生産がふえて、そのエネルギーをどう使つたらいいか戸惑うということにさえなりましょう。まして福田恆存さんの『新しい学風を興すために』（第一集）にも書いておられるように、日本人には物を粗末にしないという国民性がある。だから物資の洪水になりますね、勤勉ということさえ忘れなければ。そうなるはずの国なのです。これは三〇年先のことですが、現状に執着しない自由な心をもつて、その夢を忘れないようにして下さい。

（問） EECグループに対して、将来アジア経済共同体というようなグループをつくる必要があるでしょうか。もしあればどのような方法がよいか、具体的に示して下さい。

（答） 将来アジア経済共同体をつくる必要はありません。つくろうと思つても、できないのです。EECというものは、似たような国情の国だからできたのです。まるで違うものの間ではできっこないのです。強いてつくりたければ、韓国と台湾とでもつてつくつてみたらよい。いやでしょう。それすらつくれないものが、どうして東南アジアなどに手を伸ばせるでしょうか。もともとこういうことを言い出す根柢には、例の資源主義と言うか、昔の帝国主義的な国粋主義の名残りがありませんか、疑いを持ちます。私は不可能だという判定を下すと共に、そういう必要を唱える人の陰には、世界の現状を正しい目で見る能力のないつまらぬ思想がある、と思います。一億の人口と、すぐれた能力を持つこの日本は、孤立していても平気だと思います。また、平気でいられるような「世界秩序」を作るべきです。

（問） 資本蓄積がいかなる社会にも必要であることはわかりますが、日本の場合、蓄積された資本を誰が持ち、誰のために動かしているとお考えですか。

（答） 誰のためにといいことを、資本家のためか労働者のためか、という観念で聞いておられるとすれば、そういうことは言えないと思います。資本というものを誰が持っているか、といったことは、実はなかなかわからないのですね。株式という形を考えてみても、資本は多くの個人や法人に非常に広く分散しています。マルクシズムが言うような少数の資本家の手にないことだけは確実です。こういう場合、いわば自分勝手に概念化し単純化して考える——それがマルクシズムの特性ですが、それが先ず問題です。本当に実際のデータに当たって、結論を出すようにしてほしいものです。

## パネル・ディスカッションにおける

### 木内講師の提言

木内講師の講義が行われた第三日目の夜は、講師をかこんでの「パネル・ディスカッション」が行われた。講師を中心として四角にならべられた机には、大学教官有志協議会及び国民文化研究会の会員が着席、その周囲を二百名の参加学生全員がとりかこむという形で討議がすすめられた。

このような討議は過去の合宿教室ではなかった新しい試みであるが、今回はじめて木内講師御自身の提案により、席のつくり方もすべて講師の指示に従って行われたのである。講師が、過去四回にわたって合宿教室の講義を快諾されたばかりでなく、このような討議の場を設けることによつて会員、参加学生との意志交流を図っていただいたことは対しては、主催者はじめ参加者一同深い感銘をおぼえた。

討議の主題は来たるべき日本の真の個性的なあり方は何か、その為に準備されるべき条件、或は排除すべき障害は何かという極めて重大な問題であった。最初に講師の方から、その主題に関して後述の如く、(一)国語国字問題、特に漢字制限の勢いをどうして阻止するか、(二)東洋思想の復元―その基礎として哲学と歴史との教育を重んずべきではないか、(三)個性的な日本についての思索の深化、という三つの問題点を提示され、それについてかねがね抱懐されていた講師の考えの概要を説明された。討議は時間

の制約もあって、問題は(一)及び(二)に絞られたが討議の内容は甚だ示唆に富むものが多かった。その内容は、概略次のようである。

(一)の問題については一同深い共感をおぼえたが「戦後の国語政策は実に徹底しており教育界の現場において、その勢いを阻止することは正直に云ってまことに困難である」「むしろ英語の教師などから戦後の国語能力の低下について、国語の教師以上にフランクな意見が述べられていることは注意すべきであろう」「漢字制限のため特に漢文教育においては甚しい混乱が生じているが、これを現場では打開する方途もないままに、混乱はそのまま放置されている」「大学卒業生に見れば、一時よりは漢字が正しく書けるようになっており、そこに一脈の希望をもつことができる」というような意見が述べられた。

なかでも、「もし心ある教育者が漢字制限撤廃に意義ありと考えても、日教組のような団体が強固に存在している場合には、これを『逆コース』という声のもとに、その実行を阻害することが当然予想される。そうだとすれば、日教組の崩壊なり解体ということを伴わないで、国語問題の解決をはかることは、結局不可能ではないか」という発言は現実的であった。

(二)の問題については、講師から提示された哲学、歴史の問題及びその方向は、はしなくもわれわれ国民主文化研究会のメンバーが、戦前からささやかながら念願してきたものを、非常に明確な形で示されたものとして深い感銘をおぼえた。討議の中では「明治以来百年の間、所謂帝国大学を中心にして行われてきた精神科学のあり方に根本的な反省を加えなければいけない」という意見や、「日本人にとって基本的教養ともいべき儒教や仏教が、特殊な専門の学生を除いては殆んど教えられていないし、更に又その

ようなものを総合的な学問の体系の中にとり込んで述べられた思想史的な著述も、未だ日本にはあらわれていないのではなからうか」という意見もきかれた。同様のことは歴史においても「トインビーなどが来日して新しい型の総合的な歴史学が伝えられたのは事実であるが、それを日本人自身が生かして何かを創造するという段階までにはまだ来ていない」という意見もあった。また「高等学校では来年から倫理社会という新しい教科が発足するが、その教科内容が講師から示された問題と緊密な関連をもっており、高校の教師としては、その教科をどう生かすかということに焦点を絞って思索を深めていきたい」という発言もあった。

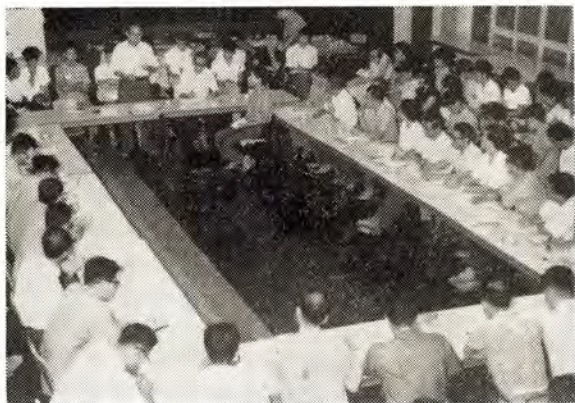
最後に木内講師から、それでは、今日から決意を新たにしてその問題にとりくむということになるとすれば、一体どのような条件が揃えばそれが可能になるかという極めて具体的な問題が提示された。その場合これを一種の教科書編集という形にしたなら、どのようなことが考えられ、どのような具体策があるかということについて活発な討議が重ねられた。

その全貌をここに再現することは出来ないが、以下には、成るべく当日の気分を活かすべく、木内講師の言葉を借りてその要点を表現してみた。

### 木内講師の提言

先程も申し上げましたように、これからの日本は経済的にはあるいは大手術をやらなければならぬようになるかも知れません。政治的にも、いままでの常識ではあり得ないと思わ





れることが起るだろう。これが本当に激しく行われれば、少くなくとも上層階級の人、政治の中枢に立つ人、会社のトップクラスの人もふくめて、そういう人たちは青くなつて心配するというような事態がおこるでしょう。

しかし私は、それは当然来るべきものが来たといふだけで、むしろ大いによろこんでいいと思いません。なぜならこれこそが、日本国民としての自己改造の絶好のチャンスだと思ふからです。そこに日本建設の第一歩が始まると思ひます。

私は終戦直後アメリカ占領軍の態度を見て、経済は三年したらどうにかなる、五年したら忘れたようになる、しかし精神問題は二十年の仕事だと考えた。前者については、三年、五年といったのが五年、十年でいった通りになつた。後者については、現在終戦後十八年、まだまだ降り坂と言つてもいい

でしょう。しかし降り坂の中に上つて来るべき底流は起つてゐる。だから、二十年と  
いう予想はほぼ当ると思う。多くの人が「だめだ、だめだ」といつて非常にこの精神問題で  
悩んでいる。しかしこの悩んでいるというのは生きてゐる証拠です。病人でも痛がらなくな  
つたら、その人はもう死に近い。苦しがつてゐるのは生きてゐる証拠です。

従つてわれわれはいま申し上げた当然の結果として生れるべき眞の日本、个性的な日本、  
それを急がず自信をもつてつくつて行けばいいのです。

そこでその「ほんものの日本の誕生」のためにはどんなことが必要か、そのための道行き  
をここで思索してみたいのです。个性的な日本のギリギリの条件は何か、最小限の条件は何  
か、そしてその条件を成就するための障害はどこにあるか、そのようなことを、特に教育の  
問題と関連させて、みなさまに考えていただきたいのです。

## (一) 国語国字問題

私は私なりに、この問題について次のように考えております。その第一は国語国字問題で  
す。戦後「国語問題審議会」が出来て、現代かなづかい、漢字制限、音訓整理表などという  
一連の政策が行われて来ました。それは日本の漢字というものは余計なものだという認識に  
立って、これを廃止してしまおうとする、いわゆる表音主義者の陰謀といつてもいいやり方

によつて、遂行されてきたものです。これが戦後の日本の虚脱状態、敗戦のショックを利用して大々的に行われることになった。しかしこのままでいたら日本文化は滅茶々にされてしまふと思ふ。

たしかに漢字は非能率のように見えます。しかし日本から漢字を取り除いてしまえば、日本の古典はもちろん、仏教であろうと儒教であろうと絶対に後世には伝わらない。日本人としての根底をなす教養をすべて捨ててしまわなければならぬ。では漢字の非能率ということは、それほど決定的なものだろうか。実は疑わしい。成る程漢字は、書くことは面倒です。覚えることもむずかしい。しかし言葉は読む方からその能率を考えていかなければなりません。読む方から言えば漢字は実に早い。私は毎日五つの新聞を見て、切り抜くための印をつけていますが、そんな芸当は漢字でなければ絶対に出来ない。一目でみて、その全体の意味を直観することが出来る。漢字にはそういう非常に便利な、能率的な面があるのです。しかも書く方が一種の芸術とむすびついていることも大切な問題として考えるべきでしょう。覚えることのむずかしさは、私のように頭は使うほどよくなる、と考えているものからすれば、全く問題ではありません。

だから私は、現代かなづかいだけは、今のところ譲歩してもやむを得ないかと思ふが、その他の点については、現在の行き方を絶対に止めなければいけないと思ふ。そう思つてやつ

ているのが、小汀利得さん、福田恆存さんなどのやっている「国語問題協議会」ですが、このわれわれの運動がもし敗れるようなことがあれば日本の文化は完全にだめになると思います。大体漢字に非常な抵抗をおぼえるということは、これをうまく教えないからです。教え方さえ工夫すれば、話は全く違つて来る。例えば木偏を教えたなら梅も桜も一緒に教えてしまふようにする。現に使っている熟語、選挙とか国鉄だとかいう言葉を漢字と共に同時に教える。東京に石井さんという非常にえらい中学校の先生がおられて、そういう方法を試みておられますが、これでやりさえすればすばらしい成果があがるそうです。しかもこうして教育された子供たちは、他の学科においても優れた成績をあげている。それはものごとを思考する一つのセンスが養われるからだろうということです。さらに漢字が造られた歴史を教えないければ、歴史に対するセンスも養われるのです。

そこで私が、パネルの先生方におききたいことは、この小汀さんや福田さんがやつておられる運動が勝を占めつつあるかどうかということです。またそれがもし負け戦さであるなら、それを勝たしめるには何をやらねばいいか。勿論私は最後には勝つに決まっていると思つています。日本の国がだめになるとは思わないから。ただそこに至るまでの所要のことがまだなされていません。それは一体何かということをお伺いしたいのです。

皆さん御存知と思いますが、岡潔先生、この方は世界的な数学者ですが、数学でもほんと

うのすぐれた発見というものは、「情緒」がないと出来ないと云っておられます。その岡先生が、漢字問題というものは、あと五年のうちに解決して元の姿に戻さなければ、日本人の基本的な情緒は若い層において失われてしまう。そしてどうにもならないことになると言つて、五年の期限を切られております。実は私は、そう聞いてぞつとしているのです。どうかしなければならぬ。これが「ほんものの日本の誕生」のためのギリギリの条件の第一点だ。私はそう考えております。

(このあとに続いたディスカッションは省略する。但しその要点は「前がき」の部分にも触れたが、要するにこの小汀さん達の戦いは、まだあまり国民に知られていない、従つて五年の期限を切るなら前途は樂觀を許さない、ということであつた。)

## (二) 東洋思想の復元と新しい哲学、歴史への要請

次に考えられる第二の必要は、東洋思想の復活、むしろ「復元」といった方がいいでしょう、そういうものです。過去三、四百年の間世界は西洋におしまくられた世界であつたため、東洋はその影を没してしまつた。日本では東洋思想はまだかなり残つておりますが、それを押さえ、押さえて西欧化を強行して来た。つまり支那においても、インドにおいても、日本においても東洋思想は一応頭を下げています。それをしかるべき位置に復元させることが必要

だと思ひます。しかし復元ということとは西歐思想をpushさえろとか捨てろということとは違ひます。また東洋思想を西洋思想の上におけということのとも違ひ。そうではなく、東洋思想を全世界の思想の中で正しく位置づけて行けということなのです。これが「当来(こころ)の日本」が建設されて行くギリギリの条件であると思ふのです。

そのためにはもつと哲学と歴史を重んじることがどうしても必要だと思ふのです。

哲学と一口に申しましても色んなものがある。存在とは何か、認識とは何か、我とは何かというような問題に取り組むのも哲学でしょう。しかし私はそのような哲学を教育の場においてむやみに復興してもらいたくはない。勿論それらも大切な問題でしょうが、「当来(こころ)の日本」を正しく誕生させるためには、必ずしも特に必要だとは思わない。そんなことよりも例えばギリシャ思想というものは、どういふものかということ、西洋の思想史の中、世界の思想史の中において位置づけし、それを成るべく簡単に、そんなに深いところに入らずに説明して行く。そして深いところに入らうと思へば入れるように、その出発点になれるように教えて行く。それが非常に大切だと思ふのです。そうすればその中には数多くの思想家が登場する。その一人一人を理解するために頭を使って生徒は苦しむわけです。それ、それをひとわたりずつと知ることとはものすごい頭の訓練になる筈です。そうやって哲学的にものを考へ得る頭を作らなければ、これからの世の中というものはとうていよくはなるまいと思

います。そのような教え方を、ギリシャ思想ばかりでなく、他の世界の思想についても日本の思想についてもやる。東洋思想の復元ということは、そういう素養がなければ出来ないと思ふのです。

私のほしい歴史というものもそのようなもので、いまの哲学的な意味での思想史を抽象的に心の問題として捉えると同時に、今度はそれを実社会の歴史のほうに乗せて、日本の歴史、東洋の歴史を説いてほしいと思ふのです。そういう歴史というものが、純粋な学問として存立するかどうか知りませんが、教育の場ではあつていいと思ふ。すなわち教育の必要上、そういう捉え方を編み出すということがあつていいのではないかと思ふのです。その場合は必ずしも日本だけを特に取り出したものではなく、世界の中に日本を浮かべたものが多いのです。

私はそういうことを考えているのですが、これについて皆さんは一体どう考えられるか。もしこういう考えが正しいとするならば、そういうことは教育上可能なかどうか。またすでにそういう着眼でやっておられる先生方がおられるのかどうか。そういうことをおききたいのです。

私自身の経験で申しますと、いま私が申しましたようなことは、中学校―高等学校でも勿論ある程度の骨組みは習ったのですが、大体は学校以外の読書に重点があつて、それをやっ

ているうちにいつの間にか色んなことを覚えた。そして学校を出てから激しい世界に生きて  
いるうち、自然その世界の生きた問題にふれざるを得ない。これをどう理解するか、追いつ  
められれば自然と歴史にかえつて考えざるを得ないということになったのです。だから狭い  
学校教育というものに無理にしばらくは必要はないと思います。学問は要するに一生の問題  
ですから、その全体の中で考えてもいいが、どうしても哲学と歴史に根柢を持つ「東洋思想  
の復元」ということをやらないと、本ものの日本は出て来ないように思う。それをどうした  
らやれるか、そこを問題にしたいのです。

ルソーに「エミール」という書物があります。そこに彼が抱懐している思想を具現した若  
者の姿が、そういう若者を造る教育の仕方として描かれている。

そこでいまわれわれがわれわれのエミールを書くつもりになって、現代という新しい時代  
を担うべき理想の人間はどうあるべきか、そういう人間を育てるためには教育はどうあるべ  
きか。そういうことを考えてみたいのです。例えば外国語は何ヶ国語をどの程度知っていな  
ければいけないのか。日本の古典、東洋の古典はどうか。歴史ではどうか、自然科学はどう  
かというような問題を具体的に考えてみることは出来るし、考えてみなければならぬと思  
うのです。そうすることによって、現代の各種の学問の分野が、一個の人格の中にどうい  
う形で位置づけられなければならないかということも、おのずからにして明らかに成る。



でしょう。

現在は原子物理学であろうと、高等数学であろうと、学問は非常に分岐して偉大なものになったが、それらをそのあるべき場所に正しく位置づけて、例えば原子物理学者はこの辺に座っているべきものだ、その発言の範囲はここまでだ、ということを明らかにする必要があると思うのです。そうすれば原子物理学者が「原子力潜水艦が日本に寄港してはいけない」などというようなことも言えなくなってくるわけです。

要するに各種各様の学問をシステムタイズして位置づけをする。そうすることがひとつの哲学ですが、またそうしてこそ、そこにほんとうの意味の哲学を打ち立てることが出来る。現代はいわばアリストテレスの哲学のようなものが特にほしいと思うのです。そのためにもうすればいいのか、どういう具体策があるか、それを是非皆さんとお話したいと思っております。

### (三) 個性的な日本についての思索の深化

第三に、以上の二点は、「当来の日本」をそのあるべき姿にあらしめる最小限度の要件だと思いますが、こうしてつくり上げられていく個性的な日本とは一体どんなものか、その問題について考えていきたいと思えます。

私は日本国民の一番大きな特長というものはひとのよいところを大らかな気持でうけいれ、それに没入してしまうほどそれに傾注し、しかも自分を失わず、何百年か経つうちにそれを融合してしまうというすばらしい能力であると思うのです。だから個性的な日本をつくるということは、単に昔の日本に還るということではないのは勿論、そういう特長を完全に発揮するということです。時には、他人のいいところに没入している間は、日本の個性を忘失しているようにさえみえるでしょう。しかしそれが日本人のえらいところで、その結果として、東西文化の集大成ということに、あるいは日本国民の自然の使命があるのかも知れない。

しかしそのようなところへ話を飛ばさずに、もう少し日本的だと思えることを挙げれば、大自然と調和していく性質がある。自然とは調和するもので征服するものではない。それは大自然ばかりではなく対人関係においてもいえるわけです。すなわち自他の対立関係でものごとが処理されていくのではなく、常に相手のなかに自分を見出すという形で処理される。それは日本人が分析的でなく総合的だということに通じるのかも知れない。

たとえば外国人と接していると、彼等の目には私のものの捉らえ方が不思議でならないらしい。いきなりポツと結論が出てくるからです。彼等は分析して、並べて、その積み上げがなされなければ、ものごとがわからない。だから問題が難しければ説明の量も非常にふえる

わけです。彼等はまず分析し、それを非常に正確にならば、順序よく整理していく、その沢山並べる技倆には私はとつてもかなわない。しかしわれわれ日本人はそういう分析の過程をくぐらないでポツと結論を出す。そうして彼等の思い及ばないことを考えついたりする。そういう直観的総合力において日本人は、もつと自信をもち、自覚をもち、それを臆することなく平気でやっつけていいと思います。普通の人は西洋の偉い人に会うと押されてしまう。そして自分の立場を失ってしまうのですが、そうなる必要はないと思う。

そういう分析的ではなく総合的であるとか、相手と調和していくとか、征服的でないとか、そういうことを日本の特長というのでしょうか。その他日本の特徴の促え方はたくさんあると思いますがそうしたことについても思索を深めて行きたいと思う。これが「ほんものの日本の誕生」のための第三の要件です。

以上三点を中心にして皆さまの意見をぜひお伺いしたいと思うのです。

(以上(㊦)の点についても(㊦)の点についても、そのあとに続いたディスカッションは省略する。但しその最大の要点をいえば、これも「前がき」のなかに一言したが、(㊦)のような趣旨に添うた動きは、そう気がついてみれば、余りにも貧弱であるのに、いまさらながら驚かされた次第であった。(㊦)については、時間不足の関係もあって、充分な論議は出来なかった。しかし木内講師がその講義のなかで述べられた「現代の世界においては、日本人として、いまのようにバサバサとあわてて仕事をあせる必要

は少しもないのだ」という点の悟りが、講師が(白)のようなことを述べられる基礎であることは、このパネルにおいて明らかに理解することが出来た。講師が、このパネル・ディスカッションを一種の「補講」と考えられた所以もそこにあつたものと思う。

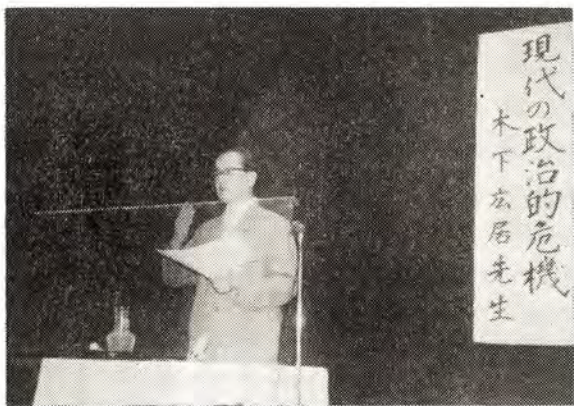
なお(白)のつづき合いにおいて、そういう哲学史、もしくは歴史の教科書をつくることは、誰に、どれだけ金の銭的、時間的便宜を与えたら可能になるだろうかという立入った議論さえなされたことは――そこから格別具体案が生れたわけではないが――特記に値することであろう。

## 講師略歴

東大法学部独法科を卒業。横浜正金銀行に入り上海、ハンブルグ、ロンドン等において勤務、戦後大蔵省に移って終戦連絡部長の要職にあつた。昭和二十四年「外国為替管理委員会」創設にあたり、その委員長となる。現在世界経済調査会理事長。著書に「総合経済政策の提案」(日本経済復興協会)「国の個性」(文芸春秋社)「世界の見方」(論争社)などがあり、現在月刊「経済論壇」に「国策を考える」を連載中。なおグループ研究により世界経済調査会の名によって出版されているものには「後進国開発の研究」等多数のものがある。

現代の政治的危機

木下  
広居



- 一、現代国際政治の実態
- 二、恵まれた国——日本
- 三、悲しむべき政治の頹廢
- 四、イギリス政治に学ぶ

△質問に答えて▽

イギリス労働党と日本の社会党………政党の派閥………議會制度改革の道………議會と  
国民の遊離………民族統一のために

## 一、現代国際政治の実態

現在の日本の政治的な危機は、これを一言で申しますならば、国民の分裂ということであろうかと思えます。ある人はソ連に、ある人は中共に、ある人はアメリカにというふうに国民の志向するところがばらばらになってしまっている。そこに現在の危機的な様相の特徴があるかと思われます。しかし国民生活が発達するためには、いうまでもなく国民の分裂はどうしても避けなければならぬ。われわれが南ベトナムとか、或は朝鮮、ドイツというようなあのような悲惨な運命におち入らないためには、是非とも国民の統一がなければなりません。そのためにはまず第一に国際政治が一体どう動いているのか、そのありのままの姿を、日本人としての立場から明確に判断していかなければならないと思えます。その点従来日本で一般に行われておりました国際政治、特にソ連やアメリカに対する考え方には相当ゆがめられたところがあったと思えます。

簡単に申しますと二、三年前までは、一九六三年のミサイル・ギャップという言葉がはやっていました。つまり今の調子でいくと一九六三年頃には大体ソ連の軍事力がアメリカの五倍になるという判断であります。例の安保騒動も実はこういう予想が裏にあつて、うっかりアメリカと手を結んでいれば将来ソ連からひどい目にあわせられるのではないかという不安

からあのような大きな争乱になつたのだと思います。すなわち今のうちにアメリカのバスからソ連のバスに乗り換えておこうとする卑屈さと、判断の誤りがあつたわけです。

勿論このような判断は誤りでした。では何故こんなことになつたのか、それはソ連が自分達の科学者の数はアメリカよりも多い。そしてもつと高級で、進歩していると盛んに宣伝を行つていた。ところがこのようなソ連からの宣伝をアメリカが利用して、例えばロケットとかミサイルとか潜水艦その他軍事産業に関係している人達は政府からなるべく沢山の予算をとるために、「アメリカはソ連に負けつつある。このままでは駄目だ。」ということを盛んに各方面に吹き込んだわけです。ところがアメリカで、そういう宣伝をする人は事実を知つてこれを利用してはすぎないけれども、日本のジャーナリズムはそのような内幕は全く知らなのまま、ソ連の優勢ということを鵜呑みにしてしまつたのです。しかしソ連で一年間に育てられている科学者の数がアメリカの三倍だとか五倍だとかいうような統計が如何にあてにならないものか、それは統計というものの実態を理解しておられる方にはすぐおわかりいただけると思います。例えばその統計の基礎になる「科学者」というものの定義からしてすでにソ連とアメリカは違う。ソ連では工業高等学校を卒業した者はみな科学者に算えている。アメリカでは勿論大学の修士コースとか、ドクターコースを出なければ科学者とは認めておりません。これでは統計がくい違つてくるのは当然です。又これはよく言われておりますが、



ソ連においては産業のバランスが全然とれていない。宇宙ロケットの研究には国家が総力をあげて援助しているけれども、農業の方などはひどく遅れてしまっている。トラクターはあつてもこれを運転する能力のある人間が少ないし、これをこわしても修繕する能力も低い。これでは農業が進歩する筈はありません。端的に言えばソ連の産業構造はオベリスクのように、高いけれども、底辺が狭い。これに対してアメリカでは上の方も高いし底辺が広いピラミッドの形をなしているという事になろうかと思ひます。

その点日本の科学は、その高さはソ連やアメリカ程ではないけれども、底辺の広さは世界に誇つていいと思ひます。これは昔の話になりますが、日露戦争の時、バルチック艦隊は北から喜望峯をまわり、南洋を廻つて来た。その間にロシヤの軍艦の底におびただしい「かき」がついたそうです。そのために速力がずつと落ちてしまった。そればかりでもないでしょうが、速力が非常に落ちていた事が一つの重大な原因となつて日本海々戦において敗れてしまった。こんなことを考えてみますと、科学技術というものはどうしても非常に総合的な性格が要求される。あらゆる所に目を配つて、隅々まで行きとどいた技術を駆使しなければ科学は生きたものになれないのだと思ひます。最近インドネシアがソ連から二隻の巡洋艦をもつた。まあもつたと思つていたのですが、今年になつてソ連からお金を払つてくれと請求してまいりました。ところがインドネシアではあわてて、金を払うのなら軍艦は要らない

と返事をしたのです。なぜならインドネシアでは折角軍艦を買ってもこれを運転する技術がわからない。それに先ほどのバルチック艦隊と同じく今の軍艦にも「かき」が一杯ついてしまつて身動きがとれない。すなわちソ連は北国ですから、南洋で「かき」を殺せるペンキの研究が出来ていないのです。こんなわけでインドネシアはそのうちの一隻分だけを今、月賦で払っておりますが、こんなことを見ていけば、科学技術というものは皆平均して発展しなければならぬということがお分りのことと思ひます。

ここでアメリカとソ連の軍事力の比較について、もう少し具体的に述べておきたいと思ひます。結論的に申しますと軍事力においてはアメリカが遙かに優れている。大陸間弾道弾においては、アメリカの方がずっと射程が長い。更にアメリカのポラリス潜水艦が十六隻北極海にありますが、その一隻の性能は第二次大戦中にアメリカが使つておりました航空母艦六十隻分の破壊力をもつております。しかもポラリス潜水艦は従來の潜水艦と違つて上からみても全然わからない。その上、海上に顔を出すのは二ヶ月に一回ですむのです。それがソ連のすぐ近くで水に潜り、水爆のついたミサイルをいつでもソ連の国内に射ちこめるといふ態勢をととのえている。これにはソ連の方でもずいぶん困つてゐるのです。

しかしここで考えなければいけないことはアメリカが発射すれば、必ず何分かの後には同じようなものがアメリカに向かつて飛んで行くということです。ともかくアメリカ、ソ連の

両方の核兵器を合わせると地球上のあらゆるものを二十回破壊する力がある。もしもその両方が核兵器を射ち合うようなことにでもなれば、三十分間には三億人が完全に死滅するのである。これではアメリカがいかに優れた軍事力をもつていても戦争が行われるという事はない。その上お互いに情報がつつぬけなのです。何故ならU・2機というのが以前に問題になりましたが、あの飛行機など五百軒以上の高空を飛び、しかもその高空でとった写真は地上一米以上のものは全部正確にうつすことが出来るといわれています。これではもうお互いに全く秘密の兵器とか秘密の基地などをもつ事は出来ません。

ただソ連の人間衛星については色々な誤解があるようですから一寸述べておきますと、たしかに現在ソ連がこの点でアメリカをリードしていることは事実です。しかしそれは丁度二時間以上かかるマラソンの競走で、最初の一分間ソ連が一寸さきに行っているというだけの話なのです。先程も申しましたように科学技術の総合力がその競走を最後に決めてゆく筈です。従つて問題は現在ソ連がアメリカに局部的にどの程度勝っているかということではなく、それが将来どの程度まで広い底辺を持ち得るようになるか否か、問題は全くそこに帰着するのであると思います。ただ現在アメリカが年間五十三億ドルという巨大な費用を投じて宇宙ロケットの研究に拍車をかけているのは、単にソ連と競走するためではなく、また他の星に行つて何か宝をもちかえることではない。そうではなく、月或は金星にロケットを軟着

させるためには非常に困難な技術が必要で、その困難を克服するというところに重大な意味がある。それが将来人間がもつと幸福になるように、生産活動に利用されていくならば、そこに輝かしい経済革命がおこる筈です。さらに月や金星に行つて、ただ一点の星のように地球をながめた時、必ずや世界觀の革命がおこる。あんな小さなところで蝸牛角上の争いを続けていることが本当に愚かなことだと分る筈です。そういう未来図に向つてアメリカは前進しているのです。こういう考えがすでに世界では現実化しつつある。これからの日本の政治を考える際にこの事は忘れてはならないと思ひます。

## 一、恵まれた国——日本

私は最近ロンドンに七ヶ月程滞在しておりましたが、その間非常に感じました事は、日本文化の優秀性ということであり、日本はすばらしい風景に恵まれ、その中で育てられた豊かな芸術的感覚を持つてゐる。しかもその層が実に厚いのです。西欧では詩をつくるのは詩人という専門家に限られていて一般の人々との間には非常なギャップがある。ところが日本では、皆さんがこの合宿で全員和歌をつくられるように、誰でもが、詩をつくる才能と機会に恵まれている。これは実に大したことだと思ひます。しかも日本人はこのような芸術的感覚だけではなくすばらしい科学的才能にも恵まれている。スコットランドの北の方にクラ

イドという地方がありますが、そこには造船業がかたまっている。ところがこの造船業には最近全然注文がこないで、失業者が激増しています。その理由は日本の造船業にとられてしまったからなのです。明治以後日本は東洋のイギリスにならなければいけないというので奮発した。ところがうっかりしているうちに日本の方がえらくなつてしまった。今や「我々はヨーロッパの日本にならなければならない」という言葉さえ新聞の投書に見られる程です。又、イギリスの鉄工業の中心地であるシェフィールド、ここに日本研究所というのができました。諸君がおじいさんや、おばあさんなどのところに行かれると、明治時代にイギリスから輸入したナイフやフォークを見られることがあると思いますが、その柄には必ずシェフィールドと書いてある。そのような鉄工業の中心地に日本を研究するインスティテュートが出来て日本を学ぼうとしていることなども注目すべきことであると思います。

そのような色々の優れた長所を日本人はもっておりませんが、その中で最も私が痛感いたしました事は、日本が国民的な統一に必要な根本条件という点において実に恵まれているという事です。例えば言語についていきましたと、どの国でも言葉で非常に苦労しておりません。印度などでは八百五十ばかりの言葉がある。そのためお互いにちつとも話が出来ない。インドの一九四八年にできた憲法によると十四の言葉が列挙してありまして、これらの言葉は当分の間部分的に通用する事を認めるが、十五年後にはヒンズー語に統一すると記してあ

ります。ところがその十五年がたつてしまった。しかし事態は昔のままヒンズー語に統一するということは結局不可能です。現在は議会の演説もみんな英語を使っておりますが、十五年の期限が来たからヒンズー語を勉強しなければいけないというので、議員をみんな集めて講習会をやっておりますけれども、なかなか覚えたがらないのだそうです。しかもヒンズー語に対して有力な言葉にベンゴール語というのがある。ヒンズー語はビジネスの方に使う。しかし文学とか芸術などにはベンゴール語が使われており、タゴールなどが印度の伝統的な詩を書きましてノーベル賞を授与された時に使った言葉は矢張りベンゴール語なのです。このように文学的な言葉と事務的な言葉は全然はなればなれになっている。これは実に大変なことです。日本では到底考えられないことですが、その点日本の国の有難さということをもつと真剣に考えるべきではないでしょうか。

さらに申すまでもなく日本は人種的に完全に融合統一されていて人種的な摩擦もありません。ところが多くの国は決してそのような幸福な状態ではない。イギリスにスコットランドとウェールズがあることは諸君は皆御存じでしょう。ところが学校では英語しか教えないので、夜学に通ってスコットランド語やウェールズ語を習っている。さらにテレビジョンの番組でも一週間に一回は、一時間とか三十分の番組をスコットランド人に、更に一回はウェールズ人に放送しているほどなのです。

ベルギーなどでもオランダ語系統のフラマン語とフランス語を話す人の数が殆んど同じなのです。前はフラマン語を使う人の方が少なかったのですが、次第にそちらの方が多くなつて、学校教育ではそのどちらを使うかという事が大きな問題になっております。このような問題は共産圏にもありますし、ユーゴなどでは四つの宗教と六つの言葉があると云われています。それらにくらべて日本では北海道の果てから沖縄まで全部日本語で統一され、同じ教科書を使えるのです。

それからもう一つ申し上げたいのは、従来日本という国は土地が狭い。それに人口が多すぎる。これでは生活がますます苦しくなるといふように考えられていました。その為、満州に発展しなければならぬ、アメリカに移民しなければだめだといふように言われて来たのですが、それが非常な誤りだといふことです。アメリカに行きますと、ソ連でもそうでしょうが、実は土地が広すぎて困つて居るのです。アメリカの農村は都会から非常に離れております。そしてその途中に沢山の空地がある。だから農村で人口があまり、時間が余つても町の工場に働きに行く事ができない。農村は農村だけでまかなわなければいけない。そのため非常に収入が少なくて皆困つて居ます。しかも科学の発達につれて農業生産の能率が非常に上つて居るので狭い土地からどんどん農産物ができる。しかしその生産物は国内で消費出来な

い。価格は下る。政府はこれを保護しなければならぬ。というように悪循環がくりかえされていくのが実状です。そういうわけで非常に土地の広いことがかえって無駄となり損害になつていく。

ところが日本では幸なことに非常に国が狭い。だから農村から都会に行くのは実に簡単です。将来もつと道路が発達しますと、どんな山間僻地でも一時間かそこらで町の工場に行つて働いて帰ってくる事が出来る。農村と都会の格差が非常に小さくなります。従つて農村の過剰人口、或は過剰時間というものを都会の工業で消化する事が出来るわけです。しかもそのことは単に経済的な面だけでなく、人間生活全体に非常にプラスになるのです。農村生活者も昼間ちよつと工場で働いて来る。都会人は労働時間が短くなりますからすぐ田舎に帰つて農村生活を楽しむことが出来る。又都会の人間は次第にバカンスが長くなりますから、それだけ田舎に行つて新鮮な空気を吸う機会に恵まれる。この都会と田舎の生活の交流変化ということは将来の人間生活にとって非常に有難いことだと思ふのです。いうまでもなく人間は本能的に単調な機械の一部分になりたくないという気持がある。その本能に満足を与え、人間性を健康に保つ条件が、日本には揃つていくのです。このことには日本の自然、或は気候が驚くほど多彩で変化に富んでいることもあわせて考へるべきでしょう。こう考へてみると日本の将来は本当に地上の楽園にできるのだとさえ思います。スウェーデンなんか



社会保障制度は世界一発達している。貧富の懸隔は少ない。しかし、その自然も気候も単調です。国土が広いばかりでは不十分です。

### 三、悲しむべき政治の頹廢

これまで私は日本という国が実に恵まれた国であるということをお話いたしました。が、では私たちは日本の将来を手ばなしで樂觀していいかということになると首をかしげざるを得ない。というより非常な危機を感じるのです。それは何故かと申しますと日本国民の、特に政治家の道義的精神がひどく頹廢しているからであります。元来日本人は道義的な国民であつた。幕末の頃、日本に参りましたヨーロッパ人は日本に上陸して非常に驚いた。こういう文明国が東洋の果てにあるとは思わなかつた。東南アジアをずっとまわつてきたけれどもこれほど秩序だつた礼儀正しい、恥を知る国民がいろいろとは思わなかつた、といつて驚嘆したのであります。ところが今日の日本はどうか。このことは皆さんに真剣に考えていただかなければならないところだと思ひます。

私は先頃ローマのホテルで台湾の大学の経済学部長という人に会つて一晩話し合いました。この人は台湾で現在物凄く賄賂が横行していることを嘆いて、結局日本の明治維新の精神で徹底的な改革を断行しなければ台湾はどうにもならないのだと申しました。その時私は

ふと次のような話を思い浮べました。明治の初め頃東京で賄賂をとった役人があるというところが新聞に書かれたことがある。ところがその役人が鹿児島出身だったので、参議だった西郷隆盛が非常に怒った。しかし実際には賄賂をとったというのは単なる噂にすぎなかったのです。しかし西郷さんはそんな噂が立つというだけでけしからん。切腹をして詫びるべきだと主張する。そこで当時の東京府知事の由利公正が間に入って免職ということだけでけりをつけたということです。それほど明治維新の精神はきびしかったのです。その台湾の教授は日本を信じてくれている。しかし日本の現状は実にひどい。選挙を一つ例にとってみましても、政界の腐敗ということはみんなが批評する元気がなくなるほどひどいものです。ほとんどが金だけで動いている。今日問題になっている派閥なども金を集めることの一番上手な人のまわりに多勢が集まっているにすぎないのです。こうして現在では人々は政治家といえれば冷たい目で見られるようになってしまった。指導者階級は国民の信頼を失い、さらには軽蔑をさえ買っている始末です。これは実に危険な状態です。誰か煽動する者があれば必ず何か騒動や暗殺などが起こりかねない。

ところが私がイギリスに参りましてよく見ておきますと、イギリスで職業的に一番信用があるのは他ならぬ政治家であります。この春マクミラン首相がオックスフォード大学の総長に選ばれましたが、これはイギリスでは当然のことなのです。あらゆる名誉職は上下両院の

議員が占めているように見えます。書物などでも著者の後にMPと書いてあれば權威があると考えられております。MPというのはメンバー・オブ・パースナメント、すなわち国会議員ということですから。議員の書いたものなら、学問的にも實際的にも信用があるとされているのです。こんなことは日本では全く考えられない。イギリスだけでなくイタリアなどにおいても政治のあり方は羨ましいものがあります。

イタリアの保守党は百六十五万の黨員を組織しております。そしてイタリアの保守党の政治資金は一切その黨員から献金する零細な党費でまかなわれております。財界、財閥からは一銭の寄付も仰いでいないのです。その点はイギリスも同じです。もつともイタリアにはヨーロッパ最大の共産党があり、その黨員は百七十万を擁している。だからこれに対抗するために、保守党自身が百六十五万の黨員を共産党と同じ細胞組織にせざるを得ないということもございしますが、とにかく大したことです。その上保守党は立派なポポロというイタリア最大の日刊紙を機関紙としてもっております。その上イタリアの議員は学問がないと馬鹿にされる。現在の大統領のセンニ、この人は以前首相でしたが、その前にはローマ大学の教授でした。前の首相のファンファニ、今の首相のレオーネ、いずれもローマ大学の教授でした。大学教授に限りませんが、議員は皆学問がある。しかも大臣の議会における答弁、これは実に良心的です。日本の大臣みたいに逃げ口上だったり、相手が三十分質問したのにこちらは

三十秒で胡魔化したりはしない。大臣の答弁を編さんすれば、それが立派な学術的な著書になるといわれています。ムッソリーニ没落後のイタリアはそれ程に生まれ変わっておりません。

又イタリアでは民衆と政治家が同じ生活をしている。センニ大統領は首相時代に戦後の再建のために、まず工場と、働らく民衆のためのアパートを建設するということを国策として発表し、国民に約束した。そして自分自身、そのアパートに入っておりましたし、大統領として当選した時もそのアパートから民衆の歓呼に答えていました。

ここで西欧における国民の精神のあり方を示すものとして戦没者の慰霊について少し御話ししておきたいと思えます。

一九一八年十一月十一日、第一次欧州大戦は終わった。その十一月十一日の午前十一時を期してイギリスでは毎年全国で戦没した戦争犠牲者の慰霊祭が行われております。その日にありますと議会の時計塔（ビッグ・ベン）が十一時をうつのを合図に、そこから少しはなれたホワイト・ホールの往來の真中にある花崗岩の大きな白い塔——セノタフ（遺体のない墓ということ）という慰霊塔において慰霊祭が行われます。エリザベス女王をはじめ総理大臣と野党の首領が肩をならべて参列する。陸海軍の軍楽隊、学校の鼓笛隊などが送葬曲を演奏する。集る民衆は十万から二十万と言われています。さらにロンドンばかりではなくどんな田舎に参りましても、村や町の中心には慰霊塔があつて、同じ時間に黙禱をささげるのです。

その慰霊塔にはザ・グロリアス・デッド（名譽の戦没者）などという字が刻まれており、或る老人に聞きましたところ自分達が判断を誤つたために、戦争防止の努力が足りなかつたために、若い人を沢山死なしてしまつた。実に申し訳ないということを謝まる儀式だと申し出ておりました。その時にはポビーと申します真赤なけしの花の造花を胸にさすのですが、それは傷痍軍人が内職で作つたもので、それを皆が買うのだそうです。こうして十一時から二分間全国の交通が遮断されます。自動車も、急行列車も止る。歩く人も立ちどまる。もう全然音というものがなくなつてしまふ、こういう嚴肅な空気の中で慰霊祭が行われるのです。

アメリカにおいても同じく、ワシントンにあるアーリントンの無名戦死の墓地を中心に、あらゆる町や村にそういう慰霊塔が立つております。

さらにつけ加えますと、イギリスの大学や高校に参りますと、その学生や生徒が一番多く通る所には必ず金文字で戦死した人の名を彫つたものがはめこんであります。又、大英博物館、これは博物館であると同時に大図書館でもあります、その正面の玄関の右手に、図書館員として若くしてここから出征し、そして戦死した人々の名前が大理石に彫つてあります。その傍には「私達は朝に夕に君たちを想ひ起こす。私達は年々齢を重ねて行くけれども、君たちは永久に若いのだ」というような詩が刻まれている。非常に感銘深いものであります。戦没者の慰霊について国民の心が一つになつています。私はここにイギリスの底力と

いうようなものをしみじみと見せつけられたような気がいたしました。

#### 四、イギリスの政治に学ぶ

以上述べて参りました通り欧州の一流国においては政治生活、あるいはこれを支える国民の精神生活は実に緊張している。日本とは雲泥の相違であります。さらに現在においては何と申しましても選挙のあり方が政治を決定づけている。選挙がよくならなければ政治は決してよくはならないのです。そういう点からイギリスの選挙の実態について少しお話し上げましよう。

私がイギリスにおりました時、五つの議席があいたために五つの選挙区で補欠選挙が行われたわけです。イギリスは小選挙区制ですから一つの選挙区から一名選ばれる。ところがその時選挙が行われた地区はすべて保守党の地盤なので、それに労働党がどれ程食い込むかということが興味の焦点になっておりました。新聞も非常に詳しく書き立てる。それで私はロンドンから列車で三時間ばかりのチペナムという選挙区に出かけました。

余談ですがこのチペナムという所は一七四二年まで二十年間首相だった有名なロバート・ウォルポールが最後に政界を去る原因となつた選挙区です。その当時は当選が有効か無効かを議会で議決していた。ところがウォルポールの味方はその選挙訴訟において一票の差で敗

れたのです。当時彼は総理大臣の地位にあつたのですが、一票の差であつても破れた以上自分はその地位にあるべきではないと言つて総理大臣を辞職しております。これで議員内閣制度がイギリスで確立されたといわれております。

そのチペナムに参りましたところ、日本の選挙風景とは全然違ふ。第一ピラヤポスターが殆んどない。いわんや連呼行為などは全く行われていません。何故ならイギリスは党本位の選挙で立候補者も二人か、せいぜい自由党が立つて三人ですから、名前など宣伝する必要はありません。お願ひしますなどという必要は全くないのです。あまりひっそり閑としているので、下車する駅を間違えたのではないかと思つた位です。さてその日の夜六時から選挙演説があると聞いて行つてみました。これが又日本とは全然違ふ。候補者は自分の宣伝をするのではなく、党の政策をこまごまと説明する。その演説が四〇分位、そのあとで質問が行われますがこれが一時半位、質問の方が長いことも大きな特徴です。しかも質問は実に程度が高い。妨害や野次もなく、それに対してどう答えるかによつて候補者の値打ちが決まるわけです。質問は男と女が半々ぐらい。実になめらかに行われていました。そして最後に会が終つて出ようとしたところちよつと待つてくれというわけです。献金しない人は出られないようになっている。まさに日本とは反対です。どんな会合をやつても、必らず会費を取る建て前です。日本ならあとで御馳走するから有志の方は残つて下さいなどというところでし

よう。

こういう有様ですから買収や供応などということは全く行われていない。しかしイギリスも百年前は現在の日本よりも、もつとひどい買収選挙が行われておりました。こういう話があります。アイルランドのキャッセルという選挙区で、ほかの選挙区と同じように、みんなが自分の票を高く売ろうとして苦心している。一番お金を出してくれる候補者に票を売ろうというのです。ある候補者が、公明選挙で出たい、これではいけないというのでお坊さんに頼みました。月曜日にお坊さんは選挙粛正の説教をして、票を売るような人がおればその人は必ず地獄に落ちると言っかけてきかせたところ、選挙民曰く「これは困った。今迄は三万円を票を売っていたけれど地獄に落ちるかもしれないなどと言はれたのでは、到底三万円では売れない。五万円に値上げします。」まあそんな調子だった。

ところが一八六五年、ロンドンの真中の、シティ・オブ・ウェストミンスターで、皆様ご存じの有名な経済学者ジョン・スチュアート・ミルが完全な理想選挙を行いました。すなわち、ミルは自分は議員になろうとは思わない、それより学者として社会に奉仕したい、しかし無理にすすめられて止むを得ず立候補するのだと述べたあと、選挙運動はしない、また一銭も使わない、万一当選しても選挙区の世話は一切やらない、それから諸君が一番嫌っておられる婦人参政権法案を提出するというようなことを言った。皆は驚いて神様でもそんな条



件では通るはずがないと思つていたところ見事当選してしまつた。次の一八六八年（明治元年）の総選挙には落選しました。選挙民が昔からの習慣に負けてしまつたからです。一八七四年の総選挙で自由党が負けた時、グラッドストーンは「ピールとジンの大洪水に押し流された」と保守党の買収、供応を非難しました。一八八〇年の総選挙はイギリスでは空前絶後の腐敗選挙でした。この時はど多額の選挙費用が使われたことはない。これに驚いて「こういう選挙で当選したのでは、かえつて恥だ」ということを議員がいい出した。ジャーナリズムが公明選挙を後援した。それで、全国で、最も腐敗した選挙区を八つ選んで、ここに調査会を設けた。証人（あるところでは三千人）を呼んで何万の質問をやり、それを記録し印刷し公表した。これに基づいて改正案を作り、与党（自由党）野党幹部が協力して一八八三年（明治十六年）にこれを通しました。供応買収を少しでもやれば当選は無効、法定選挙費用を一銭でも超過すれば当選無効、というきびしい法律が議會を通過したのです。

それから三十年ばかりたった一九一八年（大正七年）第一次大戦が終りました時、男子普通選挙が行われるようになりました。（女子の普通選挙が認められたのは一九二九年）そのため選挙法改正が行われるので議會で議論がたかかわされたのですが、その時はもう買収供応などという文字は全然記録に出てこない。すなわちすでにその頃は買収などということの实体はなくなつてしまつていたのです。それから現在まで五〇年、買収供応の痕跡はもう完全

になくなつております。しかしこれはイギリスだけではありません。フランス、ドイツ、アメリカ、イタリーという風に何十年かおくれながらも、現在清潔な選挙をしております。

現在の日本の選挙の腐敗ぶりはもうここでお話するまでもなく実に根が深いと思ひますが、ここで注意しなければならぬことは、だからといつて日本の国民性は選挙などというものには合わないのだ。議会制度は国民性に反するのだ。だからこのような制度はこわしてしまわなければいけないというような性急な結論を出してはいけないということです。諸外国の歴史を見ていけばどの国でもそういう腐敗との苦闘をくぐりぬけて来ている。日本だけが清潔な選挙ができないということはないと思ひます。

問題は選挙ばかりでなく、議会の運営においても、日本は大いに反省する必要があります。ここでもイギリスの例を申し上げたいと思ひますが、イギリスにおいては絶対的な信頼をうけた中立な議長を中心に、与党と野党は全く平等の立場で議事をすすめていきます。しかも議会というものは批評機関である以上、野党の方が与党よりも大事なのです。だから野党にたくさん演説をさせている。特に野党の中でも反主流派、特に自由党が一番発言の機会が多い。日本とは全く逆です。

イギリス共産党が一人出たことがある。その時共産党はひどい目に会いました。それは皆からボイコットされたのではない。そうではなく逆に、全国四万の共産黨員を代表しており

ますので、あらゆる問題について演説する義務を感じていました。立てば必ず指名される。それでとうとうへとへとになってしまった。それがイギリスの議会のあり方なのです。日本では野党、殊に少数野党に発言の機会を与えないものだから、その不平が鬱積して、外部の騒動に過剰なエネルギーを発散することになるのです。日本人はもつと意見の違った人と暴力を使わないで話し合う練習をしなければならぬ。大事なことはすべての人と話し合つて決めていかなければならない。誰でも完全無缺な考えをもっているわけではない。「三人よれば文殊の智恵」でありまして、三人がそれぞれもっていない、より高度の、より包括的な、より間違いの少ない智恵を、つまり第四の智恵として発見していく、育てあげていくという事を真剣に考えていかなければならないと思ひます。そのことが一番最初に申し上げました、国民の間の分裂をさける、そして統一を促進する唯一の方法であると思ひます。

どうも雑駁なお話しですみませんでした、のち程ご質問の時間に申し上げ足りなかつた点について補足させていただきますと思ひます。

## 《質問に答えて》

### イギリスの労働党と日本の社会党

(問) イギリスの労働党と日本の社会党は、一般には同じもののように考えられています  
が、その間の関係、あるいは相違についてご説明いただきたいと思ひます。

(答) これは実に大變な違いです。第一に日本の社会党は民社党が分裂しましたあとは、マルクス主義を信奉している人たちが多く残っている。イギリスでは始めからマルクス主義とは関係のない人達が集まっています。イギリス労働党ができましたのは、丁度一九〇〇年、党の組織ができましたのが一九〇六年です。ところがこれを作った人は炭坑労働者出身のケア・ハーディという人ですが、この人は「我々の社会主義というものは、マルクスの言う経済法則から来たものではなく、倫理的な原則から出て来ている。すなわち皆同胞であるべき人間でありながら、少数の人がいいことをして多数の人が貧困に苦しんでいる。そういう経済制度の誤りを改めるのが、われわれの倫理的要求である。われわれはそこから出発するのだ」と申しております。又今度日本は参りました前の労働党出身の総理大臣のアトリー、彼は三十三年間下院議員をしてその間二十年労働党の首領をやっておりますが、彼が一貫

して主張していることはイギリス労働党はマルクスの資本論によってではなく、キリスト教の聖書によって社会を改めるのだ。全ての人に人間らしい生活をさせ教育を与える、貧富の懸隔をなくすことがわれわれの目標であるということです。労働階級の政党でなく国民政党であるといっています。日本の社会党とはその基本的な立場において全く違うのです。

なおイギリスの労働党は保守党と外交、軍事等の政策については意見が相当違いますが、大事なところは一致している。お互いに譲り合つて、両党の合作でつくられている。そのような点も日本の社会党とは根本的にちがうところです。

日本の社会党はイギリスの労働党を学ばなければいけないということをいつも言っておりますが、それは口先だけで実は学ぶつもりは全くないのです。所詮社会党に、労働党のような健全な社会民主主義の政党を期待することは今のところ不可能だと私は思います。

### 政党の派閥

（問）日本における政党の最もいけないところは、政党の内部に派閥が存在することだと思いますが、外国の政党にもやはり派閥というようなものがあるのでしょうか。

（答）これはありません。もつともイギリスの保守党にも労働党にも左とか右とか色々ありますが、これはものの考え方の相違であつて、日本のように政策やイデオロギーぬきに、親分

子分の関係、金づるの関係でかたまっているというようなことは全くありません。大体政党における派閥とか実力者というようなことを、正確に外国人に伝えようとすれば何と翻訳していいか困ってしまいます。実力者というけれど実はただ金を集める能力があるというだけなのです。諸君は将来その実体に目を光らせて価値がなければ全部ふみつぶしてしまうというはつきりした考えをもってもらいたい。そういう人がふえてくれば、そんなものは生きながらえることが出来ないようになるでしょう。

そのために一番必要なことは何と申しても政党の近代化です。先程も申し上げましたが、イギリスでもイタリアでも全く黨員の出す党費で運営しております。イギリスでは保守党が三五〇万、労働党が六五〇万の黨員を擁しております。そこに彼らの近代政党としての強味があるわけです。しかし日本では保守党も社会党も黨員は四万人位しかいません。しかもその黨員には幽霊が多い。結局台所はすべて財閥からの献金でまかなうわけです。従って多く金を集める力のある者が実力者となり派閥をつくるということになるのです。

### 議会制度改革の道

(問) 日本の議会をあらためていくために、制度上の問題としてどのようなことが考えられるでしょうか。

(答) むづかしい問題ですが、何と言っても議長の権威を確立するということが先決だと思っています。イギリスでは公平無私の議長をたてて、それに服従するというシステムが立派に出来上っています。ところがドイツではうまく行かないから副議長を四人もつけて全部野党から出してあります。フランスには六人も副議長がいて、野党が議会運営に責任をもつようにしております。

またどの国でも委員会では委員長が与党ならば、副委員長は野党から出るといふように組み合わせるとか、殊に決算委員会、これは一番むづかしい問題なので必ず野党から委員長が出るとか、非常によく運営されております。

更に先程申し上げましたように小党派であろうとなかろうと全員平等に発言の機会を与えて野党を尊重するということが真剣に考えられなければならないと思います。しかしどんなに制度をかえても結局は議員がルールに従って皆同じ土俵の上に立って本気になって、個人よりも党、党よりも日本の将来を考えて議論する、それを国民が監視し、まちがっていれば抗議するということにならなければ救い様はないと思います。

現在は与党も野党もそれぞれ絶対主義に立って完全な平行状態を保っている。元来議会政治というものは暴力否定の思想の上に立っている筈ですが、このままでは暴力の温床になるばかりです。われわれは目的のために手段を選ばずという考えを否定して、目的よりむしろ

手段が大切だという思想を議會の中で、また国民のうちに育てていかなければならないと思  
います。

議會というものはパルレから来ている。即ち喋るといふことです。議會はしゃべるところ、  
パルマンでなければいけない。演説をしない議員とはナンセンスです。だから日本の議會  
制度を育てるためには、もつともつと演説をしなければいけないし、又選挙民の方でも、演  
説をしない議員はどしどし落すことにすればいい。そういう運営のあり方が正しく確立すれ  
ば議會はずつとよくなつていくと思ひます。現に例の安保条約のときも随分暴力は行われた  
けれども、真剣な討議は殆んど行われていない。一口で申しますと議會の内部においては言  
論が非常に不自由であるといえましょう。ここに日本の議會の最大の欠点があると思ひま  
す。もつとも、これは国会だけではなく、日本人全部が、一般に違った考えをもつていて人  
と議論することにひどくおつくうであり、非常に下手である。感情的になつたり、すぐ腕ず  
くのけんかになつてしまふ。そういう国民性の反映なので、議員だけが悪いのではないので  
すが。

### 議會と国民の遊離

(問) 現在日本では、議會と国民のつながりが非常に稀薄だと思われませんが、その点先生の



御考えをおききしたいと思ひます。

（答）おっしゃる通り、現在の日本においては議會と國民が全く遊離している。そこに大きな欠陥があると思われまゝ。イギリスでは本會議を、毎日午後二時半にひらいて、午後十時半までやつております。はじめの一時間は質問時間です。その間に八十ほどの質問が行われる。各議員は一日に三つだけ質問することが出来ます。そして火曜日と木曜日は總理大臣に對して十ばかり質問をする。一年には何万という質問があるわけです。そしてあらゆる政治問題、行政問題などについて國民の不平不満を訴えるのです。それには責任ある大臣か總理大臣が口答で答弁する。しかも公開の席上ですから、傍聴人も聞いておりますし、翌日の朝刊には詳しく議員と大臣の問答が出ております。日本の場合では到底考えられないことです。先頃日本では「拜啓總理大臣殿」などというのを書いた者がいた。あんなことは文明国のどこに行つてもみられない。あれは中世時代の直訴です。それには對して官房長官が徹夜で返答を書いて雑誌に載せるといふ。そんな馬鹿々々しいことが行われているのが残念ながら日本の国情です。しかも投書した人が作家だったから返答してやつた。もしこれが名もない人なら勿論問題にするはずがありません。ああいう問題なら、年に何万とあるはずです。それをとりあげて答弁しないところにも政治に対する不信の原因があると思ひます。

このように議會の機能が動脈硬化の症状を呈しているので、一年に一度も議會に顔を出さ

ないでも毎回当選する大物代議士がいたり、すべてを暴力で解決しようとする代議士が現われたりするので。しかし議会の役割は国民の不平不満が、あますところなく吸収され、反映され、それが議会のはたらきを安全弁として正しく表現されてゆくところにあるはずです。すなわち大きな暴動や、暴力的なデモを避けるためには、避雷針のように国民の要求を少しづつ地面にすい込ませていくような議会の働らきが必要なのです。この機能が停止したとき国民の不満がどういう形で爆発するか、実におそろるべきことだと思います。

### 民族統一のために

(問) 先生が最初にお話しいただいた日本の長所、それと後で指摘された政治の腐敗、それぞれについてはよくわかりましたが、その両者の関連についても少し御説明をおねがいしたいと思います。

(答) 私の申し上げたいことは、日本では国民統合の基盤はすでに出来ている。にも拘らず、政治的、社会的に非常に鋭く分裂し対立している。これはどうかしなければいけないと考えているわけです。日本は歴史的に、人種的に、或は言葉の上でも宗教の上でも、非常にまとまりが出来ていて争いが無い。しかもすばらしい素質を恵まれている。国民が融和統一するためにはまさに理想的な条件が、最も根深く、最も伝統的に無理なく出来上つてい

る。われわれはそれを根拠にして、自信をもって民族発展のために真剣にとりくまなければいけないと思うのです。そのためには政治の現状に見られる腐敗と不寛容さ、不自由さ、時代おくれを一払する必要がある。その参考としてイギリスのお話しを申し上げたのです。しかしその改革の先覚者を現在の政治家、議員に求めることは非常に困難である。勿論改革の見込みは大いにある。しかしそれはひとえに諸君たちのような若い世代の方の双肩にかかっている。私の申し上げたいことはそれにつきると思えます。

### 講師略歴

東大法学部政治学科を卒業、台北帝大、（旧制）松江高校の教授を歴任、後、文部省図書監修官を経て、戦後参議院の法制局調査課長として議会政治の研究を続ぐ。現在尾崎財団理事、評論家協会理事。著書には「フランスの政治」「イギリスの議会」「議会史話双書」など多数がある。「イギリスの議会」は「エッセイスト賞」をうく。



■ 合宿教室における輪読と短歌創作



「聖徳太子の信仰思想と

日本文化創業」の輪読

小田村 寅二郎



はじめに……聖徳太子と著者黒上正一郎先生……この書物にとりくむ姿勢……生活  
体験を通じた現実の把握……声聞・凡夫と菩薩……永久生命―まごころ―の意味する  
もの……凡夫の痛感……上下の人間関係……多数決について……団体生活におけ  
る道徳生活……自他の二境を別たす……勝鬘經義疏と明治天皇御製



合宿第四日目の午後には全員が小田村寅二郎氏の指導によって、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を輪読した。われわれは過去の合宿教室において毎回この書物の輪読を行い、国民思想の混迷を打開する道しるべとしてこれを仰ぎつつ今日に至ったのである。

本書の原本は昭和十年、著者黒上正一郎氏が三十才の若さで世を去られてから六年の後に、第一高等学校昭信会の手によって出版されたものである。昭信会とは著者の念願をうけつぎ、著者と信を同じくする後学の同志のつどいであった。その後戦時中、さらには戦後の国民生活の危機のただなかにおいて、この書物によっていかに数多くの青年、学生たちが不断に祖国の永久生命と、その中に生きる国民の責務にめざめしめられ、勇気を与えられてきたか、それについては後述の本文を参照されたいと思う。

戦後はこの原本は絶版のままになっていたが、昭和三十二年、国民文化研究会によってその中の主要なる箇所を抜萃、A6版一四六頁の書物として再刊され、今日に至っている。

本書の内容は左の通りである

#### 序説

序説付……聖徳太子の体験過程

第一篇……聖徳太子の人生観と政治生活

第二篇……聖徳太子の信仰思想と国民精神

## 聖徳太子憲法拾七条

### 聖徳太子年譜

なお今回の輪読においては第一篇の冒頭の部分をとりあげたが、次にその輪読個所の全文（三二頁から三六頁まで）を記しておきたい。

## 第一編 聖徳太子の人生観と政治生活

聖徳太子は固有民族文化と大陸文化との交流接触の時代に出現させ給ひ、当代大陸の思想學術を博綜し給うたのである。けれども太子に於いてはこれらの思想學術はすべて切実の求道体験に融化して開展せしめられたのである。国家重大の転機に国民生活の運命を荷はせ給ひし御心は、時代の痛苦濁乱じよくらんを齎ただに客観視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ、全体生活の開導教化を念じて求道精進ぐどうしやうじんし給うたのである。維摩義疏に經典に

「若し自らに縛ばく有りて、能く彼の縛を解かんは、是の処こゝ有ること無し。若し自らに縛無くして、能く彼の縛を解かんは、斯に是の処こゝ有り。」（文殊問疾品もんじゆもんじつぽん）とある仏語に對し、深く思想と実行との關聯を論じ給ひ、その最後に次の如く示し給ふ御言葉は、正しく此の御精神みこはを顯すのである。

「何となれば則ち若し天下の道理を論せば、悪やを遣り善を取るは必ず己に始まりて方まさに能く

人を勧む。若し自ら能くせずんば、安んぞ人を進むるを得む。」

太子は摂政の大任をうけさせ給ひてより、当代の氏族制度の積弊せきへいに基く内政ふんらんの紛乱ふんらんに対し、これが不断改革のため苦闘し給うたのである。けれども實際政治の革新は太子に於いてはつねに国民精神生活の内的改革に基かねばならぬことを信知し給うたのである。一代の内治外交が三宝興隆の教化事業と表裏せしめられ、憲法第二条に「篤く三宝を敬へ」と仰せられ、これを「人はなは尤はなはだ悪しきもの鮮すくなし。能く教ふれば之に従ふ。其れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉まがれるを直たださむ」と結び給ひたるは、実にわが国民の靈性を信ぜさせ給ひ、教育教化に依つて国家生活の内的根柢を確立せんとし給ひし御心を顕すのである。けれどもこの内的改革は太子に於ては先づ之を自らの御心に実現せられねばならぬものであった。太子がここに「天下の道理を論ぜば」と宣ふのは、その求道精進たうたうが奮たうたう自らの解脱のためにあらずして、国民の共に帰趨すべき大道の実現にあつたことを示すのである。而も「悪を遣り善を取るは必ず己に始まりて方まさに能く人を勧む。若し自ら能くせずんば、安んぞ人を進むるを得む」との強き御言葉は、実にこの内的改革を先づ自らの御心に具現するに非ざれば、真に国民同胞を救済すること能はじと信知せさせたまひたる、内心の生の戦の深刻なりし事実を偲おもはしむるのである。

この太子の人生観は維摩經義疏いもんきんぎしよに自ら声聞・凡夫・菩薩の内的相違を論じたまふ内容に最も明かに顯示けんじせられて居る。即ち維摩經仏国品に毗耶離園びやえんに於ける仏陀が説法の会座えざを敍し、その同聞衆を挙ぐるに比丘・菩薩・凡夫の順序を逐へるに對して、之が内的意義を論じた

まひ

「二には理に就いて論ぜば、**声聞**は生死を厭ひ涅槃を求む。凡夫は生死を愛し涅槃を畏る。二つながら皆仏の深旨に違き俱に中道を失へり。故に之を前後の二辺に列ぬるなり。菩薩は心益物を存するが故に生死を厭はず、万徳常果を証せんと欲するが故に涅槃を畏れず。凡夫の偏に同じからずして妙に中道を得たり。」

とあるもの即ちこれである。ここに声聞とは即ち小乗教徒を指すのである。人生の痛苦無情を觀じ生死の解脱を願ふ心はこれを否定すべきではない。而も彼らが解脱を一我の天地に願求して他と共なる人生を顧みざる思想は、つひに現実生死の裡の苦悶を厭ひ、理想を現実生活の外に求むるに至るのである。太子はこの個人的超脱の人生觀を排し給ふのである。けれども生死意欲の煩惱罪惡の儘を愛し、発心求道の念慮なき凡夫の生活も亦決して眞実の道ではない。太子は常に大乘菩薩の願行を念じたまふのである。心つねに衆生救済の慈悲を抱くが故に生死動乱の間に処して厭はず、永久生命の信を怠るが故に発心求道の願を相續するもの、これまことに太子の示させ給ひし道であつて、**勝鬘經義疏**に自ら仰せられて、

「大士の懷を立つることは、但自らの為には非ず、必ず先づ物の為にすることを明かすが故に、衆生を安慰せんと言ふ。」(三大願章)

とあるは、更にこの御精神を顕彰するのである。

蒼生と共なる生の故に解脱を自らの為に求め給はず、而も眞実生命の信に基きて國民の教化

救済を先にと念じ給ふこの大きいつくしみの裡にこそ、天下の道理は具現せられ、国民文化の根柢は確立せられたるを仰ぎまつるのである。

けれどもこの教化救済の御精神は、更に全体生活に滲透するところの偉大なる人格の求道苦闘によって表現せられたのである。我が文化創業の大任を荷ひて国民生活を養育せられたる御心は、其の教化的御念願も単なる救済思想によって実現せられたのではない。憲法第十七条の教示は即ち正しくこれを示すものである。

「忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各々執あり。彼是とするとき  
は則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚  
にあらず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鑽の端なき  
が如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひ  
て同じく挙へ。」

これまた憲法第一条の「和を以て貴しと為し、忤ふことなきを宗と為す」の啓示と照応するのである。この教示は当時の有司に対し、忿瞋の絶すべきを教へ、共に完成せざる現実の我なることを自覚して融合親和して公に尽すべきを示すものである。而も太子は此の教示の中に「人皆心あり。心各々執あり」と宣ひ、各自の個性または趣向を異にする人生は、其の思想・見解の相違を来すこと多き事実を照したまひ、ここに「彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす」という矛盾相対が人生に免る能はざるところとなるを示したま

ふのである。されば自ら其の缺陷罪惡を省みずして各々個人我を中心とするときは、融合平和の人生は永久に実現すべからざるを宣ふのである。ここに「我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なることを鑠の端なきが如し」と仰せられ、共に同じく不完全の凡夫たるにめざめ、他の違ひを責めずして自らその至誠を尽すとき、真に団体生活の道徳生活は実現せられるべきことを教へたまふのである。

人生是非の道理は缺陷ある個人我を中心としてのみ定めらるべきではない。この懺悔求道の至誠に基づく団体協力の精神に依つて自ら之を照明せらるべきを宣ふのである。

これ自らにとつては不断の求道協力を志し給ふ自督の至誠心であり、他に向つては内的平等の信を以て融合親和を念じ給ふ寛容の慈悲心である。氏族朋党の個我に迷執し、国家公共を念とするなき多数群臣に対し、この人間内心に徹する求道精神を以て共に全体協力を實現すべき信念を啓蒙せさせ給ふ御心は、内治外交と国民教化との相即を成就したまひし一代事業の依つて来るところの人生観内容と仰ぎまつるのである。

## はじめに

これから読んでまいります「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」という書物は、私ども国民文化研究会の同人たちにとっては、単なるテキストであるばかりでなく、心の拠り所にさえなつてきているもの、いわば深い縁につながっている書物なのです。実は私どもが戦前、旧制の高等学校に通つておりました時、この聖徳太子を研究するサークルにいましたときに、この書物にどれほど痛めつけられ、どれほど苦しめられたか、それはいいようのないほどでありました、辞句もむずかしいし、読めても意味がわからないし、文意が判つても、その内容がつかめない。しかし、なにか深く人の心を打つものを秘めている、真実の人生とは、こういう本から学ぶべきではなからうか、と、そういう思いにさそわれてきた書物でした。それで、私などもそれ以来現在まで、何回この本を読んだかわかりません。私は戦争には召されませんでした、多くの同人たちが戦争に出て行つたときには、彼らは、出征の大切な荷物の中に、必ず明治天皇の御製集などと一緒に、この書物を入れていったものです。もちろんこの本をもつて戦争に出ていった人が、本当にこの書物を読みこなせていたかは非常に疑問です。しかし一行読んでも二行読んでも、あるいは一ページだけ読んでも、その本の中にこもっている精神に、かけがえのない何もかを感じたが故に、その本をもつて戦地

に出ていったのであろうと思います。

しかしその後いろいろの折に読み直していきますと、私どもが年齢を重ねる毎に、その同じ個所からうける感じが年とともに変わってくる。こうして何十回となく読みつづけてきたあとを、今日からふりかえってみますと、この一冊の書物の中には、私どものあらゆる生活経験が、逆ににじみこんでいるような気もいたします。

国民文化研究会というのは一体どんな考えをもっている団体なのか、という質問を、私たちはよく学生諸君からうけますが、私どもは、そのような疑問に対して、世間の人達がよくなさるように、綱領とか宣言文とかを、特別に用意してはいません。そして「そんなことよりもまず歌を作ろうではないか」とか「この書物を皆で読んでみよう」というふうに、皆さんにご返答します。しかしそれは、何も私たちが不親切だからではなく、また怠慢のために私たちの考えを綱領に明示しないためでもありません。私たちのサークルも、もとより一つの団体ですから、団体につきものの趣意書やら規約やらは整っています。しかしそれらは、サークルの概要を示すに止まるものです。概要を理解するということと、その中味を体験的に理解していくということは、必ずしも一致するとは限りません。そこで私たちは、若い方々からの、そのような質問に対しては、はっきりと、私たちの人生への所信を披れさせることによって、ご返事の代わりにいたします。いいかえれば、安易なテーゼによって、思



想の理解が可能であるとする若い方々の思考法そのものに、まずご注意申し上げたいと思うのです。すなわち、そんな手っ取り早いやり方では、絶対に思想というものにとりくむことは出来ない、むしろ、そんな簡便な方法を求めようとする姿勢を、思い切つて切り捨てることから、真の思想生活がはじまる、と私たちは信じているのです。そういうわけで、今こうしてこの合宿で皆さんとともに、この書物を読んでいくことは、私どもの考えや体験内容を、みなさんにお伝えするために、最も確な方法だと思ふからでありまして、このような書物を一緒に苦しみながら読んでいくうちに、国民文化研究会というグループが一体何を考えているのかということも、案外具体的に、皆さんの体験過程の中に融けこんでいくのではなからうかと思ひます。

もつともそれだからといって、この書物が私どもにとってのバイブルである、まず最初この書物を読まなければならぬというわけではありません。一緒に読んでいく書物はこれだけでなくもかまいません。例えば先程からお話が出ている、正岡子規の「歌よみに与ふる書」でもいいし、岡倉天心の「日本の目覚め」「東洋の理想」でもいい。一つのすぐれた書物を本当に読みこなす力、その書物の中に流れている作者の清らかな魂、あるいは純粹な意志を正確にうけとめる力を養い、そこに学問に対する態度をうちたててゆく、それがこの輪読の目的なのです。

## 聖徳太子と著者黒上正一郎先生

ではこの書物にはいつてゆく前に、聖徳太子というお方と、著者の黒上正一郎という方のことについて、さらにその御二人がどのような時代に生きておられたかということについて、簡単にお話しておきたいと思えます。聖徳太子については今さら説明の必要もないと思いますが、太子が生きておられた時代は、日本の文化が、はじめて世界の大きな文化と対決する時期であつたということ、更に国内的には、朝鮮半島の任那（みまな）にあつた「日本府」という日本の出先機関が滅ぼされたり、更には、崇峻天皇が弑逆しいきやくされるという、日本史上で天皇が臣下に殺されるという唯一無二の不祥事件が起きたことにもあらわれているように、内治・外交が混乱をきわめた時代であつたということに注目していただきたい。

日本の長い歴史の中で後にこれとひつ敵するような、もう一つの外国の大きな文化と対決を迫られる運命にあつたのが、いうまでもなく明治時代であつた。しかもその時もまた、国内情勢は、幕末から明治にかけて、まさに分裂寸前の危機にさらされていた。日本は、この後期における文化摂取の重大時機においても、その文化的、政治的な最大の危機を乗り切つて、日本文化の主体性を堅持しながら、西洋文化を吸収するということに一応の成功を収めたわけです。そのときの中心的な指導者が、明治天皇という御人格であつたということは周

知の事実であります。ともかくも日本の歴史がその本質を問われたこの二つの重大な時期において、前には聖徳太子、後には明治天皇という偉大な指導者の御人格を、いずれも日本の皇室の中に仰いでいるということ、これは論議の対象としてではなく、日本歴史における厳然たる事実として注目しなければならないところであると思います。

太子の御生涯については、この書物の最後の年表で御覧のとおりで、これを読んでいただくことよって判っていただけだと思いますので、ここではその説明は省きますが、例えば太子が、当時の支那大陸の大国「隋」の国王に与えられた有名な外交辞令「日出（いず）るところの天子、書を日没するところの天子にいたす、恙（つつが）なきや」という一つをとってみても、この気宇壮大な言葉が、どういう精神態度の中から生れたものなのか、それを見つめていくことが大切だと思えます。それは果たしてカライバリの大言壮語なのか、それとも、微妙な外交交渉の中における、毅然とした信念に裏づけされた所信の表明なのかを判断しなくてはならない。そしてそれが大言壮語ではなくて、国の大小にとらわれずに、対等の気宇で相對しようとした、その驚くほどに深い精神の中から生れていることに気づき、またその政治生活と太子の御精神との内面的なつながりが、いくぶんなりとも判ってくれば、「しめた」ものです。そうしているうちに、徐々に太子の御生涯の片りんが理解されてくるし、そのありのままのお姿の中に、私たちと全く同質の、赤裸々な人間性を確認できる

よくなると思うのです。

こうした経過を辿っていくことを、私たちは、書物を読む姿勢だと考えているのです。本を読みさえすれば読んだことになる、というのとは、およそ違うことに気づいていただきたいのです。

次に黒上先生について申し上げておきます。先生は明治三十三年徳島市に生れ、慈愛深い母上のもとに商業学校を卒業、その後阿波銀行につとめておられます。学歴からいえば、今のほぼ高校三年までの勉強しか受けておられない。しかし少年時代から宗教家としての素質



黒上先生

が芽生え、求道の念やみがたく、銀行をやめて上京、すぐれた先生の門をたたいて独学をもって親鸞、日蓮の経文から聖徳太子の研究へと進まれるのです。そして二十八才の時、昭和三年第一高等学校には昭信会、東京高等師範学校には信和会という研究グループを作って学生を指導し、太子の御精神を若い青年たちに伝えられたのですが、昭和五年三十才で、この著書一つをのこして病のためなくなってしまうのです。三十才といえば吉田松陰先生もやはり三十才でなくなられたのですが、その若さでこれだけのすばらしい業績を残してい

かれたということは、それら先人の偉大さもさることながら、心ある人が心を尽し、ある一つのことに心をこめて生きてゆくならば、十七、八才以上の人であれば、すばらしいことを行いうる素地がすべての人に与えられている、ということを示しているのではないかと思えます。要するに私たち人間にとって、なにが大切な問題かというところ、「どういう意味において自分の志を立てるか、自分の心を定めるか」ということであり、そのあとは、その人の努力にすべてがかかっている、ということができましよう。だから、あなたがたの双肩に国家の運命が托されているということは、決していい加減なことではなく、それをなしうるだけの基本的条件がみなさんには、すべて揃って内在している、ということであり、その内在されているものを各自が自覚するか否か、またそれをはぐくみ育てていく決意を立てるかどうか、すべてが懸っている、ということに他なりません。

さて黒上先生が生きておられた時代について、少し考えてみたいと思います。先生が生れられたのは明治三十三年、丁度日清戦争と日露戦争の間です。先生が五才の時に日露戦争がはじまっております。日本はここで崩壊寸前まで国家の力を使い果して、やっと勝利を得ることが出来たわけですが、一般的な風潮としては、勝った勝ったという上つ調子な気分が支配してくる。そのため明治四十一年には戊申詔書、すなわち国民精神をもつと緊張するようにと天皇が国民に訴えられる勅書が出されております。それから四年足らずで明治天皇はお

かくれになる。ひきつづいて大正時代にはいると、第一次世界大戦によって、日本は濡れ手で粟をつかんだように、大した戦争もしないのに大変なお金が儲かつて、国民は一層上つ調子になっていくわけです。こうして財界では専ら私利私慾に走り、政界もまた私のことばかりを考えて、明治時代のあの緊張した国造りの想いはすっかりチリヂリ、バラバラになってしまいます。その間にロシア革命の影響もあつて共產主義思想が非常な勢いで青年学生の中に浸透して行く。その頃黒上先生は黙々として聖徳太子の研究をつづけておられたのです。このことは、世の中が非常に激しくゆれ動き、変革の思想が巷に満ち満ちていたとき「そうではないのだ。世の中を形の上でどう取りかえてみたところで、もし人々が人の心というものの本然的な姿を正しくとらえ、その上に立つた相互理解の基本線が確認され合わなければ、どんなに社会機構の変革を企てても、それで世の中がよくなる見込みなどたつわけがない」という確信が、先生の心の中に強く育っていたことを示していることに他なりません。もしそのような確信がなければ、すべての青年学生が、時代を救う新しい思想はマルキシズム以外にはないのだと考えて、世の中が滔々とそちらに向つて流れていく、そういう雰囲気の中で、独学で、コツコツとこうした古い学問への探求と求道とを積み重ねていくことなど、到底出来るものではなからうと思ひます。

## 一）の書物にとりくむ姿勢

本文にはいる前に、もう一つこの書物にとりくむ姿勢として、特にみなさんに考えておいていただきたいことがございます。この本の中にはたびたび「仏」という字が出てまいりますが、いうまでもなく仏教には大乘仏教と小乗仏教がある。その二つの大きな流れの中で、小乗仏教というのは自分一個の解脱、救いを求めて仏門にはいつて行く、そういう信仰の方向であります。これに対して大乘仏教では、国民大衆が救われつくすまでは自分は救われないので。みんなが救われたというその時点が自分が救われたという時点であると考えるのです。自分だけが救われる、解脱するということのようなことはあり得ない。従って自分一人の人格が完成するというのももちろんあり得ない。みんなが一しよになつてものごとを理解し、納得し、そしてお互いのためを思うという、そういう精神世界が開かれたときに、自分が救われた時なのだ。このように考えるのがいわゆる大乘仏教の教えでございます。太子はそこでこの二つの流れのうち正しい仏教のあり方は大乘仏教でなければならぬと言われる。しかし更に大切なことは、太子は大乘と小乗との区別を明確にされたけれども、大乘の教えだからそれでいいのだとして安心されなかつた、そこが大切なところであると思ひます。太子の御苦労は、その大乘の教えをどのようににわれわれが把握し、そしてそれを現実の生活の中

に持ちこみ、これを生かそうとするかというそのプロセスの捉え方にあつた。従つて太子は大乗經典の示している言葉をさらに深く御自身の生活経験に合わせて、現実の社会生活の角度に結びつけ、密着させて、解釈し理解して行こうと努められたわけです。黒上先生が太子の思想に注目された、そのポイントは実にここにあつたと思われるのであります。

黒上先生の周囲には、一方に宗教も何も考えない、ガリガリな、自分のことばかりを考えている社会人一般がいる。そして他方には、人間はかくあるべきだとして、或る一つの立場から道徳的に、あるいは宗教的にかくあるべし、かく信ずべしと教えている、いわゆる「立派な人」たちがいる。黒上先生は勿論前者に与みせられる筈はない。しかも他方、かくあるべし、かく信仰すべしとして、人の上に立つて世の中を見渡し、世の中を導いていこうとする人々にも矢張りあきたりなく思われたであろうと思うのです。太子の思想の特質は大乗の教えだからいいのだ、といつて安心して固定したら、それでおしまいだ、それをどう現実化してゆくかに、心をくだいていってこそ、大乗の教えが現在に生きてくるのだ、その体験のプロセスに心を砕いてこそ、真実の人生がとらえられるというところにあるのです。すなわち正しい考え方でも、それがその時点で固定化された概念となつてしまつた時は、人間生活にとつては、逆にマイナスになつてしまう。流転してひとときもとどまることなきものこそ「実人生」であり、その実人生に随順していく柔軟な心こそ、われわれ人間の生活の中に不



断に持続されなければならぬものなのです。このような太子の思想は、必ずや黒上先生のお心のなかに、鮮かに刻みこまれていたはずです。

したがって、黒上先生もまた、仏を篤く信じておられた方であると思いますけれども、太子の御立場そのものとは違つて、この書物にみられる仏は、宗教の問題としてではなく、国民生活をなうひとりびとりの心が指向する人間生命、しかもそれが相続されていく永久生命の本質をとらえて、仏という言葉が使われている、と思われれます。

ゆえに、宗教的情操をたたえた国民生活の姿勢はどうでなければならぬか、ということについて、黒上先生が太子の教えの中に学んでいかれた足跡を、私たちはこの書物に見ることができるとです。そして、そのことは必ずや太子をわれわれ庶民としての国民の身近かにまで近づけてくれるものであると思います。従つて、あなた方も、この書物の中に仏という言葉がしばしば出てきたり、宗教の問題が沢山とりあげられていても、これを、宗教の問題に限定して考えてしまうようなことをなさらずに、一国民一社会人としての生活姿勢のあり方が、そこに深く示されている書物として受け取つていただきたいのです。そしてこの書物を読まれながら、あなたがたの現実の国民生活の体験の場に、その字句や文章や文意を、大胆に、素直に移しながら読んでいただきたいと思うのです。

ではいよいよ本文にはいつていきます。（なお輪読に引用した箇所は、すべて原文通り旧

かなづかいのままにしてありますし、敬語用法なども、いまの若い方々には読みにくいところが少なくないと思いますが、我慢して読みこなしていつてください。」

### 生活体験を通した現実の把握

「聖徳太子は固有民族文化と大陸文化との交流接触の時代に出現させ給ひ、当代大陸の思想学術を博綜し給ふたのである。けれども太子に於てはこれらの思想学術はすべて切実の求道体験に融化して開展せしめられたのである。」(三二頁)

太子の生きておられた時代は、固有民族文化と、支那大陸の文化とが交流接触した時代であつた。しかし太子は、大陸から入つて来る思想や学術を、そのままうけ入れられたのではなく、一体これは人間生活の中においてどういう意味をもっているか、ということ、自身自身の道を求めてゆかれる積極的な姿勢において吟味しながら、すなわち切実な自分自身の体験と照し合わせながら、考えていかれた、生活経験の中に滲しみ込ませて考えていかれたというところが大切なことだと思ひます。

「国家重大の転機に国民生活の運命を荷はせ給ひし御心は、時代の痛苦濁亂を啗に客観視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ、全体生活の開導教化を念じて、求道精進し給ふたのである。」(三二頁)

「時代の痛苦濁乱を音に客観視し給はずして」というところは、実に大事だと思えます。太子の時代は、非常に苦しくて大変な時代だった。ではそれをどうすればよいかという時には例えば、現代の流行思想では「この混乱は資本主義体制の欠陥に由来するのだから、その体制を革新することが解決の道である」という風な把握が一般に行われる。客観的に「この時代はこういうものだ」と捉えていく。しかしこのような態度をとるなら、それははじめから実態を概念化し、理論化してしまっているのですから、それを解決し、打開するためには、それとは違った概念を求めるといふことになる。そうなつていくと現実が概念のために振り回されてしまうという結果になるのは当然でしょう。だから、政治をよくするためには、現実を客観化してみるといふことも大切だけれど、それだけに頼つていては全然解決にはならない。そこで「音に客観視したまはずして」すなわち概括的に、いまの時代はこういう時代なのだから、こういうように制度を改革すればいいという風に求めていこうとしないで、「一体これはどういふことなのだろう、どうしたらよくなるだろう」といふことを、ペーパープランの上ではなく、自分の心の中でじつと考えていかなければならないのです。そこに「自らを省みさせ給ふ」といふことの重大な意義が浮び上るのです。

次に「維摩経義疏ゆいまきょうぎそに」とありますが義疏ぎそというのは「註釈書」ということです。維摩経きよんを註釈された太子の著書を「維摩経義疏」といふのです。次の「経典きょうてん」といふのはその中

に引用された仏典そのものをいうわけです。次の言葉はその仏典の言葉です。

「若し自らに縛<sup>ばく</sup>ありて、能く彼の縛<sup>ばく</sup>を解<sup>と</sup>かんは是の処<sup>ことわり</sup>有<sup>り</sup>ることを無し。若し自らに縛<sup>ばく</sup>無くして能く彼の縛<sup>ばく</sup>を解<sup>と</sup>かんは、斯<sup>ここ</sup>に是<sup>ことわり</sup>の処<sup>ことわり</sup>有<sup>り</sup>。」

人々はお互いに自分と人との関係をもっている。従つて人の間違ひを見てそれを正すという場合があるわけです。たしかに誰が見ても間違つたことだから、相手にむかつてそういう忠告をすることが出来る。しかしその忠告は、自分にそれを返しみて、そして自分の体験を通して、力をもつてそれを言っているか、それとも無責任に言いつ放しにしているか、そこに問題が生れてきます。「若し自らに縛<sup>ばく</sup>ありて」すなわち自分と人との関係において、自分は自分だという風に自分が縛<sup>ばく</sup>られたままで「君はそんなに自分に閉じこもつてはだめではないか」というように忠告してみても「是の処<sup>ことわり</sup>有<sup>り</sup>ること無し」それでは筋道が立たないし、相手にたいしても役には立たないわけです。従つて「彼の縛<sup>ばく</sup>を解<sup>と</sup>く」ためには「自らに縛<sup>ばく</sup>」のない状態でなければならぬ。仏典にそういう言葉がある。これに対して太子は「深く思想と実行との關聯を論じ」られて次のごとく述べておられるのです。次は太子のお言葉になります。

「何となれば則ち若し天下の道理を論ぜば、悪<sup>や</sup>る遣<sup>や</sup>り善<sup>よ</sup>を取るは必ず己に始<sup>ま</sup>まりて方<sup>ま</sup>に能<sup>す</sup>く人を勸<sup>すす</sup>む。若し自ら能<sup>す</sup>くせずんば安<sup>い</sup>んぞ人<sup>びと</sup>を進<sup>すす</sup>むるを得<sup>え</sup>む。」(三二頁)

その意味は、次に黒上先生のお言葉によつて書かれてありますので読んで行きますよう。

「太子は摂政の大任をうけさせ給ひてより、当代の氏族制度しぞくの積弊に基く内政の紛乱に對し、これが不斷改革のため苦闘し給ふたのである。けれども實際政治の革新は太子に於いては、つねに国民精神生活の内的改革に基かねばならぬことを信知し給ふたのである。」（三二頁）

太子のつくられた憲法十七条を見ますと、色々当時の世相が手に取るようにわかりますが、たとえば、役人は早く役所に出て、遅く帰りなさい、役人は賄賂をとつてはいけないというようなことが書いてある。そのことはそれとは逆のことが当時行われていたことを示すものでしょう。それは現代と実によく似ている。と言うより現代はそのころよりもつと悪くなっているのかもしれない。それはともかく、そういう乱れた政治を正さなければならぬ。しかし政治の革新というものは、国民の精神生活の内容が内的に改革されていかなければ、どんなことをやってもだめだ、ということをおられたのだ。だから前記のように維摩経の一文を太子が読まれると、同じく前記のような太子の解釈が生れてきているのだ、と黒上先生はいわれるのです。つづいて黒上先生の文を読んでいきます。

「一代の内治外交が三宝興隆さんぼうきゅうりゅうの教化事業と表裏せしめられ、憲法第二条に『篤く三宝を敬へ』と仰せられ、これを『人尤ひとなほだ悪あましきもの鮮すくなし。能く教ふれば之に従ふ。其れ三宝に帰

せずんば、何を以てか枉まがれるを直たださむ』と結び給ひたるは、実にわが国民の靈性を信ぜさせ給ひ、教育教化に依つて国家生活の内的根柢を確立せんとし給ひし御心みこころを顯あらわすのである。」(三三頁)

三宝というのは仏・法・僧の三つをいうのですが、仏とは礼拝の対象、帰依の対象のこと、法とはその礼拝の道を教える経典をさします。僧とはその礼拝の生活の実習の姿です。だから或る意味でいえば私どもがいま求めているほんとうに正しい道というのが仏であり、その道を求めるためにこうして選択されて今読んでいる書物、これは法であり、そして合宿生活を行なっているこの姿は僧の生活だというようにも解釈出来ると思います。しかしこの仏法僧という三つのものは、一つのものによつて貫かれていなければいけない。合宿生活を行いながらもそこに統一したものがなく、一人一人がバラバラな姿では意味がない。合宿生活を三宝になぞらえるのは恐縮ですが、三宝というものについての理解を深めていただくよすがにはなるかと思ひます。

「其れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉まがれるを直たださむ」教えるにも教える道しるべがある、道すじがある。教え方、学び方がある。それを正して行くならば、人というものはもと立派なものだから、きつと立派な心を開いて行くに違ひない。憲法第二条の意味はだいたいこういうことにならうかと思ひます。しかも日本国民はお互に非常にすばらしい素質と

美しい心を本性の中にもっている。だからこの「靈性」を信じることによつて、その上に教育教化をつみ重ねていけば、国家生活の根柢は確立する、またそうしなければならぬとお考えになつておられるのです。

「けれどもこの内的改革は太子に於いては先づ之を自らの御心に実現せられねばならぬものであつた」（三三三頁）

そういうように太子はお考えになつたけれども、しかしそれが自分自身の心の中に信念になつて確立するのだから、いかにその道が正しいということが理屈でわかつていても、それではだめなのだ、ということ常を常に考えながら經典の解釈をなさるわけです。

### 声聞 凡夫と菩薩

「太子がここに『天下の道理を論ぜば』と宜ふのは、その求道精進が啻自らの解脱のためにあらずして、国民の共に帰趨すべき大道の実現にあつたことを示すのである。而も『悪を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勧む。若し自ら能くせずんば、安んず人を進むるを得む』との強き御言葉は、実にこの内的改革を先づ自らの御心に具現するに非ざれば、真に国民同胞を救済すること能はじと信知せさせ給ひたる、内心の生の戦の深刻なりし事実を偲ばしむるのである。」（三三三頁）

読んでおわかりになると思いますが、このあたりから自分を立派にするということの内容にはいつてまいます。

「この太子の人生観は維摩經義疏に自ら声聞、凡夫、菩薩の内的相違を論じ給ふ内容に最も明らかに顯示せられて居る。即ち維摩經仏国品に毗耶離園における仏陀が説法の会座を叙し、その同聞衆を挙ぐるに比丘、菩薩、凡夫の順序を逐へるに對して、之が内的意義を論じたまひ

『二には理に就いて論ぜば、声聞は生死を厭ひ涅槃を求む。凡夫は生死を愛し涅槃を畏る。二つながら皆仏の深旨に違き俱に中道を失へり。故に之を前後の二辺に列ぬるなり。菩薩は心益物を存するが故に生死を厭はず、万徳常果を証せんと欲するが故に涅槃を畏れず。凡夫の偏に同じからずして妙に中道を得たり』

とあるもの即ちこれである。』(三四頁)

声聞、凡夫、菩薩というのには重大な内的相違がある。「声聞」というのは解脱を望む心はあるのだが、それはあくまで自己中心の救いを求めているにすぎない。「凡夫」は自分のことしか考えず、宗教とは縁のない人たちです。これに對して「菩薩」というのは大ぜいの人が救われなければ自分も救われたことにはならないと考える大乘的な人たちです。毗耶離園というところで仏陀が説法をする。そこに大勢の人が集っているのですが、その仏陀の



説教を聞く人々を述べるのに、仏典では、比丘（声聞）、菩薩、凡夫という順序で記してある。それは何故か、太子はその意義を論じておられるのですが、その説明の中に、太子の生観が最も明らかに示されていると黒上先生は言われるのです。

「ここに声聞とは即ち小乗教徒を指すのである。人生の痛苦無常を観じ、生死の解脱を願ふ心はこれを否定すべきではない。」（三四頁）

小乗教徒であつても、やはり人生は無常なもの、救われないものだ、だから仏に祈りを捧げ、仏のまことを念じてあの世に行きたいと願う。そのように生死の解脱を願う心は決してつまらないものだとして捨てざるべきではない。しかし

「彼らが解脱を一我の天地に願求して他と共なる人生を願みざる思想は、つひに現実生死の裡の苦闘を厭ひ、理想を現実生活の外に求むるに至るのである。」（三四頁）

生死の解脱を求めるその心はいいのだが、自分一個が救われればよいというその考え方から大変な問題が生じてくる。もともと人間はお互いに「他と共なる人生」を送る、それこそ、具体的なわれわれの人生ではないか。ところがその現実から目をそむけて、自己一人の救いを求めるということになれば「つひに現実生死の裡の苦闘を厭ひ」、どうせ現実生活と違うのは仮の姿だから、それはほどほどにしておこう、という風に、現実生活を軽蔑する、そして理想を現実生活の外に求めていこうとするのです。そういう思考法は現代にも数多く

見出されます。先程も申しました「今の時代は全体の体制が悪いのだ、だから全然別のものをもって来たらいではないか」という考え、それは小乗教徒と密接な内的な関連があると思ふのです。いずれにしても現在自分たちが生きていくこの穢ない、欠点だらけな社会をありのままに肯定して、われわれが住んでいるのはこの国土以外にはないのだから、これをどうにかしてよりよくしていこうという一番じみな、やりにくい仕事にとりくむことをいやがつて遠のいてしまい、派手に勝手な理想像を描いて、現実を軽蔑するのです。もしそういうことになれば、そこには重大な人生態度としての誤りが生れてくるのです。

「太子はこの個人的超脱の人生觀を排し給ふのである。」(三四頁)

と黒上先生は文を続けられている。たしかに太子の思想を辿ってみると、太子はこの現実の具体的な世界から離れて個人的な超脱の世界を求めるような人生觀は、これをきびしく排除されるのです。しかし太子の思想について、黒上先生は同時に次のことも指摘される。

「けれども生死意欲の煩惱罪惡の儘を愛し、発心求道の念慮なき凡夫の生活も亦決して  
真実の道ではない。」(三四頁)

たしかに現実の醜さから目をそむけてしまうのは誤りであろうが、しかしだからといって、現実の中でやりたい放題のことをやっておればそれでいいということにはならない。それは「発心求道の念慮なき凡夫」であり、道を求める方向に向って心を定めることのない、

道を求める決意のない凡夫の生活であつて、それは決して真実の道ではない。そういう二つの問題が、この本のこの個所に提起されています。しからは真実の生きる道はどこにあるか。

「太子は常に大乘菩薩の願行を念じたまふのである。心つねに衆生救済の慈悲を抱くが故に生死動乱の間に処して厭はず、永久生命の信を念ずるが故に発心求道の願を相統するもの、これまことに太子の示させ給ひし道であつて、勝鬘經義疏に自ら仰せられて

『大士の懷おもひを立つることは、但ただ自らの為には非ず、必ず先づ物の為にすることを明あかすが故に、衆生を安慰せんと言ふ。』

とあるは、更にこの御精神を顕彰するのである。」（三四頁）

ここのところは、大乘菩薩の願行を念じたまう太子の人生觀というものは、一体どのようなものか、ということに入つて行くわけであります。さき程申しました通り、菩薩というのは、みなが救われたということがなければ自分が救われたことにならないと考える、すなわち「心つねに衆生救済の慈悲を抱く」のです。従つて「生死動乱の間に処して厭はず」——大衆が生活しているその場がどんなに穢きたないもの、醜みにくいものであろうとも、またそこに生と死との葛藤かつとうが綾あやをなして織りなされていようともそこから一步も自分は退ひかない、そしてその現実の人生というものの、その大地に足を踏まえるという生き方を確立するのです。そして、

「永久生命の信を念ずるが故に発心求道の願を相統するもの」、これが太子の念願された道だといわれるのです。ちよつと難しい言葉が出てまいりましたが、ここでいわれる「永久生命」ということばについて、少し説明しておきたいと思ひます。

### 永久生命——まごころ——の意味するもの

この書物の八十三頁に「世間虚こけゆい仮ぶつ唯ぜしん仏ぶつ是真ぜしん」という太子の御言葉がございます。これは「世の中というものは仮の姿であり、唯ただ仏だけが真である」という意味です。私はここでいわれている「仏」が先程の永久生命という意味をもっているのであろうかと思ひます。それは又真心、誠というふうに考えてもいいかと思ひます。とすれば「唯仏是真」ということは「ただ誠だけが真実である」ということになります。これは随分飛躍した言い方のようにお考えになる方もおありかと思ひますが、仏教が日本に摂取されたということは、仏教の仏というものの中に、日本の伝統的な思想が否定されるどころか、むしろ血のかよつたものとして再把握された、ということだと考えていいかと思ひます。日本古来の文化の基本的なものとして、われわれ日本人の祖先のあいだでは、長いこと「まごころ」とか「まこと」とかが大切にされられました。まごころをつくすこと、まことを貫くことは、日本においてはすべての人たちが、自己の生命をかけても悔ひることのない尊い価値あるものと認めてきました。

そこで太子が、新らしく仏教の信仰にはいられるに当たっても、太子の御心の中には、すでに日本人としての宗教的情操の素地たる「まごころ」「まこと」についての感覚が、体験的に正しく受け継がれていたとみてよいと思います。その日本的な文化要素を身につけられて太子は、仏教の信仰にはいつていかれた。それゆえに太子の帰依の対象としての「み仏」は、同時に、この「まごころをつくし」「まことを貫く」生命的姿勢、生命的律動を、そのままにその内奥に統一して把握されているもの、と見ることができましょう。

そこで、まごころをつくすという人間の生命的活動は、一方、日本人のそれまでの長い伝統の中に、自然に相続されてきていましたから、その生命的律動は、おのずから「永久的」な性格を含み、いわば「永久生命」として感得されてきた、ということができましょう。日本人の心に感得されてきていた永久的なる生命、それがそのまま何の不自然さもなく、仏のみ心の中に摂取されている、と太子がお感じになったときに、太子の思考も確立され、同時に外来文化の摂取に成功された、という段階が生まれたものと思います。「仏」とはすなわち「永久生命」を指す、と黒上先生がこの書物の中に指摘されているのは、このような意味だと思ふのです。明治時代に、西洋文化の摂取に成功したといわれる日本は、この場合も、明治天皇の内心に確立していた伝統的な日本の文化精神を無視しては、それを語ることができないと思います。終戦後のいまの日本は、西洋文化摂取の第二期を迎えているわけですが、

外国文化に対決する国民の志操や情意が、どのようなときに、文化の摂取に成功し、どのようなときに外来文化に征服させられてしまうものか、ということについては、どうかよくよく考えていただきたいと思うのです。

この機会に、ここで皆さんにもう一つ心をとめていただきたいことがあります。それは、宗教というもののあり方についてですが、いまの日本には、信仰の自由が確立されていません。それがよいこと、正しいことであることには、誰一人異議をさしはさみません。その通りでよいからです。しかし一歩ふみこんで、信仰の自由が存在しているという前提そのものはどうということなのかを考えてみることも大切だと思うのです。

というのは、信仰の自由ということは、世の中の人たちはどんな宗教を信じてもよいし、どの宗派に属してもかまわない、ということですから、その相異なる人たちが、宗教宗派の如何を問わず、皆が一緒に仲よく生活できるのだ、という相互信頼の前提があるわけです。ということとは、仏と神とが競うことにはないにしても、仏を信仰する人たちと、神を信仰する人たちのあいだに、お互いの心中を確認し合う共通の基盤がなければならぬはずなんです。その基盤が、日本では何であつたのか、また何であるのか、そこに眼を向けていただきたいのです。私は、それが先ほどから申してきた「まこと」ということであろうかと思えます。すなわち「まこと心」を基にしてこそ仏というものも考えられ、「まこと心」を基にしてこそ神

というものも感ぜられてきているのであって、人の心から「まこと心」というものを除外してしまつてなお、神があつたり、仏があつたりすれば、それこそ邪教、邪神であると思うのです。この宗教をして宗教たらしめている基本的なものが「まこと」であるという意味で、私は「仏」という言葉を「まこと」という言葉に置きかえてもさしつかえないと思うのです。そういうことからしてここに述べてある「永久生命」というのも、一応まことという意味におとりになつてもらえば、おわかりになると思います。

こうして「永久生命の信を念ずる」すなわち「まことの心」をお互にもつように念じ、そのお互の真心を信じ合えば、そこにはすばらしい世界がひらけるはずで、十人十色、一人一人の感情をお互に理解しあうことは非常にむずかしいけれども、お互が真心といわれるものを心にたたえていさえすれば、その真心を介して人間と人間が一番早く理解し合うことが出来る筈です。真心だけは万人に共通し、古今東西に共通している。だからそれが相互に拡大し、確認されていけば人間の世界は実に豊かなものとなる事が出来るのです。菩薩はそのような世界を念じている。

このことと関連して古い時代の人々ののこしたすぐれた和歌のことを考えてみましょう。正岡子規や源実朝、あるいは三条実美、古く言つて万葉の歌とか古事記の中に出てくる歌、それらの和歌の中にこもっているその作者の真心をたどつていく時「ああ、これは自分がい

まもっている真心よりも、この人のほうが数等鋭く純粹だなあ」と思えば、それらの人の心や精神の状況が、その人の姿はわからなくても手にとるようにわかってくるのです。そういう意味で、その真心の相続、伝達が実在してくるのであって、その真心の積み重ねられたものが、一つの生命的なものとして実感されてくる、ということもしだいに判つて来ます。それは地上のあらゆる人間生活を縦横無尽に貫き、人の心に通いあうものとして実際に感じとることができるでしょう。このようにして「永久生命」という言葉も、われわれの心の中に、生き生きと把握されるのです。だから「永久生命」というのは「これは何の生命だ、いつからいつまでつづくものか」などというような観念的なものではありません。それは真心を介して得られる生命の実感です。もちろん私たちも常に真心をもつて生きていくことは出来ない。しかしたまには心を尽して人のことを思う時がある。その瞬間のおもいをつないで歴史をおもい、人の世をおもう、その真心を何とか絶やさないでつなげようとする努力と熱意、その持統の中に、私たちは「永久生命」というものを実感出来るわけです。これが太子の示された道であつた。この永久生命を相続せんとされたところに太子の偉大さがあるということをとこの著者は発見されたのです。

次に記されている「大士の懐だいにしを立つる」以下の文章もそういう気持で読んでいただきたいと思ひます。ここにある「物」というのは「人」と解釈していいでしょう。



## 凡夫の痛感

「蒼生そうじょうと共なる生の故に解脱を自らの為に求め給はず、而も眞実生命の信に基きて国民の教化救済を先にと念じ給ふこの大きいつくしみの裡うちにこそ、天下の道理は具現せられ、国民文化の根柢は確立せられたるを仰ぎまつるのである。」（三五頁）

蒼生とはあおひと草とも申しますが、要するにあらゆる生きとし生けるものであります。それらの人と共なる生が自分の生なのです。従つて解脱を求めるといっても、それは決して自分だけに限られるような簡単なものではない。国民全体がほんとうに心安らかに生活できる世界を念じられるのです。「天下の道理」それは社会の理想と言つていいかとも思いますが、それはどこかに、客観的に存在するものではありません。この「大きいつくしみの中にこそ」その天下の道理は具体化され、そして「国民文化の根柢」が確立されていくのです。すなわちそういうことを中心立たつておられる方が、そうした生活態度をもつてすべてのものに対決していこうとされるのですから、自ずからその風は国民全体に影響し、国民生活の一つの性格がその間に確立され、固まつてきたのでしよう。黒上先生はそれを太子の御生涯に仰がれたのであります。

「けれども、この教化救済の御精神は、更に全体生活しんどうに滲透しんとうするところの偉大なる人格

の求道苦闘によつて表現せられたのである。我が文化創業の大任を荷ひて、国民生活を養育せられたる御心は、其の教化的御念願も単なる救済思想によつて出現せられたのではない。(三五頁)

しかしながら太子が言われることは、国民を救えばそれでいいのだという「単なる」救済思想ではなかつた。この「単なる」ということの中に含まれた意味は重大です。自分はどうなつてもよろしい、みんなが救われればいいのだ——結局そういうことでしょうが、「自分はどうなつてもいい」ということの中には、みんなの苦痛を自分の心の中に集めて、一人でその苦しみを背負うという体験内容がこめられているのが、本当の大乗菩薩のあり方なのです。そこで次の言葉が出てまいります。

「憲法第十条の教示は即ち正しくこれを示すものである。

『忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各々執あり。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鑿の端なきが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ。』」

「忿」のほうは心にむらむらと起る怒りでしょう。これに対して「瞋」というのはまなじりを決して、顔に怒りを現わすというような意味だと思えます。ともかくそのような怒りを捨てなければいけない。人にはみんな心がある。その心にはみんな執着がある。だから常に自分を中心に物事を考えていくので意見が必ずくいちがつてくる。これが現実の姿なのです。この憲法十七条の強みというのは、日本のそしてその中に生きている人々の現実の姿というものをありのままに捉えて、それを赤裸々にみんなの前に提示しているところにあると思いますが、この第十条にもそれが如実に現われていると思われまます。そういうように考えてみれば「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず」それが事実なのです。だからむしろ考え方を一つのものに統一しようとすることがおかしいのではないか。統一出来ないのが自然のままの姿ではないか。すなわちどれが正しいか正しくないかということとは「人間単位」できまるのではない。それよりも、自分が必ずしも聖ではない、彼が必ずしも愚ではない、「共に是れ凡夫のみ」という事実、それをお互いに正確に認識する方がすべての問題の先決ではないだろうか。お互に凡夫同士であることを人間が理解し合い、確認し合い、自覚し合うということに、すべての基礎をおいて一切の社会問題、家庭問題を考えていくべきではないか。それをほかにして世の中をよくしようとしたって決して出来るものではない、という厳しいお気持が「共に是れ凡夫のみ」というお言葉にこめられていると思うのです。

「是非の理詎ぞ能く定むべき」どっちが正しいかは結局はわからない。そこで「相共に賢愚なること鑿の端なきが如し」鑿というものは丸い輪ですから、その輪のどこがはじまりでどこがおしまいなのかはわからない。人間お互のことも結局それに同じだ、と言われているのです。だから「彼の人瞋ると雖も還つて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ。」というように示されているのです。この「衆に従ひて同じく挙へ」ということは大勢でものごとをきわめつくして、そのあとみんながいいというなら自分が反対でもみんなについていくのが正しいということです。ここで誤解しないでいただきたいことはそれは必ずしも数で票決して物事を選べといっておられるのではない。そのような手続きというより、それ以前のデモクラシー思想の基本的な、原理的なものがここに考えられているということです。そこに深く心をとめていただきたいと思ひます。

結局太子の思想が「単なる救済思想」ではなかったという、その「単なる」という意味はこの憲法第十条を読めばおのずから理解出来ると思うのです。単に救えばよいというのではなく、自分自身の中に「共に是れ凡夫のみ」という痛感が確立していなければ人間を救うことは出来ない。太子の思想の中心はここにあると思われます。

## 上下の人間関係

「これまた憲法第一条の『和を以て貴しと為し、忤ふことなきを宗と為す』の啓示と照応するのである。」（三五頁）

憲法第一条の全文は次の通りです。

「一に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す。人皆党あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。」

然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ」

「人皆党あり」人というものは好きな者同士で集り、徒党を組む、だが「達れる者」―物事の事理をきわめている人はほとんどいないのです。従つて「和を以て貴しと為す」、お互に和ということをほんとうに考えていかなければならない。それを心得ないでいくと君主にも父母にもさからい、自分一人が孤独になってさまようことになるというわけです。

「然れども上和ぎ、下睦びて」そうだけでも上和ぎ、下睦びて事を論じていけば、そこに道がひらかれるといわれるのです。社会には一つの秩序があつて、上に立っている人、下で勤めている人という上下の形態がある。この上下の関係を考えてみますと、上の人は自ずか

らそれに権力がともなっている。下の人には当然それに押えられたような形がある。だから上下の人が相對してものごとをなす時に大切なことは、上の人はその圧迫感を取り除き得るだけのあたたかな和らいだ心をもつことが大切だし、下の人は上の人に隙があればうまくごまかしてしまえというような態度ではなくで、たとえ上の人がその権力にものをいわせて自分に対してきても、いらだつ心を抑えて地位とか権力とかの差に困惑させられないだけの、豊かなそしてしつかりした心をもたなければならぬといわれるのです。こうしてこそ社会の秩序は立派に守られていくのでしよう。そういう態度で話し合いが進められていけば、完全に問題の本質がきわめられていく。「事理自ら通ふ、何事か成らざらん」ということです。言葉は簡単ですが、その中にこめられている内容は大変な深いものと思えます。深いといつても所謂深遠な哲理が述べられているというのではなく、人の姿が自然のままにとらえられているがゆえに、そこにわれわれは深さを感じるのです。

このような考え方に対して、それは非常に理想主義的ではないかという人が多いのです。あるいはそうかもしれない。しかしこういふようにもつて行こうとする努力をお互い人間同士でしなければ結局だめだということもまた事実なのです。たとえ理想通り一〇〇%は出来なくても一〇%でも出来れば、それはゼロとは断然違う。たしかにそれは派手ではない地味なことだから皆嫌がつて派手な方向へ派手な方向へと進んで行つて、社会改革を考える場合

にも、すぐ制度を変えることや、機構をかえるような外目に目立つ方向ばかりを辿っていかうとするのです。しかしこの太子のお言葉を本当にしみじみと考える政治家が一人でも国会の中に出てくるなら、日本も大変なしあわせです。その一人の発言には、かならずや全国民が耳を傾けるでしょう。またそれは一波が万波をよぶにちがいありません。だから太子のお言葉は決して単なる理想主義というようなものではなく、もつともつと現実的なことだと、私は思うのです。

## 多数決について

「この教示は当時の有司に対し、忿瞋ふんしんの絶すべきを教へ、共に完成せざる現実の我なることを自覚して融合親和おおやけして公のたまに尽すべきを示すものである。而も太子は此の教示の中に『人皆心あり。心各々執しゅうあり』と宣ひ、各自の個性または趣向を異にする人生は、其の思想・見解の相違を来きたすこと多き事実を照したまひ、ここに『彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす』という矛盾相対が人生まねかに免る能はざるところを示したまふのである。」（三六頁）

さきほど太子の「衆に従ひて同じく拳へ」というお言葉に関連してデモクラシーのことに一寸ふれましたが、ここでもう少し説明しておきたいと思えます。

意見が色々にわかれたとき、それを多数決できめていくという方法はもつともやり易い解決の方法だと思えます。しかし多数決というそのことの中にだけデモクラシーの生命がある、と考えたらとんでもないことだと思えます。大切なことはお互に考えが違つても、心を平等にしてそのことをきめていこうとする姿勢の中にあるのです。だから決定の方法の中には議長一任という方法もあるわけです。又その中で最も立派な意見を立てた人を尊敬して、その人に委任するという決議をしてもいいのです。ただ多数決というものはそうした矛盾相對した事態を收拾する一つの方法にすぎないのです。それなのに多数決だけにウェイトをおいて、お互の意見を一つにまとめようとして真心を尽し合う努力を軽視するということになればとんでもないことだと思ふのです。その努力を軽んじるならすでに票決の意味はない。その意味のない票決をくりかえして結論が出たというのは、そこから先は嘘ということになりはしないでしょうか。

私は何も多数決という方法を軽んじているのではなく、まして専制的なやり方をすすめているのではない。どんなやり方をするにしても、みんなが心をつくして議するという習慣なり決意なり姿勢なりが出来てこなければ、なにをやつてもだめだということを申し上げたいのです。



## 団体生活における道德生活

「されば自ら其の缺陷罪惡を省みずして各々個人我を中心とするときは、融合平和の人生は永久に実現すべからざるを宣ふのである。ここに『我必ずしも聖にあらざる、彼必ずしも愚にあらざる。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること鑠の端なきが如し』と仰せられ、共に同じく不完全の凡夫たるにめざめ、他の違ひを責めずして自らその至誠を尽すとき、真に団体生活の道德生活は実現せらるべきことを教へたまふのである。人生是非の道理は缺陷ある個人我を中心としてのみ定めらるべきではない。この懺悔求道の至誠に基く団体協力の精神に依つて自ら之を照明せらるべきを宣ふのである。」（三六一頁）

ここでは「団体生活の道德生活」という言葉に注目していただきたいと思ひます。道德生活というものは人間が一人つきりの場合には要求されません。人と人との関係が発生して来はじめた道德というものが考えられるわけです。従つて他人が自分にひどいことをしてもそれを責めることなく、その人に真心をつくして行くところに団体生活の道德生活が実現するということをお太子は教へておられる。著者はそのように述べておりますが、それだけでは問題がはつきりしない点もあるかと思ひますので少し考へてみたいと思ひます。

人が誤ったことをしてもこちらは真心をつくせばいいという考え方がある。しかしそれだけでは矢張り問題は解決しない。自分に悪いことをした人の中でもその動機はいろいろ違うはずだし、それを見定めることも大切でしょう。又本当にひどいことを自分にした場合には、積極的にその人の懐に飛びこんでいつて、「どうしてそういうことをするのだ」と心をぶっつけていくことも必要です。まともに心をこめてぶつかっていくこともまた「至誠をつくす」ということになるでしょう。そんな場合に、知らん顔をしてこちらからサービスするばかりでは、決して至誠をつくすということにはならない。それはむしろいくぢなしの行為であり、主体性の喪失を意味します。それゆえに、その人とどうしてそんなことになってしまったのだろうかということ、その人の気持になって考え、自分にも缺陷があつたのではないかと反省して、対人関係において自己を反省し他を把握し直すということではなければならないのです。相手と自分とは一つのところにあるのが正しい、あるべき姿なのに、それが崩れている。それは何故なのかというように心を向けて真剣に考えなければならぬ。それが、心を尽すという具体的内容だと思えます。

現在は道德教育についての論議が活潑に行われていますが、一寸その問題にふれておきましょう。日教組などでは「道德教育などやらない方がいい、人間が自然に自発的にめざめるまで放っておいてさしつかえない。その段階にくれればどうしたらいいか」ということは自然にわ

かってくるのだ」と申します。私はこう思います。たしかに「人間はこうしなければいけない」と決めていて、お前は一〇のうち三つしか出来ていないではないか、というような指導は誤りでしょうし、道徳律をいわゆる強制するというような事もいけないと思います。その点子供の自覚にまつという方がいいでしょう。しかしどういふのが人間関係の中で本当に正しいのかということは大人が教えてやらなければ子供自身ではわからない。それを正しく導いてやるのが道徳教育だと思います。だから単に道徳教育を復活して「かくあるべし」ということを強調するだけでもだめだし、単なる救済思想の延長のように、「こうすれば人が喜ぶのだ」とか「人のためになるのだ」というようなことを教えていけばそれですむというような簡単なものではない。要するに人と人との関係を自分の心の中にみつめて、考えつくすという、そういう修練が道徳教育の中心をなすべきだと思ふのです。そのような修練は東洋思想の中には昔から流れてきている。それが現代思想において枯渇しているだけのことであつて、ここに心を向けていかなければ道徳教育といつても決していいものにはならないと思ふのです。

### 内心に徹する求道精神

「これ自らにとつては不断の求道努力<sup>ぐどう</sup>を志し給ふ自督<sup>じとく</sup>の至誠心であり、他に向つては内

的平等の信を以て融合親和を念じ給ふ寛容の慈悲心である。氏族朋党の個我に迷執し、国家公共を念とするなき多数群臣に対し、この人間内心に徹する求道精神を以て共に全体協力を實現すべき信念を啓蒙せさせ給ふ御心は、内治外交と国民教化との相即を成就したまひし一代事業の依つて來るところの人生觀内容と仰ぎまつるのである。」(三六頁)

ここでは、人間の心の中に徹する道を求める精神、すなわち「内心に徹する求道精神」という強い表現がとられております。全体協力を實現する道というものが心の中においてつながつて経験され、実験され、把握され、それが積み重なつたとき、はじめて全体協力とか社会平和とかいうものがそこにくりひろげられて行くわけです。太子は山の中に入つてお経を読まれたのではない。政治外交の衝に立つて、非常に苦しい泥沼の中に足をふまえて、痛切な、苦しい、悲しい思いのはねかえりが、不斷に寄せかえすところに立ち続けられた。そのあわただしい日常生活の中で仏教を学んでいかれたのです。そこをよく心にとめたいと思ひます。その太子のお姿をこそ、しみじみと心からお偲びしなければならぬと思ひます。

いま読んだ個所と関連しますので、すこし飛びますが、四十八頁の太子のお言葉をここでご一緒に読んでみたいと思ひます。

「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修する所広からずして、物とその苦樂を同じうすること能はず。所以に勸めて応に著を離るべ

しと明かすなり。」（四八頁）

このお言葉は、実はこの文の前に維摩経の文殊問疾品の中の一章があつて、それに対して大陸の高僧たちが色々註釈を施されている文が引用されており、それと対比して太子の註釈がそれとどちらがうかを示すために、そのあとに太子の見解として黒上先生が示されたところです。だから太子のお言葉にはいる前に經典の本文について一寸述べておきましょう。本文は次の通りです。

「菩薩は客塵煩惱を断除して大悲を起す。愛見の悲は則ち疲厭ひえんの心有り。若し能く此を離れば、疲厭有ること無し。」（四四頁）

大乘菩薩は人間のひきおこす様々な迷い、煩惱を断ち切つて大悲をおこす。大悲というのはこの本には度々出てきますが、大ぜいの人が救われなければ自分が救われたことにはならないという悲願です。しかし「愛見の悲は則ち疲厭の心有り」——「愛」というのは感情による執着、「見」は認識による執着とみていいでしょう。すなわち「愛見の悲」というのは自分の世界にとじこめられた、小乗的な執着をさすと考えられます。しかしそれにとらわれていれば疲厭の心がある。疲れてしまつて長続きしないことになつてしまふ。飽いてしまふ。好き嫌いが生じてしまつてそれが慈悲心の中に入つてしまつてゐる。いわゆる凡夫の慈悲です。従つて「若し能く此を離れば、疲厭あることなし」ということになるのです。同じ

慈悲心であつても、「愛見の悲」というものを離れなければだめなのだ。これが維摩經の中の教えであります。

これに対して大陸の高僧たちは、經典をそのまま解説して、菩薩は「かくかくでなければならぬのだ」といつている、という風に各自の論を展開しているだけです。ところが太子は、そのような教義的解釈はとられない。「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば……」とおっしゃるのです。「自行外化」自分も立派な行いをして他人にもその心を及ぼす、それを心に念じて心を整え、それが実現出来るような状況に心をもつて行こうとするけれども、「若し自他の二境を存して修行せば、」——ここで太子は心を調伏する、すなわち心を整えるプロセスに問題の要点を移されていくのです。すなわち自分の心の中に、自分と他人とは違うのだ、という意識を残したままで修行していくならば、いくら自分で立派な行為をしてそれを人に及ぼそうとしても「則ち修する所広からずして、物とその苦樂を同じうすること能はず」その修するところは決して拵がらない、すなわち他に及ばないし、他とその苦樂を同じくすることは出来ないということです。「所以に勧めて応に著を離るべし」それだからこそ、自他というものをいつもわけようとする執着心をはなれなければならない。この自他を分かとうとする心は人間本来の執着なのです。だからそれをもっているのは人間として自然な姿なのです。それはそれでいい。しかしもし維摩居士が

言っているような立派な人間になる——自行外他を憶して心を調伏しようとするのであれば、自他の境という、人間として離れがたい執着から離れるよう不断に努力していかなければならない。太子は維摩經の言葉にふれたおもいを、そのように具体的に人生経験的に述べられているのです。ここにさきほどの「内心に徹する求道精神」というものが最も鮮やかな姿で表現されていると思うのです。

時間がきましたので非常に残念ですが、これで一応終りたいと思います。これまで私はこの本を読みながら色々な感想をのべて参りました。しかしこのような書物を一緒に読んでいけばいろいろな意見が出てくるわけです。一人の人がこの書物に触発されて心が開かれるところ、他の人が開かれるところは自ら違ってくるでしょう。その違うところを一つに寄せ集めながら問題をきわめていくところに、心を一つにしながら勉強して行くという重大な問題が生れてくると思うのです。

### 勝鬘經義疏と明治天皇御製

最後に一つだけ補足させていたきたい。この書物の中に、太子の勝鬘經義疏のことばが数多く出てまいります。勝鬘經には舍衛國しゃえの波斯匿王はしおくとその夫人が、その娘勝鬘を篤く信じ

ながら教育をしていく、その親としての姿勢が語られております。その經典にふれたおもいを太子はつねにご自分の生活経験から説いておられるのです。太子は国家生活の中において摂政として立つておられる。そうして国民に対しておられるのです。その国民に対する気持は丁度親が子に対する心に通うものがある。太子はそのようなご体験を通して、勝鬘經を見たいかれるのです。従つてこの勝鬘經義疏を研究していけば、日本における天皇政治の具体的な心の姿勢というものが、非常にくつきりと浮んで来ると思うのです。

これに関連して歴代の天皇の御製を是非よんでいただきたいと思ひます。御製を拝誦すれば、歴代の天皇がどういふ態度で国民に相對しておられたかがはつきりわかつてくるはずで、歌には嘘は言えない。歌には調べもございませし、その人柄がそこには必ず現われてゐるので、現在天皇制に関する論議は多く行われていますが、それは全く学問的には体をなしていないと思ふ。何故なら天皇の御心を素通りしたところで論がたたかわされているからです。天皇制と言っても、そこには天皇という方が具体的に歴史的にずっとつづいてこられた。その天皇が何を考へておられたかということを見無視して天皇制論議をくりかえしているようなことは、私は無意味なことだと思ふのです。いま世間でなされている天皇制論議は、いわゆる一般的な君主制論議の域を出ていないのです。史実と、人と、その人の心を問題とするようになったときに、天皇制論議ははじめてその本質にふれていくことができるだろ



う、と私は思っています。天皇の御心を知るためには、まことに好都合なことに歴代の天皇の和歌——御製が残っています。勅語も残っていますが、それは臣下の人を手伝ったものと見なければなりません。しかし御製は天皇御自身の直接的な表現なのです。その他ここにとりあげた太子の三経義疏がある。これらは天皇政治を研究する上に欠かすことのできない文献といえましょう。ところがこれほど天皇のことについてさまざまに議論が行われているのに、驚くべきことには、明治天皇の御製集一つすら戦後はまともに出版されていない。戦前のものはすでに絶版になっております。これだけ出版物が氾濫している時代に明治天皇御製集一冊すら街頭書店のどこにもない。それからここにおいでになる夜久先生がいまから四年ほど前に今上天皇のお歌の本をお出しになりましたが、これなどもほとんどの人に知られていないままなのです。今の天皇がどういうことを考えておられるかを知るには、天皇のお歌が一番手近かな資料でしょう。ところが大部分の人はそんなことには無関心で、天皇制の論議だけをたたかわれているのです。

最後にこうした点に関連しますので、明治天皇の御製を三首だけご紹介しておきましょう。これはすべて明治四十四年の御製ですから、天皇がおかれになる前の年にあたるわけです。このとき天皇は国家の行く末を非常に心配なさって、沈痛なおもいをこめて生活をつづけておられた、といわれています。それを実証するかのように、御歌の中にも、そういう感

じが非常に強くあらわれております。

### 虫声非一

さまさまの虫のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは

たくさんの虫の声が夕方頃になると聞えてくる。この声をじつと聞いていると、ほんとうに生きているすべてのものが、どんなにさまさまな想いをたたえているか、それが身に泌みて感ぜられるというご感懐の歌です。それは自然界の事象をみてよまれたものではありませんが、天皇にとつては同時にその状景についての御述懐の中に、国民の一人一人への想いを深くたたえておられるように感ぜられます。

### 虫声欲枯

かれがれになりぬる庭の虫のねはなかな夜よりもさびしかりけり

秋が深くなると次第に虫の声が消え細つて行く。その声が聞えなくなる時は虫が死んでいくときでしょう。そのかれがれになった声がお住居の庭先で、秋の更けた夜にきこえてくる。それは、虫が鳴かない夜よりもさびしい。声が全くきこえないというのであればひどく淋しいわけですが、それよりもなお淋しく感じる。こういう御製を読んでいますと、天皇のお人柄がしみじみと感ぜられてきます。

### 紅葉

うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな

色があせてまさに散らうとする、その瞬間にまで心を止められるのです。この世におけるもみぢの葉の命、それはもみぢの一葉にこもるいのちにすぎないけれども、そのもみぢの一葉がいまにも散らうとするその刹那の、命をこめた美しさに目をとどめてうたわれた歌であります。くりかえし誦していくと、なんともいえない自然の風景とそこに立ちすくんでいる作者の心のゆかしさが感じられてきます。このようなお歌は、まだ、まだたくさんあるので、そこには天皇のお心が非常に具体的に感じられてくる。こういう天皇のお心が国民生活をおくっている自分たちとどのような関係でつながっているか、真剣に考えなければいけないところであろうと思います。また天皇にそういういいお歌がお出来になるということは、どんなに歌の御修行をなさつたであろうということもわかってくる。歌の修行をするということは、みなさまも創作の経験をつんでいけばわかってくると思いますが、それは真心を練るということです。真心を練ることを忘れては、うたのしらべは生まれてきません。こう考えてくれば、天皇の真心が日本という国の歴史の中に占める位置がかりそめのものではない、ということも少しはわかってくるのではないでしょうか。こうした重大な具体的なポイントを見逃して、概念的、理論的に天皇という問題をいじくり廻して来たのが、戦後十八年の間日本が辿ってきたあとでした。そこになにか重大な誤りがあったのではなかったか、皆さんと

一緒に考えてみたいと思います。

御製についての説明が長くなりましたが、聖徳太子の御言葉にふれることの意義についても、それと全く同じことが言えるわけですし、今後さらに御製と関連せしめながら太子の書物にふれていかれることを是非ともお願いしたいと思います。

短歌創作について

山田輝彦  
夜久正雄

(附) 雲仙合宿歌集―抄



(雲仙の遠望)



# 短歌創作について (一)

——「歌よみに与ふる書」を中心に——

山 田 輝 彦

はじめに……感じたことを詠む……定型のもつ意義……表現の技術……  
「歌よみに与ふる書」の要点その(一)……その(二)……その(三)

## はじめに

この合宿に於ては、短歌の創作ということについて、かなりのウエイトを置いて考えておられます。そのアプローチの意味もあり、あわせて、後段の夜久先生のご講義への入門という意味に於て簡単にお話して置きたいと思ひます。

合宿案内に合宿で歌を創らせると書いてございましたが、それをご覧になりまして、ある違和感をお感じになつた方があつたのではないかと思ひます。大学生と西洋音楽とか、大学生と近代小説とかいう組合せなら関連がないこともないが、大学生と短歌というのは、少しアンバランスではなからうか。あの「みそひともし」というのは老人が趣味的にもてあそぶものではないか。われわれの新鮮なエネルギーはもつと違つた形式で造型すべきものではなからうか。そもそも短歌というものは後ろ向きの芸術ではなからうか。こういう風にお考えの方がまず半分くらいはあるかと思われまふ。そういう違和感を、主催者側としてまず解消して置かねばなるまいと思ひます。

それから、実際に歌を創つていただくわけですが、これは創らなくてもいい、創つてもいいということではなく、創れということですから一種の強制です。そういう強制を課するのは、いかなる根拠によるのかという説明が必要となります。われわれがどういふ意図で歌を



創っていただくのかということをごく簡単に説明し、あわせて、正岡子規が実作者の立場から述べた「歌よみに与ふる書」を一緒に読んで、皆様がこれから歌をお詠みになる時の一種の手引きにしていただきたいと思えます。

小林秀雄先生が西洋の絵画についてお書きになったもので「近代絵画」という著書があります。その中で、ドイツの美学者・ヴォリンゲルの「抽象と感情移入」の説を引きつつ、芸術の起源について論じて居られます。大体芸術の起源については二通りくらしいの類型が考えられる。一つは芸術というものは自然を模倣したものである。これはルソーなどを源流としますが、自然が主であって、その自然を模倣したものが芸術であるというのです。しかしヴォリンゲルはそのような考えは誤りであるとして、自然と人間との間には、最初から非常に厳しい対決があっ



たという前提から出発するのです。外界というものは非常に無法則で移ろいやすいものだ。われわれの生命というものも、把えにくくて、絶えず移ろってゆく、非常に不安定なものだ。そういう生の移ろいやすさ、自然の無秩序な動きというようなものに対して、人間は一種の本能的な恐怖の感情をもっている。なんとかしてその恐怖から脱れたい。移ろいやすい生を何か一つの形に集約してとどめたい。生の記念というものをとどめたい気持は、人間誰しも持っている。そういうものが芸術になつたのであろうという論旨だつたと思います。従つて芸術は自然の模倣ではなく、自然の中から本質的なものを引き出して来て、それを組み合わせる一つの形式を作る。つまり芸術の起源は模倣衝動ではなく抽象衝動だということになるわけです。

人間は色々な経験の中から、本質的なものを抜き出して来て、それを一つの形として、そこに自分の不安定な生命を盛りこんで行くことになります。人間はカオス——混沌の中では不安で生きられないから、コスモス——秩序というものを求める。そういう生命の根本的な欲求があつて、それが芸術というものを生み出して行くという論理です。

そこで、芸術の創作には自分の経験の「選択」ということが当然起つて来ます。何でもかでも、自分の経験がそのまま芸術になるわけではなく、選択と整理がまず第一の条件となります。竹山先生のお話に「知的直観」という言葉が出て来ましたが、芸術家は「情的直観」

によつて、混沌としたものの中から本質的なものを抜き出して来る。従つて、われわれの体験を整理するためには、芸術は非常に役に立つのです。芸術は意図せざるうちに、かかる倫理的な効果をそのうちに含んでおります。しかし、われわれは膨大な小説を書いたり、交響楽を作つたりすることは簡単にはできない。そこに行くと、短歌は、われわれの祖先が長い間かかつて作り上げて来た一つの定型、形式である。日本語を話す人なら誰にでもなじみやすい形式の中に、自分の生を繋ぎとめる努力をしてみることによつて、自分の経験を整理することができるのではないか、と思ふのです。

そこで、短歌を創るといふことは、「感じたことを定型の言葉に定着させる」ということになります。別にむずかしいことはありません。それでは、感じたこととはどういうことか、それを定型の言葉に盛りこむといふのは、どういう意味があるのか、それから、言葉に定着させるということには、どういう注意が必要であるか、この三つのことを、もう少し深く考えて見ましよう。

### 感じたことを詠む

まず、われわれは感じたことを歌にするという点に注意していただきたい。感情が歌の中心になる。現在では感情と知性を対立させて、感情というものは、原始的で野蛮なものだ、感

情は「人間の自然」だと言います。感情とは、なまな、原始的な、危険なものだ、知性こそ近代人にふさわしいという考え方があります。しかし、それは非常に大きな間違いなので、感情を無視したり、抑えつけたり、虐待したりせずに、それを素直に表現するという習練を積んでいただきたいと思うのです。感ずべきことに感ずるということは、非常にたやすい、当り前の事のようなのですが、現在ではそれが非常にむずかしくなっているのではないでしょうか。それは、敢えていえば知性の毒にあてられているのでしよう。知性はものを鋭く分析したり、人間の心理を裏返しにしたり、そういう非常に否定的な働きを持っています。勿論人間が文化を創造して行く過程で、知性程積極的なものはなかったでしょう。しかし、反面、知性は冷静に鋭くものを分析して行きます。特に人間生活をなぐる場合でも、ことさら人間の暗黒な面、人間の低次な面に鋭いメスを振うというような風潮が、現在の思想界の一つの根強い流れになっています。それに毒されてしまうと、素直に物に感ずるということが出来なくなってしまう。素直な心になり切るといふ、そのこと自体が現在では非常にむずかしいことだ。

歌を創る場合に一番大切なことは、感ずべき時に感ずるといふ心、誰でも持っているが、ともすれば忘れていく素直な心に返つてみるのだと思います。短歌の形式が成立したのは六世紀の終り頃といわれていますから、約千二百年の歴史を持っています。その間、短

歌は随分衰弱したり、類型化したりしています。「伝統というものは、日に新たに救い出さねばならないものである」と小林先生も言つて居られます。伝統というものは、物質のように、バトン・タッチして扱えられるものではない。毎日毎日新たに蘇えるようなものでなければならぬ。短歌も、どうかするとマンネリズムに墮してしまう。マンネリ化したものをもつて、歌という風に考えてしまうと、青年として四つに組んでみる積極的な価値がないということになってしまいます。ひとつ、皆さんは、この定型の中に、溢れるような生命を盛りこんで下さい。勿論テクニクも必要だし、習練もいりましようが、「心主詞従」という言葉の通り、素直な心が第一ですから、素直なものの方というのを是非やってみて下さい。

### 定型のもつ意義

五・七・五・七・七という定型には、どういう意義があるのでしようか。定型というものには、自由を束縛する機能があると考えられます。従つて、型にはめなくてもいいではないか、自由詩でも何でも、思つたことを書けばいいという考え方も当然出て来ます。しかし、短歌の定型には、もつと積極的なものがあると思ひます。第一、短歌は非常に長い歴史を持つている。定型なら俳句でもいいではないかという異論がでましようが、短歌と俳句は本質

的に違つたものです。(「新しい学風を興すために」第一集—一五七頁参照) 俳句は歴史も浅いし、対象を知的に集約するという点でも、短歌とは違つています。俳句は常に自分の体験を極度に概括するもので、その概括の仕方が俳句の面白さです。従つて俳句は知的な文学であると言ふことができます。本質的に抒情詩である短歌とは根本に於て違つたところがあります。ともかく、短歌の定型というものは、長い歴史性を持つていてということが、積極的な一つの意味です。われわれは歌をよむことによつて千二百年もの永い間、日本人の哀歓というものを盛り上げて来た、その伝統につながる事ができるのであります。

短歌は人間の感動の波がそのまま言葉のリズムになるような芸術です。俳句は一度知性のリズムを通して人の心に伝わりませんが、短歌は、もつと直接的に、まっすぐに人の心に伝わつて行きます。だから相手が、日本語を話す人、日本語のわかる人でさえあれば、必ずこちらの心が伝わつて行きます。その意味で、非常に広い空間性を持つたもの、同胞感の表現に最も適した詩型となります。これが定型のもつ第二の意義だと思ひます。

大体、近代の表現というのは、「個」の表現、孤独な「個」の表現だと思ひます。これが近代芸術の本質です。しかし、短歌は、永い歴史性を持ち、広い共感の世界に拡がって行くという意味で、普通の意味での「芸術」ではない。人と人とがその心を通わせて行く道だと考えられます。短歌が「敷島の道」といわれて来た所以です。道というと、いかにも中世的

であつて、後ろ向きの芸術のようですが、それは短歌のもっている性格が、単なる孤独の表現、個人の表現をこえて、歴史や同胞へつながって行く拡がりを持つてゐる所から、名づけられたものでしょう。

### 表現の技術

感じたことを定型の言葉に定着させるというのは、一つの技術です。その際大事なことは、上手に詠もうということではなく、「正確に」詠もうということです。フローベルに一語説というのがあります。一つのことを正確に表わすには一つの言葉しかない。道端の石ころにもすべて個性がある。一つの石を表わす言葉は一つしかない。沢山の言葉の中からたった一つの言葉を選べ、それがすぐれた文学者のつとめだということです。それは、ある体験を正確に現わす言葉は一つしかないということです。表現には正確さを期してほしい。従つて短歌の創作では、自分の思つてゐることを正確に言葉にする習練が要求されます。その習練の中で自分の考えたことを、正しく言葉にするということが如何にむずかしいかを体験するわけです。またそういう習練をすると、今度は人の文章の真偽を直観的に知ることができるようになります。従つて、人の文章を正確に読む一つの習練にもなる。こういうことも、われわれが短歌をとり上げる一つの意義と思ひます。

その正確さということに関連して、もう一つ述べると、われわれが表現するということは、相手を予想するわけです。歌人の言葉で「独詠」か「対詠」かということを行います。が、「独詠」にしろ、言葉に表現される以上、それは読む人を予想する。読む人を予想するということは、自分の作品が客観性を持たねばならないということです。自分の考えていることが正確に相手に伝わるには、どうすればよいかということを考えねばならない。自分だけいい気になって、自分だけに分るような表現をして、それで悦に入るといふ態度ではないかと思ひます。ともかく、素直な心を、正確に詠むということに注意を集中して下さい。

それから、体験が複雑で一首の歌に詠みこめない時があります。それを無理に詠みこもうとすると、概括的になつて、抽象的な歌になります。子規はそういう場合に「連作」という形をとり、一首一首が独立しながら、それぞれに関連を持たせて、情意の自然な展開を表現しています。こういう点にも注意して作つてみたらよいと思ひます。

いづれ、二三日後には、短歌の相互批評ということが行われます。その時には人の歌の批評をするわけです。その際の注意を申し上げて置きます。われわれが相互批評という場合には、自分が高い立場に立つて人の作品にケチをつけるというのではありません。それをやられると、われわれの意図とは全然ちがつて困つたことになります。そうではなく、その人の、そのときの体験を偲んで、それに自分の心を合わせるように努力することです。そういう習



練をすれば、直して貰う方も非常にありがたいし、直す方も人の心になってみるという経験をしますから、非常に勉強になると思います。いわば、相互批評は共感の世界への通路を開くことにその意義があるといえましょう。

### 「歌よみに与ふる書」の要点 (一)

正岡子規は、明治三十一年、「日本」という新聞に「歌よみに与ふる書」という、旧派のマンネリズム化した歌に対する批判の文を十回連載しました。その中から諸君がこれから歌を創るとき注意すべき点のいくつかを抜き出してプリントにしましたので読んでみたいと思います。これは岩波文庫にも入っていて、単に歌に關することだけではなく、人間の心の動きをどのようにキャッチして、どのように表現するかということ、あるいは本当に生命的な批判というのは、どういうものであるかを教えてくれる貴重な文献ですから、是非全文を一読されることをお奨めして置きます。

この書の中で子規は何度も「理屈を詠むな」といういましめをくりかえしています。理屈というのは自分の経験ではない抽象的な概念を意味しているようです。自分で経験したことでないこと、つまり、切実に自分が表現したいと思うようなことではない、知的な遊戯のようなものは、人を動かす歌にはならないと、何べんもくりかえして言っています。最初のと

ころを読んでみましょう。

貫之は下手な歌よみにて、古今集はくだらぬ集に有之候。其貫之や古今集を崇拜するは誠に氣の知れぬことなど申すものの、實は斯く申す生も、數年前迄は古今集崇拜の一人にて候ひしかば、今日世人が古今集を崇拜する氣味合は能く存申候。崇拜して居る間は誠に歌というものは優美にて、古今集はその粹を抜きたる者とのみ存候ひしも、三年の恋一朝にさめて見れば、あんな意気地の無い女に今迄はかされて居つた事かと、くやしくも腹立たしく相成候。先づ古今集を取りて第一枚を開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て来る、実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外国人との合の子を、日本人とや申さん外国人とや申さんとしやれたると同じ事にて、しやれにもならぬつまらぬ歌に候。此外の歌とても大同小異にて、駄洒落か理屈っぽい者のみに有之候。

引用文中の「去年とやいはん今年とやいはん」の上の句は、「年のうちに春は来にけりひととせを」というのです。つまり年の暮れぬうちに暦の上で立春が来たという知的な面白さを歌にしたものです。古今集は九〇五年に成立した最初の勅撰集で、それ以来、実朝や真淵のような少数の例外を除いては、常に歌壇の正統を以つて任じて来ました。明治二十年代までは、古今集がまだ圧倒的な勢力を持つていましたから、それに真向から挑戦した子規の言葉は大胆極まるものであつたはずです。子規のそういうマンネリズムに対する生命的な挑戦によつて、短歌は強い衝撃を受け、もう一度蘇つて来るわけです。こういう生命的な批判がな

ければ、伝統というものは必ずマンネリ化するということは、歌だけではなく思想生活に於ても同様です。次は、文庫本に収録してある「歌話」の一部で、同じく理屈の排撃です。

歌に原因と結果とを具足せしめんとするは悪し。結果を見て原因を推定するが如きは更に悪し。「根を絶えてさざれの上に咲きにけり雨に流れし撫子の花」といふも、小石の上に根を絶えて撫子の咲くといふが現在の景色なるを、そればかりにては面白からずとて、更に其原因を探り、「雨に流れし」と詠みしなり。これよからぬことなり。現在の景色即ち結果のみならば、その景色相応にそれぞれの趣味ある者なれど、苟も原因などといふ理屈にわたらば、如何なる好き景色もために打ちこはされて、眼目たる理屈のみ読者の心に残るべし。此の理屈を得て満足する読者もあれど、理屈は読者の知識を満足せしむる者にて、感情を満足せしむるにあらず。知識を満足せしむるを喜ぶは総て歌を理屈の方面より見る者にして論ずるに足らず。

一寸と読むと煩雑な論理のようですが、例をあげて説明しますと、因果律のような、物理的な法則のようなことを歌に詠んでも、何も面白くないということ。例えば、「我が持ちしカバンは下に落ちにけり万有引力のある故ならん」という歌を詠んだとする。面白くも何ともない。そういうことは歌にならないと言っているわけです。

### 「歌よみに与ふる書」の要点 (二)

次に感情が歌の本だということをくりかえし言っています。感情というところすぐ「感情的」

という言葉を書き出して、感情は原始的なもの、知性は高尚なものと考えがちですが、そういう迷蒙を打破していただきたいものです。

詩歌に限らず総ての文学が感情を本とする事は古今東西相違あるべくも無之、若し感情を本とせずして、理屈を本としたる者あらば、それは歌にても文学にてもあるまじく候。

これは結局、皆様が歌を創られる時、自分が直接経験した感じを詠めということですが、自分が感じた切実なことを詠めば、一応は歌ができます。もちろん、技術がいりますから、すぐに秀れた表現ができるというわけには行かないでしょうが。次は「曙覧の歌」という文の一部で、やはり感情の重大さを指摘しています。

万葉が遙かに他集に抽んでたるは論を待たず。其抽んでたる所以は、他集の歌が毫も作者の感情を現し得ざるに反し、万葉の歌は善く之を現したるに在り。他集が感情を現し得ざるは有の儘に写さざるがためにして、万葉が之を現し得たるは、之を有の儘に写したるがためなり。曙覧の歌に曰く「いつはりのたくみをいふな誠だにさぐれば歌はやすからむもの」「いつはりのたくみ」古今集以下皆是なり。「誠」の一字は曙覧の本領にしてやがて万葉の本領なり。万葉の本領にして、やがて和歌の本領なり。我謂ふ所の「有の儘に写す」とは即ち「誠」に外ならず。

「いつはりのたくみ」とは、誇張とか、過度な修飾とか、人を驚かそうという邪心とかを

指すのでしよう。特に、その後の方に注意して下さい。「誠」とは、自分に忠実であること、嘘を詠まぬこと、心にもないことを詠まぬということです。自分に忠実であれば、それは必ず人の心を打ちます。自分の心にもないことを、言葉を飾って言っても、人を感動させることは出来ないわけです。

次に「誠」をさまたげるものとして、門閥の弊害や、誇張の弊害について説いています。

定家以後歌の門閥を生じ、探幽以後画の門閥を生じ、両家とも門閥を生じたる後は、歌も画も全く腐敗致候。いつの代、如何なる技芸にても、歌の格、画の格などといふやうな格がきまつたら最早進歩致す間敷候。

「格」というのは、ランクということ。階級ということ。芸術は元来平等であるべきで、年令も、階級も、性別も、そういう差別がないところに、芸術の本領があります。格ができると芸術は必ず墮落するということ。子規はまた誇張の弊害について次のように述べています。

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

此躬恒の歌百人一首にあれば、誰も口ずさみ候へども、一文半文のねうちも無之駄歌に御座候。此歌は嘘の趣向なり。初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣無之候。趣向嘘なれば趣も糸瓜も

有之不申……。

引用の歌は、霜が真白に置いてあるということを用いたための屁理屈です。霜が真白に降りていて、どこが菊か、どこが霜か分らないから、大体見当をつけて折つたら菊が折れるだろうという歌なのです。極端な、わざとらしい誇張ですから、人の心を打つことがない。オーバーな修飾の言葉だけで人を感動させようと思うのは全くの邪道です。「小さき事を大きくいふ嘘が、和歌腐敗の一大原因と相見え申候」という言葉も同じことをいまして、思っています。

### 「歌よみに与ふる書」の要点 (三)

短歌は俳句と違って「調べ」を持っています。調べとは調子、声調ということ。初心者は、歌の調べはなだらかなもの、優美なものがよいとしますが、必ずしもそうではありません。ごつごつして、ひっかかり、ひっかかりしたような歌が、かえってエネルギーな、心の中のカオスをひびかせて来ることもあります。子規は次のように言います。

歌よみどもはいたく調といふ事を誤解致居候。調にはなだらかなる調も有之、迫りたる調も有之候。平和な長閑な様を歌ふには、なだらかなる長き調を用うべく、悲哀とか慷慨とかにて情の迫りたる時、又は天然にても人事にても、景象の活動甚しく、変化の急なる時、之を歌ふには迫りたる

短き調を用うべきは論ずる迄も無く候。然るに歌よみは、調は総てなだらかなる者とのみ心得候と相見え申候。

歌の用語についても、子規は旧派のマンネリズムを打破しました。昔の歌人は、歌の言葉を雅語といつて、みやびやかな言葉でなければ使つていけないといつていましたが、漢語でも、俗語でも、西洋の言葉でも、何を使つてもよいといつています。歌は文語の表現ですから、正確には文語の語法に則つた歌でないといけないのですが、あまり語法や仮名遣いに拘束されると、手も足も出なくなりますから、今日はあまりこだわらずに、のびのびと創つて下さい。又、むやみに縁語や枕詞を入れるのも、かえつて歌の生命をなくす結果となりません。「縁語に巧みを弄せんよりは真率に言ひながしたるが余程上品に相見え申候」といわれています。生半可な小細工をしないという注意が肝要です。

最後に私の申し上げたいことの根本は、やはり「真心」ということです。子規は実朝の歌を引用して次のように述べています。

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ

初三句は極めて拙き句なれども、其一直線に言ひ下して、拙き処却つて其真率偽りなきを示して、祈晴の歌などには最も適当致居候。実朝は固より善き歌作らんとて之を作りしにもあらざるべ

く、只真心より詠み出でたらんが、なかなか善き歌とは相成り候ひしやらん。

引用の歌は、洪水天に漲り、土民愁嘆している様子を見て、鎌倉三代将軍、源実朝が詠んだ歌です。これを詠んだ時、実朝は二十才であったと言います。将軍という使命の重さと、人間の生命に対する已むにやまれぬ痛感がこの歌の底にはあるようです。巧みさを意図して作られたものではない。やみがたい真心のほとばしりが感動を呼ぶのであって、単なる才能の作品ではありません。

歌は平等無差別なり。歌の上に老少も貴賤も無之候。歌よまんとする少年あらば、老人杯にかまはず、勝手に歌を詠むが善かるべくと御伝言被下候。

皆様の中には、今日はじめ短歌を創られる方が居られるに違いない。私共は、昭和十五年ごろから創っている。しかし、そういう外部の差別をこえて、感動の表現という立場では全く平等である。内的平等の実現という意味でも、短歌の創作は貴重な体験となるに相違ありません。歌は決して後ろ向きの芸術ではなく、積極的な意味を持っています。短歌という伝統的な形式の中に、皆様の純粋な、溢れるような情意を盛りこんで、すばらしい歌が生れることを念願して、この入門講義を終わりたいと思います。

(福岡県立若松高等学校教諭)



# 短歌創作について(二)

## —表現と思想—

夜久正雄

はじめに……盗作歌の問題点—短歌の真実性……戦争の歌—短歌の人間性  
……岩倉具視と三条実美—短歌の思想性……吉田松陰の遺歌—短歌と真心

## はじめに

昨年の阿蘇合宿で「短歌の哲学と技術」という話をしましたが、その時は何とかして皆さんに歌を創っていただきたい気持が先に立って、随分緊張していたように思います。今年も前もってそれを読んで来て下さったと思いますので、改めて歌をつくるということの意義についてくわしく述べることは致しません。先程の前段の講義で、山田先生が、歌を作ることはこの合宿に於ては一つの強制と申って貰いたいと言われましたが、まずそんな風に考えて、一度創作の経験を試みて下さい。強制ということになると、勿論我々もその強制に服することになります。多少歌をやつて、批評をしたり、講義をしたりすると、どんな歌を作るだろうという期待を持たれはしないかと憂鬱です。しかし、歌を作る場合の立場としては、内的に全く平等だということは、先程くりかえして強調された通り、我々にとつて一つの法則といつてもよいものです。ですから、お互いにここで勉強してみようという気持で、自由に大胆に歌を詠んでいただきたいと思ひます。

午前中竹山道雄先生のお話を、私は深い感動を以て承りました。先生は、日本人全体が今日非常に不安定な精神的動揺を続けて来たので、これからは事実即して思想する態度を身につけてほしいと強調されました。事実をありのままに経験する、事実をそのままに認識す



るということの一つの道として、短歌は充分に検討に価するものと思います。

短歌は他人の経験を詠んだり、理屈を詠んだりするものではない。理屈とは、自分の経験と離れた法則、概念としてあるものですから、それを自分の感情とは別によむということはいけない。人生はこうでなければならぬとか、未来はかくかくになるはずであるというような一つの構図を描く。これを竹山先生は幻想とか、観念とかいわれましたが、それは歌にはならない。正岡子規はこれを理屈といって排撃しています。従って、観念ではない現実、理屈ではない感情を、つまり人生の事実を正しくつかまえる、それが短歌の一番基本の修行だと思えます。つまり、自分の感情をよむ、あるいは自分の経験したことを、感情を含めてよむわけです。こんな間違いのない、やさしいことはないはずなのに、それが

なかなか出来ないのです。我々が深い感動を受けたある経験を短歌によむということは、その経験をもう一度追体験することになります。というよりも、経験の意味をもう一度はつきり味わうことです。真実に経験をすることになりましょう。我々の経験したことを、表現の対象にしないでいると、それは水のように流れていつてしまふ。そうではなくて、経験したことの意味をもう一度経験することになることが本当の経験だと私は考えています。

それを少し具体的に述べてみましょう。歌によむというのは、五・七・五・七・七の言葉のリズムに、我々の経験内容を定着させることです。竹山先生のお話にも、安易に結論を出してはいけないとくりかえし言われましたが、短歌の表現に於ても同じことで、自分の経験がはつきり言葉に移るように努力をかさねることが必要です。歌の調子と自分の感情の流れが完全に一つになり、自分というものが言葉の中に完全に生きるところまで努力するわけです。その時の自分の感情を、びつたりと言ひ表わせる言葉を、沢山の言葉の中から選択するわけです。そういう言葉を連ねてゆくと、全体の歌の調子が自然に出て来ます。その調子の波に自分の心の感情がびつたり合った時、すぐれた歌が生れるでしょう。その時、自分の経験を本当に味わったということになるもののようにです。

事実をありのままに見るとか、事実をありのままに受けとめて認識するとかいうことが学

問の基礎であるならば、短歌は、そういう基礎になる心の働きを実現してゆく一つの修行と  
いうことが出来ます。歌を作る過程に於て、表現と感情がなかなかびつたりと一致しないこ  
とがあります。そういう時に色々な妄想が入りこんで来ます。うまい言葉を使つてやろうと  
か、自分の実感に自信が持てず、社会的に外在的に承認されているにすぎないものに安易に  
くつついてしまふとか、そういう妄想を排除して行くのです。そして自分の感情をありのま  
まに、正しく表現することに全精神を集中して行くのです。そして、言葉と自分の感情との  
関係をきびしく考えてゆくと、今度は人の言葉を聞いた時に、それがどういふ感情を表現し  
ているかということがよく分るといふことになります。そのこと自体が、短歌という表現の  
特色であつて、それが国民同胞感というものに連つている点については、前回の合宿記録を  
お読みいただいたらいいと思います。

### 盗作歌の問題点——短歌の眞実性

感情と言葉との関係が、表現の上にとのようになつて来るといふことについて、お手  
もとの資料によつて説明いたします。

#### 新年歌会始预选赛

尾根までもつづく草原つらぬきて新幹線の測量旗立つ

父祖の血の通ふ青田を貫きて新幹線の測量旗立つ

尾根までもつづくみかんの山々が帰省列車の窓に見え来ぬ

この三首の中に今年の新年歌会始の預選の歌があるのです。盗作事件としてすったもんだしましたから、多少短歌に関心をもっている人とか、新聞などを丹念に読んだ人は、盗作がどれかすぐ分るかも知れません。知っている人は別として、全然知らない人は、この三首の中で一番心にふれて来る歌に○印でもつけて置いて下さい。言葉というものに対する我々の直観的判断力を養う一つの道にもなりますから少し考えてみて下さい。……

第一首目が盗作の歌なのです。この歌はいうまでもなく、勅題「草原」の応募歌です。東海道新幹線、有名な夢の超特急の路線を測量する旗が、尾根までも続く草原をつらぬいて、ずっと立っているという意味なのでしょう。広い草原の真中に遠くまで測量旗がずっと立っていて、遠くの方では小さくなって殆んど見えなくなる。そういう状態の場合「つらぬく」という言葉を使うことは出来ません。しかし、尾根までも続いているような草原では困るのです。それも、草原をつらぬいて、尾根まで道が行っているというような草原では困るのです。でも、測量旗が相当の間隔をもちながらこれをつらぬくという表現はおかしいのです。従って、この歌は、「つらぬく」という言葉が間違っている、ありのままの表現ではないということがいえます。つまり言葉の選択が正しくない。この場合たまたま原作の方がわかってい

ますから、その間違いが正確に検討できるわけです。これは二首目の「父祖の血の通ふ青田を貫きて新幹線の測量旗立つ」の下の方を使つたわけです。「青田」というのは、おそらく井桁に区切られた田で、しかも自分の父祖の血の通うといつていられるのですから、自分の所有している、はっきりした限界をもつたものです。「尾根までもつづく草原」のような限界のないものではない。漠然と青田全体をつらぬくのではないのです。「つらぬく」という言葉は「列(つら)抜く」という意味なのでしょうが、語源の問題はむずかしいので、深入りはさけることにします。ともかく列のあるものを通すという意味で、昔から「玉をつらぬく」という言葉がよく使われています。そこで、青田をつらぬくということはいえるのですが、尾根までも続く草原を、道ならともかく、測量旗がつらぬくということはいえないと思います。

「つらぬく」という言葉には、抵抗のあるものに対してそれを貫徹して行くという意味があります。山をつらぬくというのは、トンネルを掘ることで、山の上へ行って向う側へ行くことをつらぬくとは言いません。山をつらぬくといえ、必ず山という抵抗物に対して、一直線につきぬけることです。それで、青田をつらぬくという場合は、自分の父祖の血の通つた、自分の限らない愛着のある田に対して、近代文明である新幹線が貫徹している。やがて自分がその土地を国家に収用されてしまふかも知れない。自分が本当に守っているものに対して、国あるいは近代文明というものが、つらぬいて来る。そこにつらぬくという言葉に心

の痛みがこもつて来るわけです。ところが一首目の「つらぬく」には、何の抵抗もないのですから、うその言葉が使われているわけです。

それでは何故そういう偽りの言葉が使われたのかというと、それは第三首目の「尾根までもつづくみかんの山々が」の上の方と、「貫ぬきて新幹線の測量旗立つ」の間に、勅題の「草原」を入れて作ったものだからです。一度歌会始の儀式に出てみたいという作者の心情は分らぬわけではありませんが、組合せで歌を作つて、うまく入選しようというのですから、自分の感情をありのままに述べることを本質とする短歌の立場とは全然違うのです。俳句は、組合せで出来る可能性もありますが、それでも心に感じたことが根本にあつて始めて可能となるのです。従つて、今年の盗作問題についての我々の反省は、ただ単に作者を責めるというようなことでは解決し得ない。作者は短歌そのものの本質を知らないからです。この問題が起きた時、作者は「自分は熱海辺を通つた時新幹線の測量旗をみた。それから中央線で諏訪のあたりを通つた時、尾根まで続く草原があつて、それが非常に自分の心を打つた。勅題を見たたん、その二つがちよつとくつついた」という意味の返事をしています。つまり、短歌というものは言葉を色々組合せてやればよいものだと考えているわけです。だから、この事件は、短歌についての無知を露呈したわけです。それにしても、わずかな言葉の間違ひによつて、これほどいつわりと真実がはつきり分れてしまうということは、短歌の



もっているきびしい真実性、うそは詠めないということ、はつきりと示してくれたわけです。

盗作を預選歌として入選させたことについては、選者の連帯責任が追求されることよりも、短歌そのものの現状に思いを致すべきだと思えます。素直によむという根本の姿勢を忘れて、主観的な幻想をちらつかせたり、不自然なポーズを示すような言葉を使ったりして、強いてわからない歌を作っている歌壇のひとつの欠陥がはしなくも露呈されたものだろうと思えます。従って、われわれは真実を、それにふさわしい言葉に盛るような地道な努力を傾けるべきだと思えます。

### 戦争の歌——短歌の人間性

次にもつと重大な、難しい問題を含んだ例をとり上げてみることにします。資料の次の歌に注目して下さい。

すがやかに晴れたる山をあふぎつつわれ御軍みいくさの一人となりぬ  
父母の国よさらばと手をふればまなぶた熱しますら男の子も  
筑波嶺のさ百合の花の夜床にもかなしけ妹ぞひるもかなしけ  
あられふり鹿島の神をいのりつつ皇御軍すめらみくさにわれは来にしを

三首目の歌は古い歌で「夜床」は「ゆとこ」と訛って読ませています。「かなしけ」は「かなしき」と同じ意味です。この歌はちよつと注釈が必要でしょうが、筑波嶺に咲いているさ百合のようにいとしい妻、夜の床にもいとしい妻は、昼もまたいとしいという意味です。この四首の歌を読んで特に感動の強い歌に○、どこかおかしいところがあると思われるものに×でもつけてみて下さい。……

では説明に入ります。この四首の歌は時代が全然違う歌で、後の二首は万葉集の防人（さきもり）の歌、前の二首は今度の戦争中に国民学校（小学校）の五年の教科書に載せられた歌なのです。当時私はこの二首を取り上げて感想を書いたことがあります。それから二十一年位経っていますが、その感想は現在でも変つて居りません。一首目の歌は非常にいい歌のように思われます。○印をつけた人が多いと思いますので、厳密に検討してみましよう。

「すがやかに」というのは、すがすがしいという意味でしょう。「御軍の一人となりぬ」は軍隊の一人となつたという意味です。「みいくさの一人となる」という言葉は、自分が軍隊の一員となつたというので、単に自分が軍隊の兵営に入ったということとは違うのです。もつときびしい運命を背負うということを意味します。ところが、「すがやかに晴れたる山を仰ぎつつわれ……」となると、後には八ハイキングにでも行こうVというような言葉がふさわしいのです。それも、すがやかに晴れた山を仰ぎつつ、自分は営門に入つて行つたとい

うなら、まだ分りません。しかし、何の人情もない人ならともかく、故郷や肉親を離れて行く人に、そういう感情がありうるでしょうか。まして、みいくさの一人となるという場合に当然起つて来る悶え、悲しみ、家族への心残り、そういうものを乗り越えて行かねばならぬ決意——といった悲劇的なものが全くないようにこの歌は作られているのです。実際にこういう経験をする人はいないでしょうし、かりにあつたとしても、それは全く特殊の経験、ほとんど架空の経験でしかあり得ない。こういう歌を国民学校の教科書に載せて、皆こんな風になれと教えることは重大な問題です。つまり、そこには人間の真実というものが完全に失われているわけです。恐らく架空の想像によつて作つた歌だと思ひます。もし作者があるとなれば、兵士となる悲しみなどを口にすると、人から非難されるかも知れないので、どこかにあつた歌の一部を借用して「われみいくさの一人となりぬ」の句をそれにくつつけたのかも知れません。これも偽りの歌です。偽りというのは、「かくかくであらねばならない」——道徳的な意味ではありません——という固定した観念によつて詠んでいるからです。軍隊に入るということはすがすがしいことではなければならぬという観念に基いて詠まれています。本当に軍隊に入るものの気持はそんなものではありません。悲しいけれども、それを乗り越えて行くという複雑な思いが、現実であらうと思うのです。

二首目に参ります。この歌にもおかしいところがあります。この歌はいよいよ祖国を離れ

て、戦地などへ行く時の歌だろうと思います。「まなぶた熱し」は、眼の裏がジーンとして来るといふ意味でしょう。もしこの句が「涙あふれつ」であるなら、さすがのますらをも声をあげて泣いてしまったといふ意味でよく分るのです。しかし、ジーンとして来たというのですから、それは人間として当然のことで、もしジーンとして来ないような人があつたらその人は人間ではないでしょう。この表現をつきつめてゆくとますら男の子は人間ではないといふことになる。ますら男の子の典型的なものは、石のような無感覚な、したがって酷薄な気持を持つているといふことになりましょう。

三首目と四首目は同じ人の作品です。三首目の意味はすでにのべましたが、ともかく自分の妻はいとしいといふことです。次の「あられふり」は鹿島の神の枕詞です。いくさ神である鹿島の神を祈りながら、すめらみくさ——天皇の率いたまう軍隊の一員としてやつて来たのに、それなのに妻が忘れられない、すなわち前の歌と深い内的な関連をもつて表現されているのです。これが人間の自然な感情であつて、それにわれわれは共鳴を感じることができるといふのです。

戦争中は、戦局が激しくなつてゆくにつれて、防人の歌のようなものは次第に省みられない歌になつてゆき、代つて、「すがやかに」や「父母の国よさらば」のような歌が教科書に載り、国民がそれを愛唱しなければならぬような雰囲気になつていたのです。その時すでに

人間の本当の感情、真心の価値が省みられなくなつてしまつたように思われます。そして、何か人情を無視した石のような心が架空に構想され、他人の悲しみも本当に理解することができなくなつて行つたのです。戦争中に自分の言つたことをふりかえつてみると、随分間違ひもあります、この指摘だけは正しかつたと思います。真実の表現と偽りの表現はなかなか判別しにくいのですか、常に内心の真実に即した表現を志して居れば、こんな心ない歌を作ることはないと思います。

日露戦争の従軍将兵の歌を集めた「山桜集」という歌集の中には、歌の言葉は稚拙でも真実の叫びがありました。次の連作短歌は中でも傑作ですが、それにしても前掲の今次戦争の歌とは根底から違つていると思われます。この歌には、真実の表現によつておのづから不退転の決意にみちびかれてゆくという短歌の本道が示されています。人間性を否定して理想を構想するのでなく、人間性にしたがつて理想に向つてゆくという人間の真実の道が示されています。この相違が、日露戦争と太平洋戦争との指導思想の相違だつたのではないでしようか。もしそうだとすれば、大きくいえば、この微妙な相違が、戦争の勝利と敗戦との、つまり勝敗の分岐点になつたとも言われましよう。

出征の折よめる

猿田只介

待ちわびし召集令をうけしより心をどりぬなにとはなしに

君の為国の為なりとはいへど老いしちち母思はぬにはあらず

勇ましきはたらきせよといひさして涙に曇る母のみことば

ふた親に妾わらはつかへむ国のためいざとはげますけなげなる妻

門かどの辺べに送るみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるる

手をつかへなみだぐみたる教子おしへこの姿を見れば胸さけむとす

いざやいざ朝日のみ旗おしたててふみにじらなむ露つゆの醜草しこぐさ

今までの実例によつて、その人の人生に対する態度が表現の中にどのように表われて来ることがお分りになつた事と思ひます。ありのままの自分の感情を言葉に表わしてゆこうといふ心の姿勢と、既成の觀念で人生を律してゆこうとする心の姿勢と、その二つが同じような歌の中に微妙な相違をもつて表われて来ます。そういう微妙な相違から、逆にわれわれは心の動きを識別して、自分の偽りを反省することもできるわけです。戦争中は、ある場合には、人間の自然な感情が抑圧されてしまつて、それを表現するとすぐ反戦主義というものに結びつけられた時代がありました。しかし、戦争に参加した人々は、様々な恩愛をのりこえて、時代の課題に応えたわけです。よく「滅私奉公」といいますが、人間は私を滅することは出来ません。私がないければ奉公などは出来ない。聖徳太子は「背私向公」といわれました。私は私としてさまざまな欲望をもち、さまざまな感情をもっているけれども、それをのりこえて

行くということ、なくしてしまふということではありません。そこに人生に処する態度の微妙さがあるのです。

### 岩倉具視と三条実美——短歌の思想性

岩倉具視と三条実美は、共に明治維新の元勳といわれた人ですが、この二人の政治家の作品を検討してみたいと思います。

公の御とがめを蒙りける歌ども

岩 倉 具 視

文久二年八月廿日けふは如何なる日にや、はからざるに重き勅勘を蒙り籠居落飾すべき旨仰せ下されぬ、恐懼申条なく悲歎血涙無念比するにまた物なし

いかさまに思ひわきてもかこちても涙のみこそ降増りけれ  
今はとて思ひきれども黒髪の乱れてすぢもわかれざりけれ  
勅なれば髪はきりもしそりもせむきよき心は神ぞしるらむ

○

夷らにからき目見せむしほ風の氷ふきとく春は来にけり

ふるばかり亜米利加船の寄せば寄せ三笠の山の神いますなり

おそろしき世にこそありけれ捨小舟人をのりても身を立てむとか(岩倉贈太政大臣集)

いづる日のかたをあふぎて打むせびなみながらによをいのるかな

うき雲のかからばかかれあまつ風ふきおこるべき時なからめや

いかにしてつくしの海による波の千重の一重もきみにむくいむ

つくしがたあまのとまやにさすらへて恵のなみをかづくかしこさ

かくばかり君がめぐみをうけながらつくさぬおみの身をはづるかな

うつせみのむなしき名のみおふ人の何のいさをか世には立つべき

よろづよの名こそをしけれうつせみのよの人言よさもあらばあれ（梨のかたえ）

岩倉具視の歌を見てゆくと、全体として自己を主張することに重点が置かれています。自己を主張するということから、自然に支配力の獲得というものに向って行きます。人生は人を支配するところに幸福がある、という人生観につながってゆきます。それに対して、実美の歌は没我奉公と申しますか、自分が公の中に没して行く、国の為、人の為に自分を捧げてゆこうということになるから、自分を主張しようということとは、心の働きがむしろ反対になっています。そういう働きが、真実の協力というものを生み出すわけです。

二人の間があるとき、俺がお前を支配するか、お前が俺を支配するか、ということではなしに二人で手を取り合って行こうということになれば、そこに自然に自分達を超えるもの



を発見することになる。岩倉具視の歌には、自我の拡大ということから、支配力に結びつくような心の姿勢があつて、これが最後には国を誤るものになつてゆくと考えられます。それに対して、三条実美のような精神は、自分をもつと大きなものに繋いで行こうとするものですから、協力、調和の精神に結びついて行くわけです。

明治初年の征韓論をめぐる論争は、その後の近代史の方向を決定したと思ひますが、簡単に言うと、岩倉具視の精神が政治的に勝利を占めて、当時の指導者たちの協力を志した三条実美は心痛の余り、人事不省に陥つてしまつたという事実が伝えられています。岩倉が取つた天下に対して、維新の志士として協力した西郷や江藤新平などが戦いを挑むという形になつて、結局、岩倉、大久保の権力支配が実現してゆくわけです。一方、実美の精神は明治天皇の御心にすべ納められて、立憲政治の基礎となつた帝国憲法や、教育勅語の発布という形になつて、近代日本の基礎を作り出して行くわけです。人間の心の姿勢は、そういう微妙な岐路にもなるのですから、歌を作るといふこと、真実を表現しようとする努力は、やがて次の時代をみちびく正しい光明となるものと信じます。この問題についてはかつて研究を発表したことがありますから、興味をおもちの方は拙著「三条実美歌集・梨のかたえとその研究」を御参照願います。

## 吉田松陰の遺歌——短歌と真心

最後に吉田松陰の「留魂録」末尾に書かれた五首の歌を読んでみましょう。

かきつけ終りて後

吉田松陰

心なることの種々かき置きぬ思ひのこせることなかりけり

呼出しの声まつ外に今の世に待つべきことのなかりける哉

討たれたる吾をあはれと見む人は君をあがめて夷攘へよ

愚なるわれをも友とめづ人はわがとも友とめでよ人々

七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はむこころ吾忘れめや

これは短歌の歴史に於ける傑作の一つであると思っております。たまたま五首の連作になります。子規が連作短歌ということを出す三十数年も前に、連作によつて自分の最後の心持を述べたものです。少しも思い上つたところのない、全くありのままに自分の心情を表現したものです。本当にありのままを表現することができるためには、一方で決死の覚悟が並行するもののようなのです。

一首目ですが、心にある様々なことは全部書きつけ終つた、もう後に思い残すことは何も無い、というので非常に具体的なのです。二首目は問題はないでしょう。三首目の「夷攘へ

よ」は排外的のようにも聞えますが、列強の侵略の前に植民地になるか、ならぬかの岐路であつた維新前後の時期を考えてみますと、この言葉の生きていることが分ります。四首目では、松陰は自分のことを「愚かなる」と言っています。松陰には「益々愚にして、益々至れるなり」という言葉もあります。聖徳太子の「共是凡夫」という御言葉を思い出させます。愚かしい自分をも友として愛でてくれる人は、自分の友達をも友達として力を合わせてくれという意味で、言葉で言いようのないような悲しい友情の表現を残して行つております。最後の歌は、日本の独立ということが自分の終生の願いで、この一念だけは永遠にこの世に残したいという意味です。われわれが日常普通に歌を作る場合の例としては深刻すぎますが、まっすぐに真心を表現した歌が如何にすばらしい表現になるかという例を一言お伝えしたかったです。どうか皆さんも自由に大胆に、言葉をよく選んで真実の歌を作つていただきたいと思ひます。そこに今日の日本の基礎となつた明治維新の精神を継承する道もありました。うし、また長い日本歴史にあらわれて来た日本人の真実を求める心もちの相続開展もあらうと信じます。

(亜細亜大学教授)

## 雲仙合宿歌集（抄）

寄せ合ひし寢床にいねて友どちと語らふ夜は心なごむも  
長崎大学 有田二彦

水清き谷間に生ふる若竹の伸びゆくごとくわれも生きなむ  
長崎大学 合原俊光

霧ふかき雲仙の地に降り立てば身内かすかに震ふがごとし  
中央大学 柴田悌輔

九十九折の坂道あまた上り来て合宿地近し緊張の満つ  
立ちこめてまた薄れゆく霧の間にユース・ホステル間近に見ゆる

語らへばいつしかなごみたはむるれば心やはらぐ友はよきかな  
九州大学 筒井 知

なつかしき友らの顔の一斉に我が眼を打てばたじろぐ思ひす  
九州大学 木田浩隆

幾月も思ひ続けし合宿もはやいまここに開かれむとす  
滋賀大学 徳地康之

えにし得て集へる友ともうともによろこびあひて山を降りたし

しきしまの道を真すぐに進みゆきし人の心に思ひはせつも  
亜細亜大学 亀井孝之

去年の友いかにかあらむ今日の集ひに姿見えぬはさびしかりけり  
亜細亜大学 高村光紀

あらがねの岩をやぶりて噴き出でぬ大地の下に凝りし力は  
早稲田大学 福島武志

去年の春吾来し時も雲仙は雨降りをりき今日の如くに  
佐賀大学 楠田幹人

湧き出づる熱き泉をながむれば測り知れずも大地の力は  
神奈川大学 水上末弘

岩が根をやぶりて白く噴き出づる熱気の声に一人聞き入る  
宮崎大学 大沢 勲

友ら皆ひとみ輝かし語り居り言葉いで来ぬ我身もどかし  
宮崎大学 小野幹男

ホステルの屋上に来ていこひ居れば湯上りの身に山風涼し  
熊本大学 藤原光行

真剣な友の言葉に心打たれ三日は過ぎぬ雲仙合宿も

高崎経済大学 浅子

修猷館卒 稲津 利比古

岩の間にたぎり湧く湯のはげしさに自然の力まのあたり見つ

熊本大学 平 休憲

船足もおそしと思ふ雲仙に同信の友われ待ちゐるに

早稲田大学 浮田 昌次郎

雲仙の地表を洗ふ湯の川の流れに沿ひて新しき宿立つ

熊本大学 田端 稔

地底より吹き上ぐる白煙みつむれば我が胸もかくあれと思ふも

酪農大学 津下 章

天心の書をひもとき輪読す熱き血潮のわく思ひして

亜細亜大学 住吉 俊彦

山なみのかなたに見ゆる干々石湾ふるさとの海になぜか似てゐる

岡山大学 八津谷 義仁

ことはりにあらずば肯んぜぬさかしらのわれは疲れてかしらのみ熱し

山道を友と歩みつつ仰ぎたる遠き空すでに秋を感じる

長崎大学

横田貞三

親しげに語りし友のまなざしにとぎせし心ほぐるる思ひす

長崎大学

藤沢雄一郎

我が友にこのすばらしさ伝へむと絵葉書求む雲仙地獄

島根大学

岩本晋

雲仙の地獄に近き石原はすすき生ひいで水流れたり

長島大学

大坪雅秀

地獄巡り友と写し合ふ写真機にも白き蒸気ははつきりと見ゆ

鹿児島大学

花田徳行

湯けむりのこむる岩間をのぼりつつ師の言の葉に耳かたむくる

高崎経済大学

大矢良隆

鉾杉の群がり生ふる谷あひに輪をえがき飛ぶ鳥のすがしさ

鹿児島大学

甲木正行

雄大な雲仙の山ながむればかくぞあるべきますらをのこは

九州大学

西元寺紘毅

かたくなに心とぎせし友が今にこやかに笑ふそのうれしさよ

昨日まで視界封じし濃き霧も今は消えたり遠き海見ゆ  
京都大学 手島俊彦

わが友の心こもれる歌聞けばいつしかわれの身もひきしまる  
九州大学 友池仁暢

緑濃き合宿の地を昨日まで埋めし霧も今日は晴れゆく  
長崎大学 尾形紘行

山あひに低くこめたる雲間より小浜の海の青々と見ゆ  
東京水産大学 山本伸治

水澄めど底白き川雲仙の地獄谷より流れ来しかな  
高崎経済大学 和田周三

雨あがり遠く近くの赤松の木膚の色は目にはえて見ゆ  
鹿児島経済大学 東橋 鴻太郎

真実を語らはむとて集ひたるわが師わが友にぎはしきかな

国学院大学 高智武徳

夏の朝霧あがりゆく山ぎはに冴えし青空見ればすがしき



岡山大学 下方紀一

友らみな心ひらきて語らふを見ればかなしきかたくななわれ

わが心とざせしままにふるさとへふたたび帰るか口をしきかな

宮崎大学 木川勝則

雲仙の地獄は山肌白くしてひびく地鳴りの聞え来るなり

岡山大学 高杉嘉治

雲仙に集ひ来りて友らみな幼なじみのごとく語らふ

下関市立大学 平岡格

あせれどもわが思ひこめ真実を歌によみ得ぬ苦しきおぼゆ

岡山大学 二宗和義

人として生きゆく道はいかにかと黙しつつ歩む小地獄の道

神戸大学 寺川真知夫

先生の真心詠みし歌聞きてわが不真面目の省みらるる

長崎大学 沢部寿孫

思ひをば三十一文字に続べなむに続べなむことのいかにかたきか

忙しきたつきをおきて先輩は集ひ来給ふ遠きかなたゆ

半年を経れば世にいづる身にあれば先輩のごとく生きてゆきなむ  
霧はれて緑いやます谷あひにひぐらしの声高くなりゆく

活水女子短大

鮎川圭子

西陽さす山の上なる雲はゆき聞えて来るはひぐらしの声

鹿児島大学

本田優子

岩間よりほとばしり出て流れ来る湯にこはごはと手を入れて見る

鹿児島大学

阪本千穂

たちこめし霧はれゆきて一面のすがしき緑の山の見え来ぬ

ただひとり遠くをみつめ思ひる友のところに何を語らむ

福岡学芸大学

龍ミナ子

木の間よりもるる光は目に痛ししづむ心をなぐさめやらす

福岡学芸大学

鳥飼勝子

あつき湯の湧きて流るるそのごとくうちとけゆくか合宿の友と

長崎大学短大

浅岡千秋

問ひかくる友にまことを伝ふべき言葉見いでずわれはもどかし

三菱電機 田川美代子

いく度も訪ね遊びし雲仙も友と集へば思ひ新たなり  
夏草の茂る岩間に友どちと空仰ぎつつ語り合ひたり

神奈川県高校教諭

瀬戸賢二

手がかりもなく過し来しこのわれも日毎に心開けゆくなり

国文研

瀬上安正

すぎて来し三角の港いづくかとはるか島のかげにもとめつ  
そそり立つ山のいただき白雲のかがやく彼方友ら待つらむ

国文研

徳永正己

幾度か子等に約せし海水浴も果せぬままに我いでたちぬ

国文研

小林国男

合宿を間近にひかへし今宵しも天心のふみひもときにけり  
さかまける世界の波に立ち向ふ明治日本の姿か天心は

国文研

三重野 悌次郎

ためらひつつ発言せむと面あげし女子学生の眸すがしも

国文研

岡本弘之

八月になれば九州へ行く父と子らはきめ居り年ごとなれば  
有明の海をわたれば友のまつ雲仙岳はすでにせまりぬ

去年の夏激論かはして別れにし友と今年はなごみて語る  
国文研 湯津堂 義弘

待ちかねし師のみ姿は今ここに車降り立ち笑みていませり  
国文研 行武 靖枝  
語られし師のみことばの一言も聞きもらさじと息はひそめぬ

めさむれば下関なりまむかひの門司のともしびまたたきやまず  
国文研 青砥 宏一  
今よりは海底トンネル汽車ゆくとその子に話す親もありけり

霧雨に濡れつつ急ぐ学生に傘さしかけてともに歩めり  
国文研 南 正人

我が友ら待ちてあらむと心せきあはたしくも乗れるこの船  
国文研 加藤 敏治  
待ちわびし集ひ明日より始まると思ふ心のにぎはしきかな  
あけくれにたつきのために働きて疲れし身にも力湧きくる

なだらかにつづく山麓つきぬけてわが乗るバスは雲仙路を行く  
修猷館高校 小柳 左門  
いかにして喜ばさむと思ひつつ我はつづりぬ母あての文  
目の覚めて朝鳥の声に聞き入れば心すがしき霧晴れねども

## あとがき

雲仙の山をおりてから半年、編輯の仕事に着手してからもすでに三ヶ月の日数が流れた。その間合宿教室に参加した学生を中心とする活動は東は東京から、西は長崎に至るまで各大学を中心に営々としてつづけられ、今年の一月には、全国の各大学の代表約三十六名が福岡に集って今年度の合宿教室にそなえて「前進の集い」が行われた。この集いは二泊三日の短時日ではあったが、全く学生自身の企画と運営によるものであって、昭和三十一年国民文化研究会が発足して以来はじめての画期的なひとみであった。

われわれが編輯の筆をとっている間、絶えずわれわれの胸に去来し、きびしくわれわれをはげましてくれたものは常に、この溢れるごとき学生たちの清純なおもいでであった。この書物が世に出ることが出来たことも、社会各層の有識者各位の御支援によることは勿論ながら、荒涼たる学園の中で、道を求めてやまぬ学生たちのはげしい祈りに支えられてのことであった。

学生の一人はそのおもいをガリ版にすって全国の友に次のように呼びかけている。

「私達は決して特殊のことをやっているのだとは思いません。平凡な人間として、日の丸を愛する日本人として、あまりにも当然のことをやっているにすぎません。ただ当り前のことが当り前のこととして通用しない世の中において、私達のやっていることが、ともすれば特殊に見られなければならないということは、正に嘆かわしいことだと言わざるを得ません。だが私達は決して嘆くにとどまるものではありません。どうしたら少しでも社会をよりよくすることができるか、どうしたらいくらかかなりとも政治をより明るく

することが出来るか、私達なりに精一杯努力を傾けていこうとするのです。」

ともあれわれわれのいとなみが、徐々にではあるが、世代の間に横わっている異常な深淵をこえて、一すじの流れとなつて動きはじめたことを思えば、いま編輯の筆をおくにあたつて、千言を費しても言いつくせない感動と謝念が、われわれの胸に迫ってくるのを抑えることは出来ないのである。

今年度の合宿教室は八月七日より四泊五日の日程で鹿児島島の桜島国民宿舎で行われることになつており、講師としては、昨年にひきつづき木内信胤先生、更に三十六年度の雲仙の合宿教室に御出でいただいた、文芸評論家小林秀雄先生をおむかえすることに決定、御快諾を得ている。この合宿についての御問合わせは、東京都中央区銀座七丁目三、柳瀬ビル三階、国民文化研究会または鹿児島市上荒田町二〇九一川井修治氏あてに願ひしたい。なお例年、合宿直前に行われていた予備合宿は時期を早めて、三月二十七日より五日間長崎県大村市において、学生自身の運営によつて行われる予定で、目下着々とその準備がすすめられていることを附記しておきたい。

昭和三十九年二月二十三日

編輯委員

(北九州)

山田輝彦

(福岡)

小柳陽太郎

国民文化研究会発行図書目録

A 6版 88頁 定価 150円 千40円



# 混迷の時代に指標を求めて

## 青年、学生に訴う

青年、学生諸君!!

われわれ―国民文化研究会―は、諸君に深い関心と大きな期待を寄せている。

なぜならば、諸君は国民各層の中でもっとも活力に富み、真理と正義に対して、もっとも敏感な年令の人たちであるから。次代を背負うものは諸君である。

混迷に沈淪しつつある祖国の命運を開く鍵を托されたものは、諸君をおいて他にはないからである。

このレポートに収録された内容についての価値批判は読まれる方々のお心のままにおまかせすべきですが、こうした事業が自発的に生まれ得たこと、三十才台の人々が、直接に二十才台の人々の啓蒙にのりだしたとなどは、味うべき問題をもっていると思う。

―「はしがき」から―

## 講義

経済学の考え方と日本経済への

適用および政策の方向：石村暢五郎

平和革命論の検討：川井修治

世界史の発展：広田洋二

日米開戦の真相：渡辺明

ソビエト第二十回大会における

「スターリン批判」を中心に：日下藤吾

マルクス資本主義崩壊必然論

について：吉田靖彦

共産治下国民生活の実態：名越二荒之助

昭和史をめぐって：森裕三

社会主義文学理論の検討：山田輝彦

民族的抒情の回復を阻むもの小柳陽太郎

抒情詩論：夜久正雄

日本政治の再建のために―特に天皇制の

問題について―：小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等―写真



A 6版 定価50円 ㊦20円



# 民族自立のために

—ぼくらはかく折り かく意志する—

—戦死した友と未だ見ぬ子孫に—

この書を捧げる—

国民文化研究会

## 目次

- 民族復興の根底をつちかうもの
- 合宿にいたる経過
- 合宿人員の構成
- 経過報告
- 班別編成
- 班別討論
- 全体討論
- 講師別討論

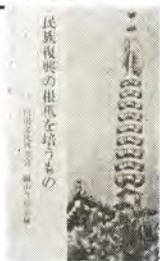
- 合宿感想集
- 参加者からの手紙
- 参加学生、青年に訴う
- 写 真—

## 講義

- 現代日本の盲点……………名越二荒之助
- 現代思想の根本課題……………川井修治
- 歴史観の諸問題……………浅野晃
- 世界経済の基本的動向……………伊部政一
- 日本経済の特質と
- 経済計画の方向……………石村暢五郎
- 日本文化の位置……………竹山道雄
- 現代哲学の窮極の問題……………高山岩男
- 日本文化の源流—聖徳太子の
- 信仰思想を中心として……………高木尚一
- 日本文化の血脈……………南波恕一
- 学生生活と国民生活……………小田村寅二郎

新書版 113頁 定価 100円 30円

# 民族復興の根柢を培うもの



○パネル式座談会「共産社会に住んでみて」

—在ソ11年児玉氏・杉本氏・同8年池田氏

同5年名越氏・同4年富岡氏・同2年川井氏

○参加者全員に和歌創作の手ほどきをなし、

全員創作を行なう。

○班別討論会

○感想発表会

……わたしたちの念願する窮極の目標は、真の意味での日本民族の自立であり、正しい意味でのその復興である。まことの「独立と平和」を念じながらこの書を刊行した。

—写真—

## 講義

合宿教室の意図するもの……川井修治

現代日本の盲点……名越二荒之助

所謂、資本主義社会と

社会主義会について……石坂豊明

共産主義対策への私見……木下彪

経済学の本来的思考……石村暢五郎

古典のいのち……南波恕一

聖徳太子研究と現代……高木尚一

日教組は現状から

脱却すべし……浜田収二郎

人間性に立脚する政治……小田村寅二郎

分裂を統一に導くもの……南波恕一

民族の明日を求めて

新書版 250頁 定価 200円 40円

# 民族の明日を求めて

「はしがき」から

現代は「わかりきったこと」がわからなくなってしまう  
っていたり、「あたりまえのこと」が、かえってもの  
めずらしげに見られたりしている。

国を愛することも、民族の道統を求めすることも、なに  
か、かたくなな人たちだけのものにされてしまって、現  
代—終戦後—の日本に生きる人にとっては、それらは、  
はれものにさわるような、こわいしろものにされたまま  
になってしまった。

## 目次

- 第一日 友らの邂逅(かいこう)
  - 第二日 民族の意志回復のために
  - 第三日 思想の流れをみつめて
  - 第四日 よろこびと前進のために
- 附 合宿感想集、外  
—写 真—

講義

- 共通の広場の形成するもの：瀬上安正
- 人間性「解放」の道
- 国民共同体の現実—基盤—小田村寅二郎
- 天皇制の本質：森 三十郎
- 日中関係の過去・
- 現在・将来：木下 彪
- 道徳の周囲：山田輝彦
- バイブルを統綜する
- 日本文化の遺法：名越二荒之助
- 生理学・医学の流れ：小川 幸男
- 階級史観と民族の問題：川井修治
- 日本における社会主義の運命
- 革新陣営の発生と
- 現状および将来：菊池 紳隆
- 戦後意識の論理
- 現代教育刷新の基本課題：勝部真長
- 詩的精神興隆に
- 期待するもの：小田村寅二郎

B 6版 365頁 定価 500円 千90円

(三部作その一) 理想社 刊行一

# 国民同胞感の探求



## 目次

はしがき

合宿教室の誕生の背景

一、現代の国民思想について

二、全学連の動きについて

三、全学連にどう対処すべきか

四、時代の断層と取り組んで

合宿教室の運営のあらまし

一、講義と班別討論の関連性

二、チューターシップ

三、人生観に裏づけされた諸講義

阿蘇合宿教室の記録

一、未知の者ここに集う(第一日)

二、緊張する心を講義と討論に(第二日)

三、心の揺らぎと青春の歓喜と(第三日)

四、時代の断層をふみ越えて(第四日)

五、国民同胞感の生成へ(第五日)

はしがきの感想文から

あとがき

一写 真一

## 講義

人生・学問・祖国……………川井 修治

学生生活に対する要望……………宝 正久

現代と心理戦……………今立 鉄雄

学生運動への疑問点……………植木 九州男

社会思想の構造と

マルクス主義……………長野 敏一

学問論……………戸川 尚

陶淵明の詩における

東洋的人間像……………津下 正章

わが国固有の人間観の特徴……………野口 恒樹

日本人のころ……………花田 大五郎

マルクス経済学の生成と

近代経済学……………石村 暢五郎

畏と敬と恥……………水野 武夫

第二次大戦論……………中山 優

歴史なき現代に思う……………木下 彪

マッカーサー憲法と

国民主権……………森 三十郎

平和国家建設の

基本的課題……………小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等

B 6 版 433頁 定価 560円 100円

(三部作その二) 一理想社 刊行一

# 続 国民同胞感の探求

## 目次

はしがき  
現代の問題点

一、初の宇宙人・ガガーリン少佐

二、ソ連の教育と日本の教育

三、全学連と大学自治会

付、自治会活動への所感

「雲仙合宿教室」の目ざしたものの

「雲仙合宿教室」の記録

一、学生による全体討議(第一日)

二、講義から班別討論へ(第二日)

三、唯物史観の横行を許さず(第三日)

四、経済の諸問題とその研究方法論(第四日)

五、「開かれた日本人」へ(第五日)

はしがきの感想文から

十日後に書かれた感想文から

あとがき

—写 真—

## 講義

体験と思想……………夜久 正雄

現代の思想的課題……………斎藤 知正

新中国建設の原動力……………佐藤 慎一郎

日本文化の伝統と

現代的意義……………黒岩 一郎

現代政治の批判と

新しい指標……………羽田 重房

世界の経済と

日本の経済(一)……………木内 信胤

良識について……………花田 大五郎

五日間の生活を

ともにして……………小田村寅二郎

思いのままに訴う……………

木下 彪・野口 恒樹

水野 武夫・峯 辰次

植木九州男・津下 正章

班別討論・意見発表会・検討会等



B 6 版 325頁 定価 500円 780円

(三部作その三) 理想社 刊行一

# 続々 国民同胞感の探求

続々 国民同胞感の探求

## 目次

はしがき

国民同胞感………小泉 信三

—毎日新聞より転載—

学問の興隆のために

正しい研究方法を求めて

………小田村寅二郎

第二次雲仙『合宿教室』のあらまし

『合宿教室』における講義(下記)

『合宿教室』運営の焦点

一、『班別討論』と『夜の検討会』

二、大教協・国文研会員の所見発表

三、合宿教室の総括的所見

はしがきの感想文から(77通)

あとがき

—写 真—

## 講義

国民同胞感の育成への

努力と指向………小田村寅二郎

学問と人生………津下 正章

E E C をめぐる世界の経済と

日本の経済………木内 信胤

学生時代を回顧しつつ

現代の学生諸君に………花田 大五郎

吉田松陰を中心とした

幕末日本の文化精神………川井 修治

小林秀雄先生のご講義

「現代の思想」………国武 忠彦記

(所見発表) 大学教官有志協議会………

水野武夫・黒岩一郎・末吉 哲

植木九州男・吉田靖彦

国民文化研究会………

小柳陽太郎・山田輝彦・岡本弘之

宝辺正久・加藤善之・徳永正己

坪井保国・加藤敏治・関根康弘  
瀬上安正

“合宿教室” レポート { No. 5 国民同胞感の探求  
 No. 6 続国民同胞感の探求  
 No. 7 続々国民同胞感の探求  
 大学教官有志協議会 } 共編  
 国民文化研究会 }  
 一理想社 刊行一

## 国民同胞感の探求 三部作セット



定価 1,560円 千 270円

若き青年・学生の勉強の友として、この三部セットは、疲れた心をいつも休めてもくれるし、また無限の発展の可能性をたたえる祖国日本の学道の息吹きとその生命のほとばしりとを、身近かにしのばせてくれる。

● 合宿教室 ● レポートは、これからも毎年一冊ずつ出版されていくであろうが、本書はぜひとも書架に一組お備えください。

……お申込みは国民文化研究会へ……

新書版 248頁 定価 200円 50円

# 新しい学風を興すために

(附) 合宿教室における短歌創作の記録



「いまここに第七回目の合宿教室を迎えるにあたって、私たち主催者は今回からは「国民同胞感」を「探求」という心境を脱して、いままでの六回にわたる合宿とはやや心組みを変えております。すなわちこれからは「国民同胞感」を日本国中に拡大していこう、樹立していこう、健全に拮がらせよう、ということを目ざして四泊五日の合宿教室を踏み出したいと考えているのです。」

「この合宿教室のめざすもの」から

―巻末には参加者全員の短歌作品の総数九百余首の中より一人一首以上をとり、二五八首の短歌を収録した―

## 目次

- 一、国民同胞感樹立のために  
第七回「合宿教室のあらまし  
この合宿教室のめざすもの
- 二、合宿教室における講義  
現代の思想的課題……福田 恆存  
世界の見方……木内 信胤
- 三、合宿教室における短歌創作  
短歌の哲学と技術……夜久 正雄  
第一回短歌創作と批評  
第二回短歌創作の記録



A 6 版 146 頁 定価 200 円 50 円



著 者

# 聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業

—黒上正一郎著—

原著 第一高等学校昭信会版

昭和十年七月二十一日

本書は原著の約半分を  
戦後に再刊したもの

著者黒上氏は昭和五年、三十才の若さ  
で死去した。明治三十三年、徳島市の素  
封家に生まれ、商業学校をでて、阿波銀  
行に勤めた。聡明な宗教家の素質は、少  
年時代から芽生え、独学で親らん、日蓮  
の経文から、聖徳太子の研究に進み、特  
に本書の述作には、一語一句に心血を注  
いだ。昭和三年三・一五事件のあと、一  
高に昭信会、高師に信和会という研究ク  
ループが生まれたが、共産主義運動の渦  
巻くなかで、著者は毅然たる態度で学生  
を指導し、太子のご精神を若い次代の青  
年に伝えたのである。

## 目 次

再刊上梓のことば

序 説 東亜大陸文化と日本・推古朝と  
明治時代・日本文化創業の総合  
的指導者・聖徳太子の内治外交

序説付 聖徳太子の体験過程

第一編 聖徳太子の人生観と政治生活

国民生活の内的改革と三宝興隆

憲法第一条と十條―蒼生と共なる道

自己分別の心理を批判する内的平等

観 第二編 聖徳太子の信仰思想と国民精神

常住法身と帰依の対象

仏法僧の意義

一体三宝と別体三宝

太子のおことばと明治天皇御製

古事記に表現された現実的民族精神

万葉集の防人（ささきもり）の歌

聖徳太子憲法十七条

聖徳太子の年譜

聖徳太子の時代：解説……高木尚一

附、黒上正一郎遺歌抄

B 6 版 206 頁 定価 250 円 760 円

— 明治書院 刊行 —

# 歌人・今上天皇

夜久正雄著 (アジア大学教授)

歌人・今上天皇

夜久正雄著



## 御歌

高原に

みやま

きりしま

美しく

むらがりさきて

小鳥

とぶなり

## 目次

まえがき

御歌研究

御歌の語法・御歌の音調・御歌の内容・家庭感情の御歌・平和の祈り・御歌と日本現代史・御歌歌風の展開  
叙景の御歌・三十年発表の御歌・明治天皇御製との比較研究・御歌「ともしび」

御歌解説

歌会始の御歌・終戦直後の御歌・植林関係の御歌・地方巡幸の御歌・生物学者としての御歌・神社祭祀関係の御歌・母宮貞明皇后をしのぶ御歌・ご家庭生活の御歌・その他の御歌

あとがき

初句索引

口絵写真



B5版(8頁) 毎月1回発行  
昭和36年11月創刊  
発行所 国民文化研究会

— 月刊 —

# 国民同胞

定価 1部20円 年間360円(送料共)

---

われわれ国民文化研究会は、現代の学生生活の中に何をねがい、何を求めているか。それはイデオロギーの相剋を越えたゆたかな国民的心情を  
あまねくくりひろげる以外にはない。これはまことにきさやかな機関紙  
であるが、この中にこめられたわれわれのねがいに、是非とも耳をかた  
むけていただきたいと思う。

---

申込先(この機関誌に限り下記の通り)

下関市南部町3 宝辺正久方

月刊「国民同胞」編集部

— 振替 下関1100 —

—新しい学風を興すために—  
(第二集)

昭和三十九年四月三日発行

定価三〇〇円  
〒 50 円

編者 大学教官有志協議会  
国民文化研究会

編集委員代表 小田村寅二郎

発行所 国民文化研究会

東京都中央区銀座七ノ三  
柳瀬ビル三階  
振替東京六〇五〇七番

落丁・乱丁のものは、お取り替えいたしません



大学教官有志協議会 編  
国民文化研究会